

第IV章 遺物

1 木簡

第113次調査区の石組井戸SE9328から1点¹⁾、第118次調査の南面内濠SD502から3点(すべて削屑)、第124次調査の木屑土坑SK9740から14点(すべて削屑)²⁾、合計木簡18点(うち削屑17点)が出土した。各遺構の時期は、石組井戸SE9328が13世紀後半、南面内濠SD502が藤原宮期、木屑土坑SK9740が藤原宮直前期である。このうち釈読可能な木簡5点を報告する。

1の「下寸主」は、「しものすぐり」と読む。「寸主」はカバネで「村主」「主寸」にもつくり、「寸」は「村」の省略形としてよく使用される。「寸主」に続く字画は、個人名あるいは漢数字「二」の可能性はあるが断定できない。冒頭の「□人」には、百濟人や新羅人などの帰属をあわらず用語、あるいは地名や人数が想定できる。

2は2片が接合。2文字目は残画から「男」と読み、個人名の可能性が高い。3も2片が接合。「口」の単位は、飛鳥藤原地域の木簡では、大刀、小刀、大盤、針、鋏などに類例がある³⁾。4は正丁14人に相当するものと思われる。5は1文字のみであるが、釈読不能の木簡のなかに、1点だけ同一木簡と思われるものがある(接合しない)。「下」は、位階や氏の名称などが想定できる。下村主の形成 下村主という名称は、国史では養老4年(720)の河内手人刀子作広麻呂への賜姓記事⁴⁾を初見とするため、雑戸号の免除とともに、このとき下村主姓が成立したと考えられている⁵⁾。

ところが、平城遷都直前期とされる藤原宮跡の遺構か

ら「下寸主」と記された木簡が出土しており⁶⁾、養老4年以前の事例はすでに存在していた。さらに、1が出土した遺構の年代が藤原宮直前期であることから、7世紀末の事例を確認できたことになる。7世紀末に下村主が成立していたならば、養老4年の賜姓記事の認識を改める必要があるだろう。なぜなら河内手人広麻呂は、既存の下村主姓を賜ったことになるからである。

下村主は一般に、知識あるいは写経所に出仕する経師や校正などとして知られていた⁷⁾。ところがそうした下村主氏は、元来いた下村主に河内手人らを加えた複合的な組織であることが、1によっていっそう明白となったのである。今後は、広麻呂が下村主姓を賜った経緯や、一つの氏としてどのように機能していたかを探ることが課題となるであろう。

註

- 1) 『藤原木簡概報15』
- 2) 『藤原木簡概報17』、『木簡研究』第25号、2003年。なお、第124次調査の木簡で、新たに接続したものがあるので合計数を変更した。
- 3) 『藤原宮木簡一』471号ほか
- 4) 「戊申、河内国若江郡人正八位上河内手人刀子作広麻呂、改賜下村主姓、免雑戸号」(『続日本紀』養老4年6月戊申条)
- 5) 佐伯有清編『日本古代氏族事典』雄山閣出版、1994年
- 6) 奈良県教育委員会編『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊 藤原宮-国道165号線バイパスに伴う宮域調査-』1969年、93頁
- 7) 『寧楽遺文』中613・618頁、『大日本古文書(編年)』25ノ174、14ノ124、5ノ427、22ノ472、9ノ39ほか

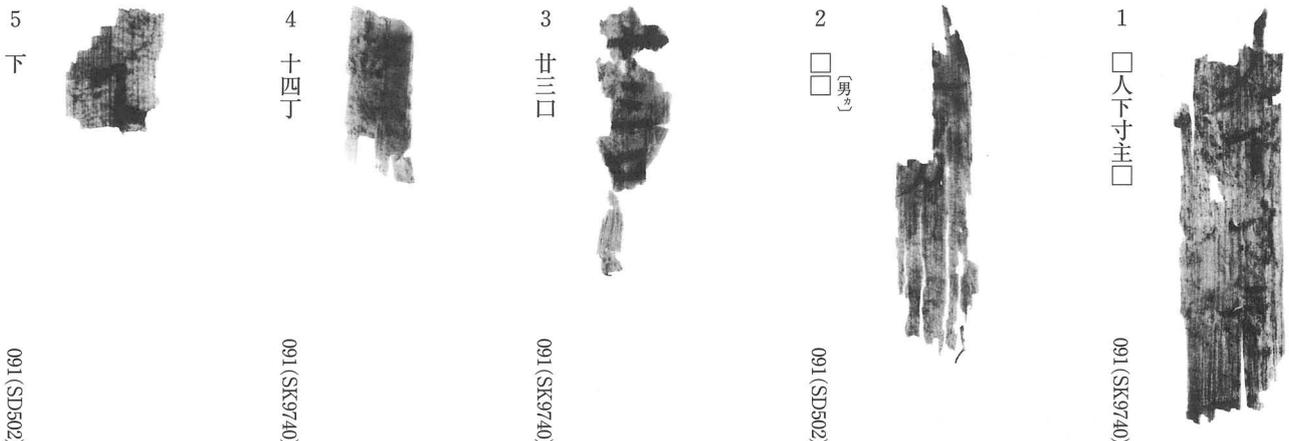


Fig. 10 出土木簡(5/4)と釈文

2 瓦 類

本調査区から出土した瓦類は、平瓦が圧倒的に多く、ついで丸瓦、そして少量の軒丸瓦・軒平瓦・面戸瓦・熨斗瓦がある。そのほとんどが、飛鳥時代から藤原宮期にかけての瓦であるが、近世から近代にかけての瓦も少数含む。しかし、後者はすべて池の堆積土もしくは池の水路からの出土なので、ここでは取り扱わない。

出土した瓦の量は、調査区や遺構によって大きな偏りがあり、南面外濠SD501、南北溝SD9561もしくは第113次・131次調査区から出土したものがほとんどである。ここでは、上記の遺構または調査区からの出土瓦を中心に、軒瓦、丸・平瓦、道具瓦の順で報告する。

A 軒丸瓦 (Fig.11, PL.16)

軒丸瓦は5型式6種、計8点出土した。その内訳は、6273Bが1点、6274Abが1点、6275A・Bが各1点、6276Cが3点、6278Bが1点である。出土量は丸・平瓦

の出土量に比べて非常に少ない。いずれも藤原宮所用の軒丸瓦であり、ここではその中で残存状態の良い4点を報告する。

6273型式は、外区に珠文、外縁に凸鋸齒文を配する複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A～Dの4種あり、B種のみ出土した。

1は、6273型式B種の破片資料。2次焼成の煤が瓦当裏面から側面、瓦当上半部にかけて付着するので、裏面調整は不明だが、側面には範の被りの痕跡が確認できる。丸瓦の接合部には丸瓦凹面の布圧痕が反転して残っており、丸瓦端部は未加工だったことがわかる。焼成は軟質。精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は7.5Y6/1灰色。第113次RK48褐色土出土。

6275型式は、珠文・線鋸齒文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A～E・G～K・Nの11種があり、中房の連子の数が1+4+12のA種と、1+4+8のB種が出土した。

2は、6275型式A種の完形品。全長40cm、瓦当部から

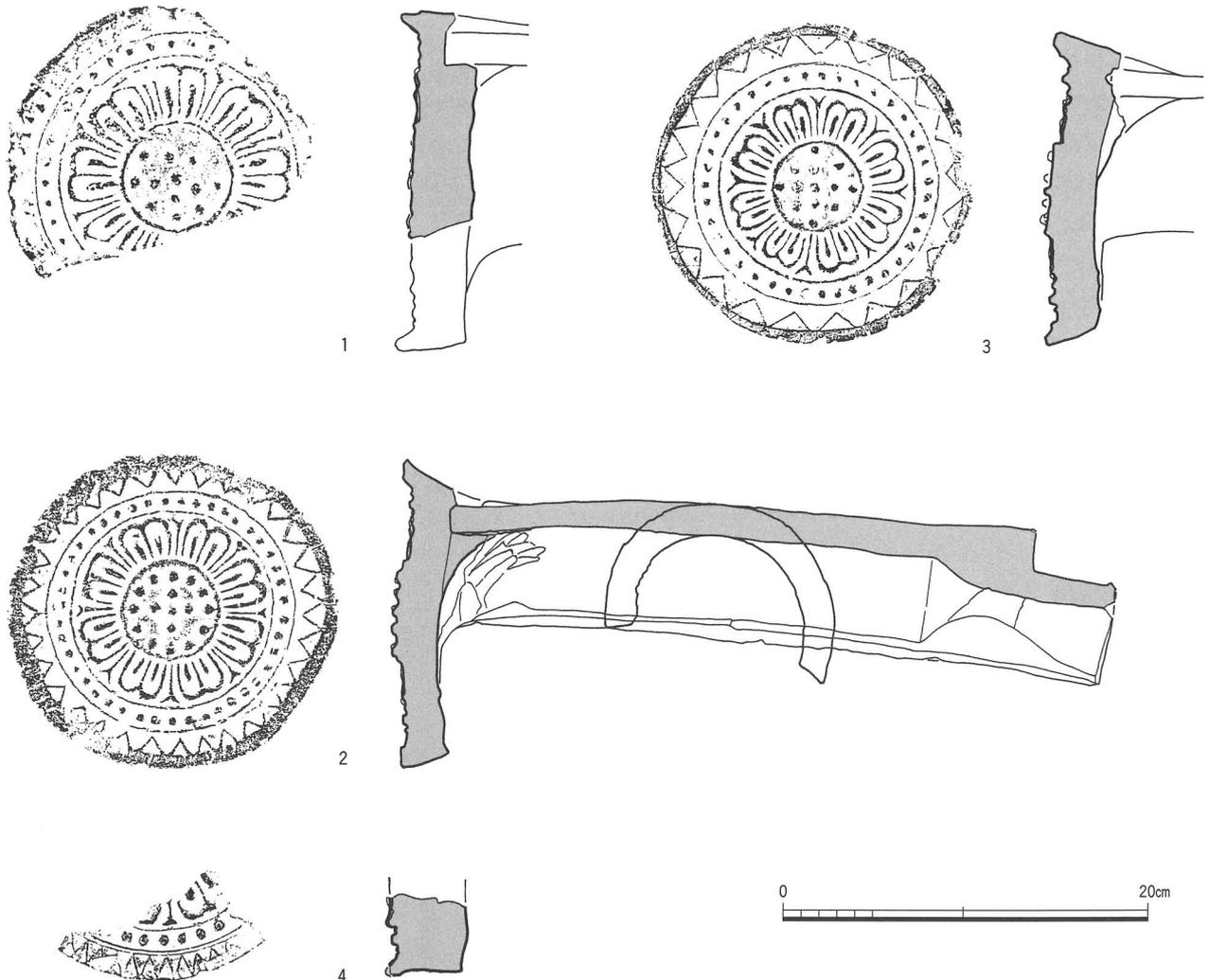


Fig. 11 軒丸瓦 1:4

丸瓦筒部にかけての長さ35.5cm、玉縁長4.5cm、段部幅16cmを測る。丸瓦部は焼成時の焼けひずみが激しい。6275Aについては、範傷の進行と製作技法の違いによって3段階の変遷をたどれることを播摩尚子が指摘しており（飛鳥藤原第100次調査『年報2000-II』）、その段階設定に従えば、本例は第3段階に該当する。瓦当面は、外縁上端を0.6~1.3cm削り、蓮子・蓮弁・珠文のあちこちに範傷が生じる。裏面は丁寧な指ナデ調整。丸瓦の取り付け位置はやや低く、その先端部分は未加工で、接合部の充填粘土は少ない。瓦当側面は、丸瓦部とともに縦方向の板ナデで調整する。丸瓦部凹面に布の裁ち目の始末をしないため、ほつれが著しい布の重ね目痕が残る。側縁は、玉縁凹面側の面取りが幅広い。焼成は堅緻で、1mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5B4/1暗青灰色。南面外濠SD501出土。

3は、6275型式B種の軒丸瓦。瓦当面は、外縁上端を4~8mm削る。丸瓦の取り付け位置はやや低く、丸瓦先端部は未加工。瓦当側面は周に沿って丁寧になでて、裏面は指ナデのあとに外周に沿ってヘラケズリ調整をする。焼成は堅緻で、精良な胎土に1mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は5B5/1青灰色。南面外濠SD501出土。

6276型式は、珠文・鋸歯文縁の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。A・C・E~Gの5種あり、中房がやや突出するC種が出土した。

4は、6276型式C種の破片資料。瓦当側面には、範型の被りの痕跡がある。裏面はヘラケズリ調整。焼成は堅緻で、精良な胎土に2mm程度のクサリ礫を少し含む。色調は10Y6/1灰色。第124次QG80灰茶土出土。

B 軒平瓦

軒平瓦は、計16点出土しており、重弧文軒平瓦（3点）と偏行唐草文軒平瓦（13点）に分けることができる。

重弧文軒平瓦 (Fig.12, PL.17)

3点とも第113次調査区からの出土である。重弧文の挽き型はそれぞれ異なり、製作技法にも違いがある。

5は三重弧文軒平瓦。凹線と弧線はほぼ同じ太さだが、第一弧線にごく浅い凹線が1条巡り、あたかも四重弧文のように見える。瓦当厚は3.3cm。顎部は長さ1.3cm、顎の深さ1.3cmの貼り付け段顎。凹面には、瓦当面から0.7mmの位置に施文型のあたりがある。側面は、凹凸面両側からヘラケズリして断面三角形に仕上げる。焼成は軟質で、精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5YR7/4にぶい橙色。東二坊坊間路西側溝SD6032B出土。

6は、顎が剥落して弧線が2本分のみ残っている。顎の接合面は、重弧文風の型挽きで凹凸をつける。凹面には、瓦当面から1.3cmの位置に施文型のあたりがある。焼成は良好で、2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は5Y7/1灰白色。第113次RF52表土出土。

7は、平瓦部が剥落し、顎部のみ残存する。弧線は丸みを帯び、凹線は断面U字形である。接合面には、斜め方向に走る糸切り痕と、重弧文風の型挽きの痕跡が反転している。顎面はナデ調整で、側面はヘラケズリを行う。ちょうど粘土板の合わせ目目で割れており、S型とわかる。焼成は軟質で、やや粗い胎土に1mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。色調はN7/0灰白色。井戸SE9330出土。

偏行唐草文軒平瓦 (Fig.12, PL.17・18)

偏行唐草文軒平瓦は計13点出土し、そのうちの12点について型式を判別できた。いずれも藤原宮所用瓦で、5型式8種を数える。その内訳は、6641Eが1点、6642Aが1点、6642Cが1点、6443Aaが2点、6643Abが3点、6643Cが1点、6647Cが3点である。ここでは残存状態の良い6点を報告する。

6642型式は、外区・脇区とも珠文をならべる右偏行唐草文軒平瓦である。A~Dまでの4種あり、A種とB種が出土した。C種の資料について報告する。

8は、6642型式C種の破片である。推定瓦当厚5cm。顎部長6.3cm。顎の深さは0.4mmと浅い。顎面は粗いヘラケズリを施すが、段部はほとんど未調整である。凹面は布圧痕が明瞭に残り、瓦当面際はヘラケズリする。焼成は良好で、精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調はN6/0灰色。南面外濠SD501出土。

6643型式は、外区・脇区とも珠文をならべる左偏行唐草文軒平瓦である。A~Eまでの5種あり、Aa種とAa種を改範して脇区の幅を広げたAb種、そしてC種が出土した。

9は、6643型式Aa種の顎部で破損している資料である。推定瓦当厚4.3cm、顎部長7.2cm、顎の深さ1.3cm。顎面と段部は横方向に丁寧にナデ調整する。凹面には布圧痕が残り、瓦当面際は横方向にヘラケズリする。焼成は堅緻で、精良な胎土に1mm大の石英をわずかに含む。第118次QN50包含層出土。

10は、6643型式Ab種の軒平瓦。平瓦部まで残存するほぼ完形の軒平瓦で、全長41cm、瓦当幅30.4cm、顎部長6.8cm、顎の深さ1.3cm、瓦当厚4.9cm。瓦当文様は、右から5単位部分に範割れをおこしている。顎面は横方向にヘラケズリする。段部と平瓦部は、丁寧に横方向にナデ

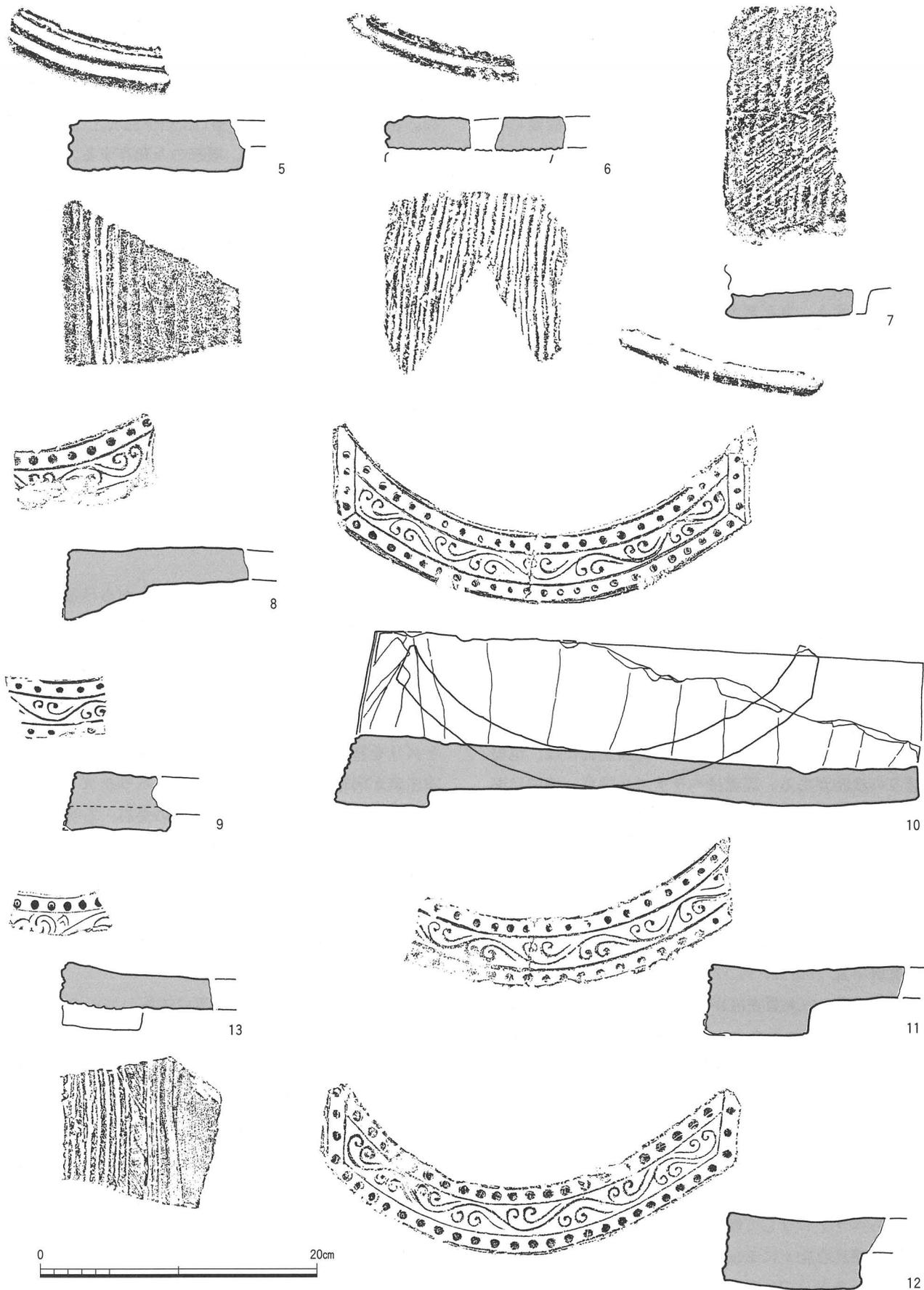


Fig. 12 軒平瓦 1 : 4

て、接合部分は直角に仕上げる。凹面は粘土紐接合痕、布圧痕が明瞭に残り、瓦当面の際は横方向にヘラケズリを行う。また、凹面の中央付近には布のとじ合わせと、瓦を分割する際に指標となる分割界点が上下2カ所確認できる。焼成は良好で、胎土は高台・峰寺瓦窯産に特徴的なクサリ礫を多量に含み、9とは全く胎土が異なる。色調は5B5/1青灰色。南面外濠SD501出土。

11も、6643型式Ab種の破片資料。顎部長7.3cm、顎の深さは2.2cmと深い。瓦当厚は5.4cm。10と同じく瓦当文様は、右から5単位目に範割れがある。凹凸面の調整手法・焼成・胎土ともに10とほぼ同様である。色調は10Y6/1灰色。南面外濠SD501出土。

12は、6643型式C種の軒平瓦。瓦当幅30.5cm、顎部長9.9cm。顎の深さは2.5cmと深い。瓦当厚は5.0cm。顎面は、横方向にヘラケズリし、段部と平瓦部の接合部分は直角になる。平瓦部には、段部を削り出す際のヘラのあとが残る。段部と平瓦部は横方向のナデ調整。凹面は、粘土紐の接合痕と布圧痕が残る。瓦当面の際には幅広のヨコヘラケズリをする。焼成は堅緻で、2mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は5B4/1暗青灰色。南面外濠SD501出土。

6647型式は、上外区珠文、下外区鋸歯文の左偏行変形忍冬唐草文軒平瓦。A～E・G～Iの8種あり、そのうちのC種が出土した。

13は、6647型式C種の顎が剥落した小片である。顎部接合面には、重弧文風の型挽きで凹凸がついてある。凹面は横方向の丁寧なナデで、布圧痕を完全にナデ消す。焼成は良好。精良な胎土に2mm大のクサリ礫を少量含む。色調は5Y7/1灰白色。第124次表土出土。

C 丸 瓦

本調査区からは、破片総数342点、重量82.7kgの丸瓦が出土した。丸瓦の出土量は、平瓦に比べて少なく、そのほとんどは、第113・131次調査区もしくは、第124次調査区の南面外濠SD501からの一括資料に偏っている。本報告ではこれらの丸瓦を2類に分類した。

丸瓦1類 (Fig.13, PL.19)

粘土板巻きつけ技法の丸瓦の一群である。完形品はなかったものの、おそらく行基式丸瓦であろう。全て第113・131次調査区から出土しており、その位置関係から小山廃寺所用の瓦である可能性が高い。凸面の叩きなど、第1次成形技法の痕跡は、丁寧にナデ消されていて確認できない。製作技法・瓦の厚さ・胎土・焼成など、14と15は同じ一群だが、ほかはそれぞれ異なる様相を示す。

14は、凹面に左上がりの糸切り痕を確認できる。左の側縁の近くには、ぐし縫いの布の縫い目痕があるが、とじ目痕は側縁に沿ったヘラケズリ調整で消滅している。側面調整は、分割断面・破面をヘラケズリしたのち凹面側をヘラケズリするc1手法¹⁾。焼成は軟質で、最大3mmの長石・石英・クサリ礫を含む。色調は7.5YR4/3褐色。東二坊坊間路西側溝SD6032Bより出土。

15は、凸面を縦方向にナデ調整する。凹面には、左上がりの糸切り痕が残る。側面調整はc1手法。焼成・色調・胎土ともに14と同じ。井戸SE9330より出土。

16は、厚さが約2.5cmとやや厚手の丸瓦。凹面は、左上がりの糸切り痕が明瞭に残る。側面は、凸面側を面取りし、凹面側は幅の広いヘラケズリ調整を行う。焼成は良好で、精良な胎土に2mm程度の長石・クサリ礫を少量含む。色調は7.5Y5/1灰色。中世の井戸SE9884出土。

17も、丸瓦の最大厚が2.8cmと厚手である。凸面は縦方向の板ナデ調整。凹面には、横位の布圧痕と糸切り痕を確認できる。側面調整は、分割破面・断面ともにヘラケズリするc手法。広端面の凹面側もヘラケズリする。焼成は堅緻で、最大3mmの長石・石英を少し含む。色調は2.5YR3/1暗赤灰色。中世の井戸SE9885出土。

18は、凹面に残る布圧痕の一部を、縦方向に粗くナデてすり消す。側縁は凸面側を面取りし、凹面側は側縁に沿って幅広のヘラケズリをする。広端面も凹面側を面取りする。焼成は堅緻で、2mm程度の長石・石英を含む。色調はN6/0灰色。東二坊坊間路西側溝SD6032より出土。

丸瓦2類 (Fig.14~16, PL.19~21)

粘土紐巻きつけ玉縁式丸瓦の一群。21以外は全て南面外濠SD501からの出土である。凸面は、縦縄叩きをナデ消す。凹面玉縁部から筒部にかけては、緩やかに傾斜し、明確な段差を作らない。製作技法と胎土の違いでaとbに細分した。

丸瓦2類a (19~31) は、やや粗い胎土に2mm大の長石・石英を大量に含む一群。凸面調整は、多くが玉縁部から筒部中央にかけて回転台を利用したヨコナデ、筒部中央部から広端までは縦方向のナデである。凹面には、布圧痕を明瞭に残す。玉縁部凹面には何条かの布筒の縦じわが確認でき、なかでも19~21は特に多い。

19は、玉縁長6.4cm、段部幅15.9cm、玉縁部端部幅9.6cmを測る。凹面には、筒部と玉縁部を繋ぐ粘土紐の接合痕が明瞭に残る。また、筒部中央より少し上がったところに横位のヘラ描き線がある。側面調整はc1手法。焼成は堅緻で、色調は5B4/1暗青灰色。

20は、玉縁長6.2cm、段部幅16.5cm、推定玉縁端部幅10.5cm。凹面に19と同じく、筒部上方に横位のヘラ描き線をもつ。側面調整は凹面側を面取りするc1手法だが、部分的に凸面にもヘラケズリを加える箇所がある。焼成は良好で、色調はN5/0灰色。

21は、玉縁長6.2cm、段部幅16.2cm、推定玉縁端部幅

10.5cm。凹面に粘土紐の接合痕が明瞭に確認できる。側面調整はc1手法。焼成は堅緻で、5B3/1暗青灰色。第124次QH79灰褐色より出土。

22は、玉縁長6.6cm、段部幅16.2cm、玉縁端部幅11.5cm。焼成段階でひずみ、やや扁平な形状をなす。側面は、凹凸面とも面取りし、玉縁端面も凹面からヘラケズリをす

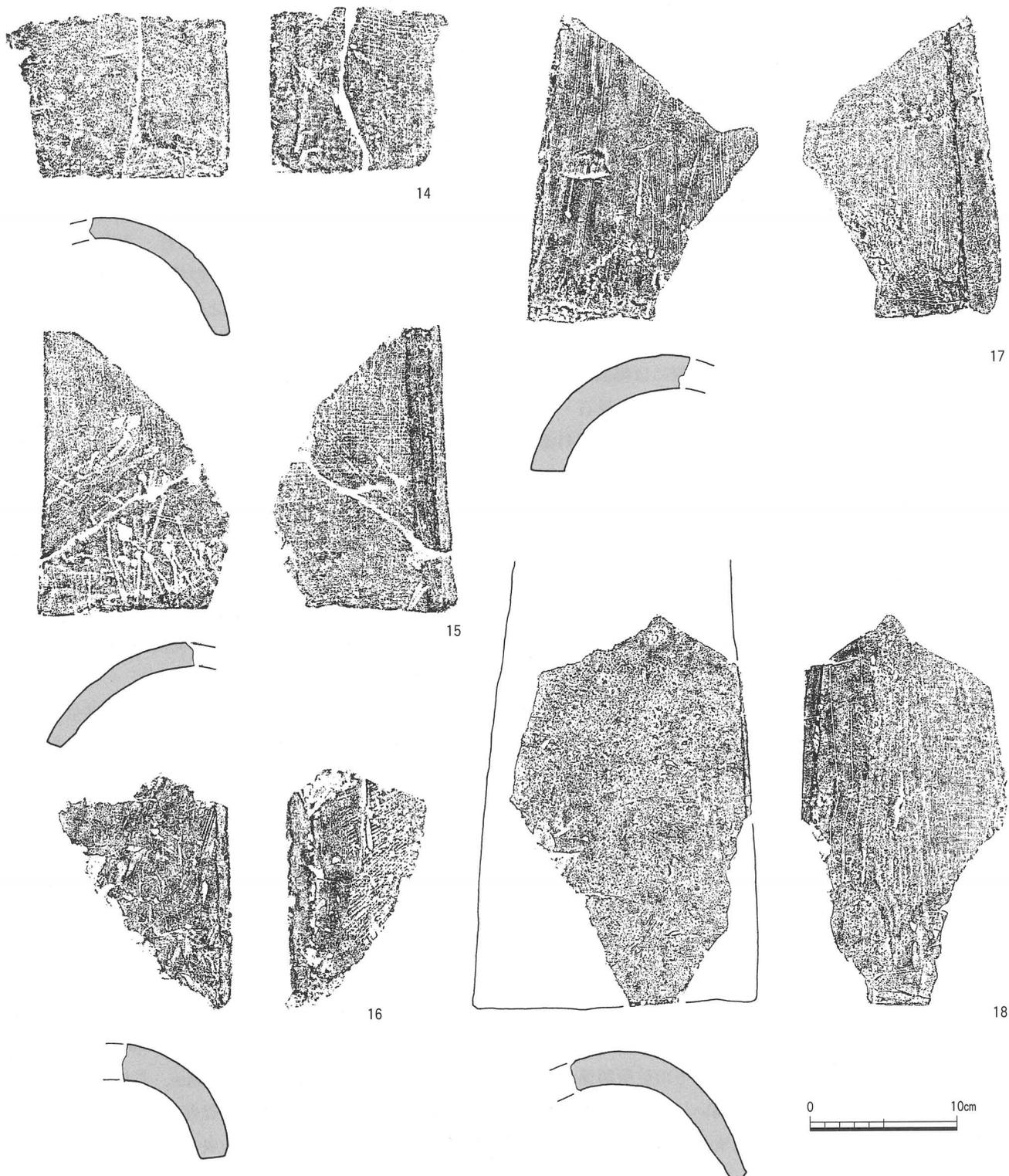


Fig. 13 丸瓦1類 1:4

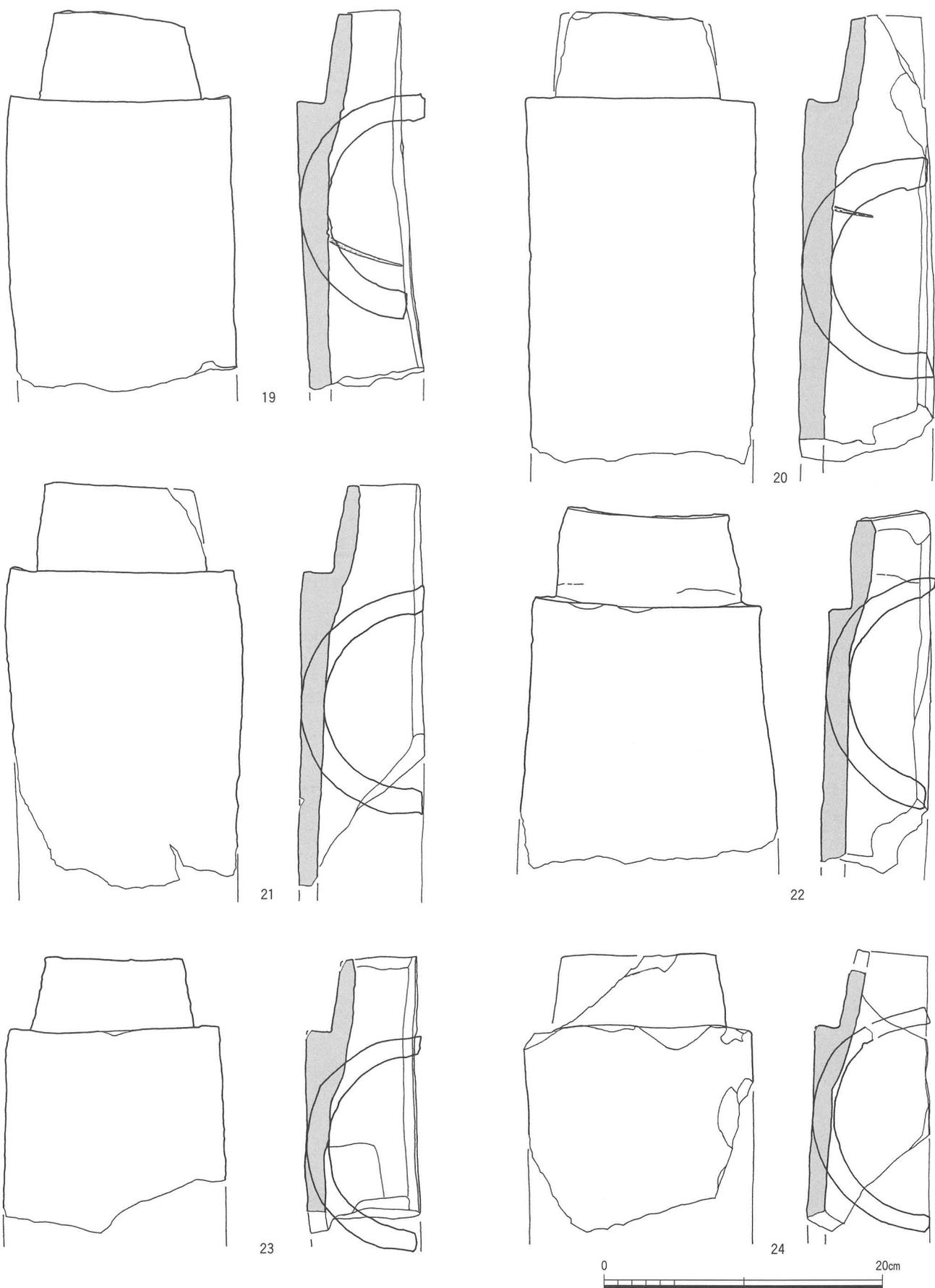
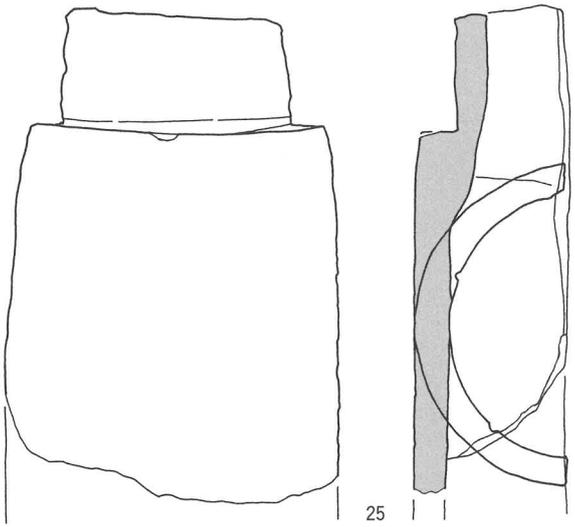
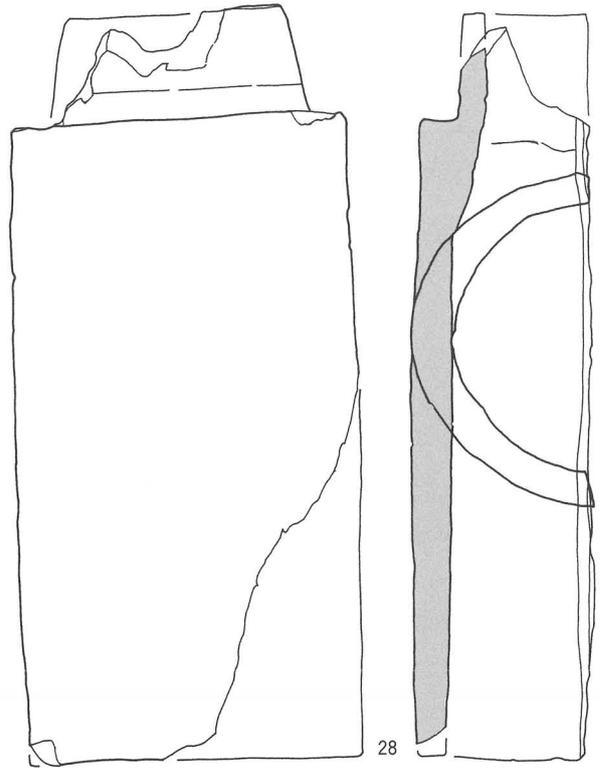


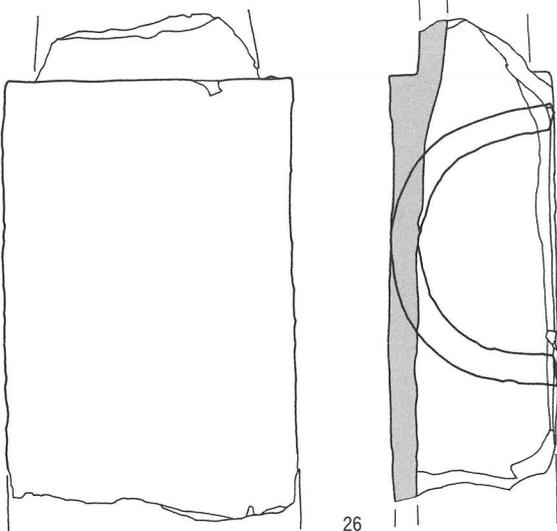
Fig. 14 丸瓦2類 1:4



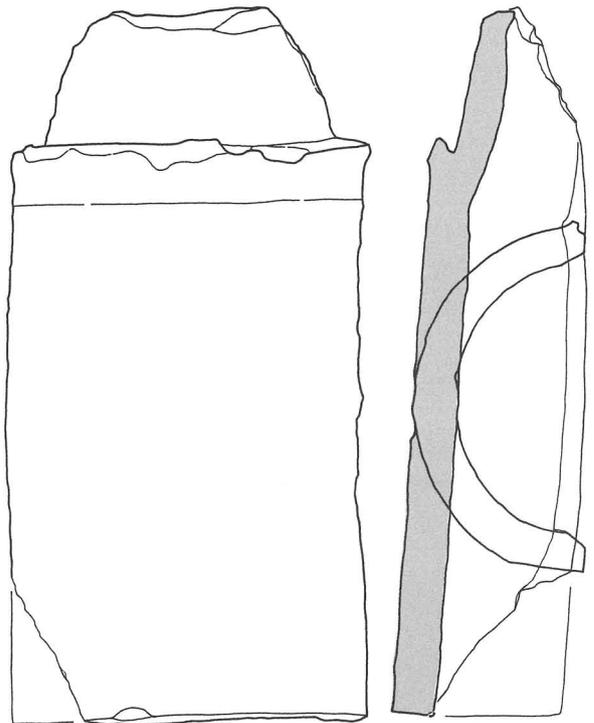
25



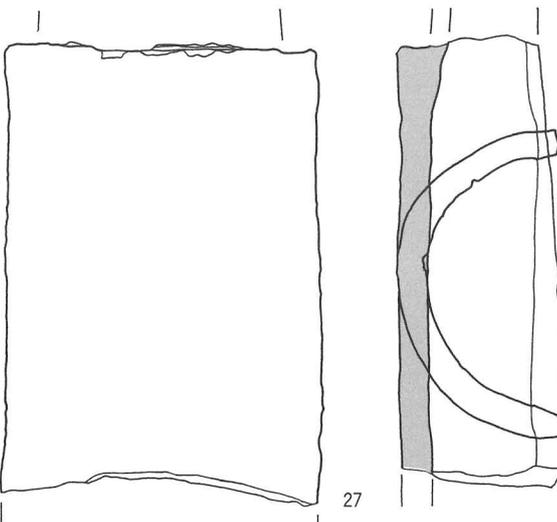
28



26



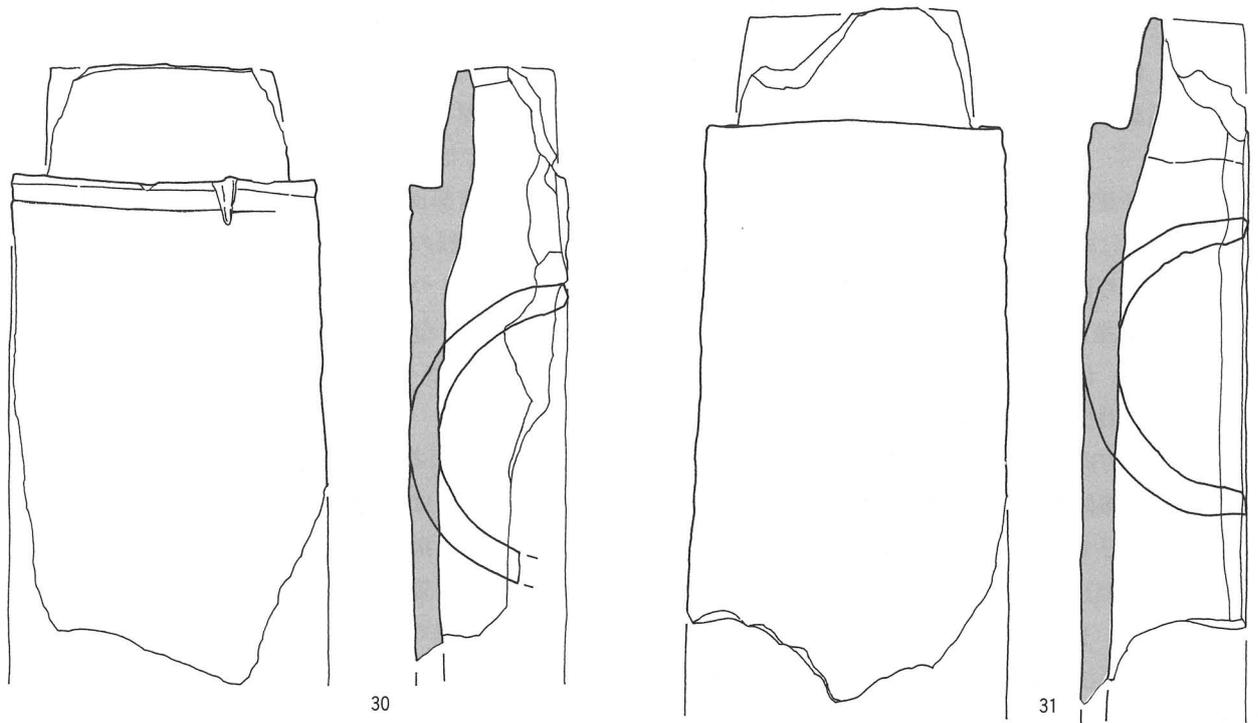
29



27

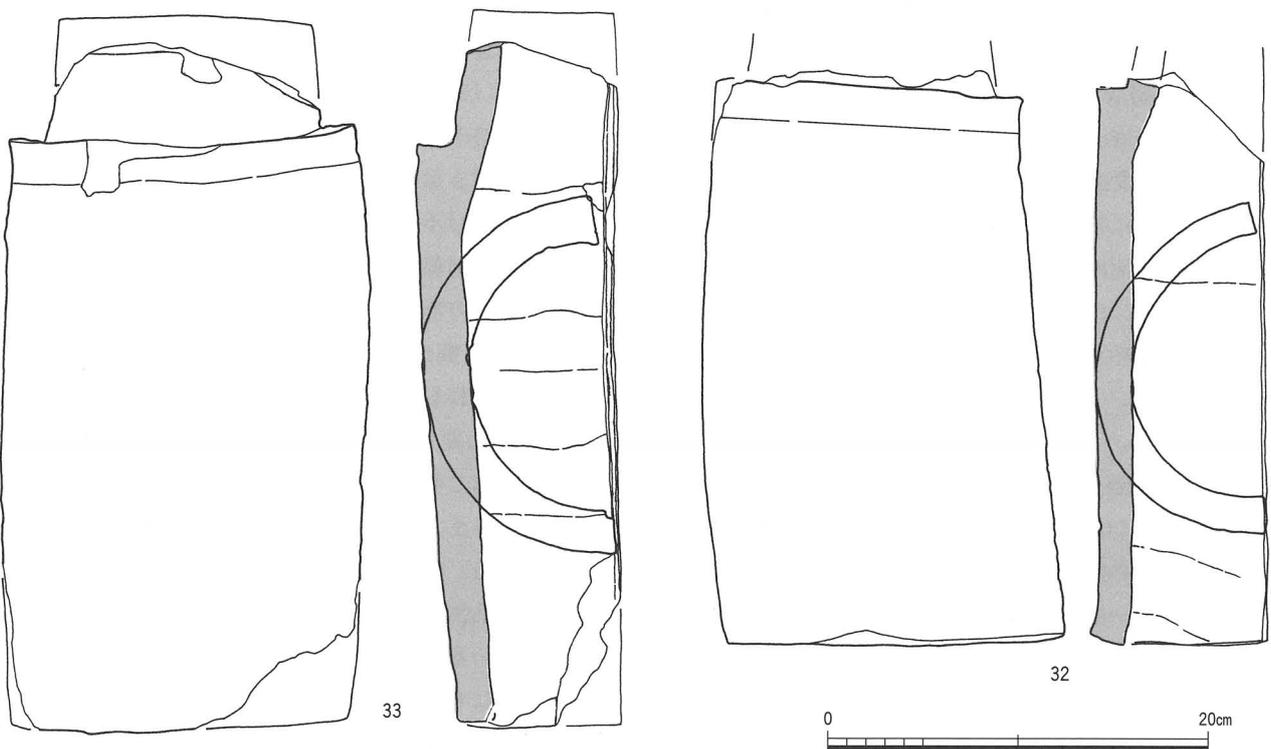


Fig. 15 丸瓦2類 1:4



30

31



33

32



Fig. 16 丸瓦2類 1:4

る。焼成は良好で、色調は5B4/1暗青灰色。

23は、玉縁長5.1cm、段部幅15.2cm、玉縁端部幅4.9cm。筒部凹面は、板状工具でやや強めに縦方向にナデて布圧痕を消す。側面は2回に分けてヘラケズリし、また玉縁端部も凹面側を面取りする。焼成は良好。色調は5Y5/1灰色。

24は、玉縁長5.2cm、推定段部幅16.4cm。凹面段部の布圧痕は凸型台に当たって潰れている。また、凹面向かって左側で、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕が確認できる。側面調整は、破面の調整を全く行わないa手法。焼成は堅緻で、色調は5B4/1暗青灰色。

25は、玉縁長6.1cm、段部幅15.3cm、玉縁端部幅11.2cm。凸面は、ヨコ方向のケズリ調整。凹面には、玉縁部から筒部まで続く布筒のしわが2条ある。側面調整はc1手法。焼成はやや良好で、色調は5Y2/1黒色。

26は、段部幅14.8cm。凹面には、筒部の一部に指ナデが確認できる。玉縁凹面には、布筒のしわがみられない。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調はN4/0灰色。

27は、段部幅16.1cm。玉縁部が欠損している。凹面には、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕がある。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調は5B3/1暗青灰色。

28は、全長40.2cm、筒部長34.6cm、玉縁長5.6cm、段部幅17.3cm。凹面には、布筒と模骨の間にくぐる撚り紐の圧痕が確認できる。また、凹面段部の布圧痕は凸型台に当たって潰れている。側面調整はa手法。焼成は軟質で、色調はN3/0暗灰色。

29は、全長38cm、筒部長31.1cm、玉縁長6.9cm、推定広端幅18.3cm、段部幅18.8cm。玉縁端部幅は、焼成段階でひずんだために幅が広くっており、そのために玉縁の両隅を、凹凸面両側から打ち欠く。凸面は全体的に調整が粗く、段部には回転台を利用して段部を成形した際にできた余分な粘土がそのまま付着している。側面調整はc1手法だが、玉縁端面は未調整である。色調は7.5YR6/1灰色。

30は、玉縁長6.1cm、段部幅15.8cm、玉縁端部推定幅11.5cm。凸面には、段部から約1.5cm下に回転台を利用したヘラ描き状の鋭い線が残る。工具のあたりであろうか。凹面は筒部に一部ナデ調整がみられる。側面調整はc1手法で、玉縁端面も凹面側を粗くヘラケズリする。色調は10YR7/3にぶい黄橙色。

31は、玉縁長6.0cm、段部幅15.2cm。広端を欠損しているが、残存長は37cmあり、ほぼ全長に近いと思われる。凹面は、筒部と玉縁部とを繋ぐ粘土紐の接合痕が明瞭に

残り、裁ち目の始末をしない布の重ね目痕を縦方向にナデつけているのが確認できる。側面調整はc1手法。焼成は良好で、色調は10YR7/3にぶい黄橙色。

丸瓦2類b(32・33)は、2類aと似るが、2類aよりも瓦が分厚い。側面調整はc手法。胎土は精良で、長石・石英の他にクサリ礫を含む。

32は、筒部長30.8cm、広端幅17.7cm、推定段部幅16cm。凹面は粘土紐の接合痕、布圧痕が明瞭に残り、玉縁部には布袋を軽くつまんで縫ったダーツがある。右の側縁の凹面側には、分割截線を失敗した痕跡があり、それを削るために小さく面取りをする。焼成は堅緻。色調はN4/0灰色。

33は、全長推定38.5cm、筒部長は31.9cm、段部幅は18.1cm、厚さは2～2.5cmと厚めの丸瓦。凸面の段部は、親指と人差し指でつまんで回転ナデ調整を行う。凹面には、粘土紐の接合痕、布圧痕、布筒の下にくぐる撚り紐の圧痕が確認できる。また、凹面向かって右の側縁には、分割截線を引き損ねた痕跡がある。焼成は良好。色調は5Y6/1灰色。

D 平 瓦

本調査区から、総数1908点、総重量346.8kgの平瓦が出土した。ほとんどは、第113・131次調査区もしくは南北溝SD9561、南面外濠SD501からである。ここでは平瓦を叩きなどをもとに6類に分類した。さらに叩き板の違いや調整手法で細分して報告する。

平瓦1類 (Fig.17, PL.22)

凸面に格子刻線叩きをもつ粘土板桶巻作り平瓦の一群である。叩き板の種類は、1種類のみ確認できた。叩き板の大きさは不明だが、短辺4.8cm、長辺7cm以上の長方形を呈す。刻線の太さは1～3mmで、格子目は1辺が4～8mmの正方形もしくは長方形になる。凹面は、布圧痕と桶の側板痕が明瞭に残る。側板の幅は、3.8～4cm。胎土はいずれも精良で、長石・石英を少量含む。

34は、凸面を一度全体的に叩いて半乾燥させた後に、広端部を同じ叩き板で再度補足叩きをして、粘土円筒のゆがみを修正する。側面調整はc手法。色調は10Y6/4にぶい黄橙色。井戸SE9330出土。

35は、凸面に残る叩き目の重なりが広端から狭端へと向かっているのがわかる。凹面には、側縁に近い部分で、布目の下にもぐる撚り紐の圧痕がある。粘土円筒を分割する際に指標となる、分割界線と考えられる。側面調整は、凹凸面側ともに面取りをおこなうc3手法。色調は10YR3/1黒褐色。井戸SE9330出土。

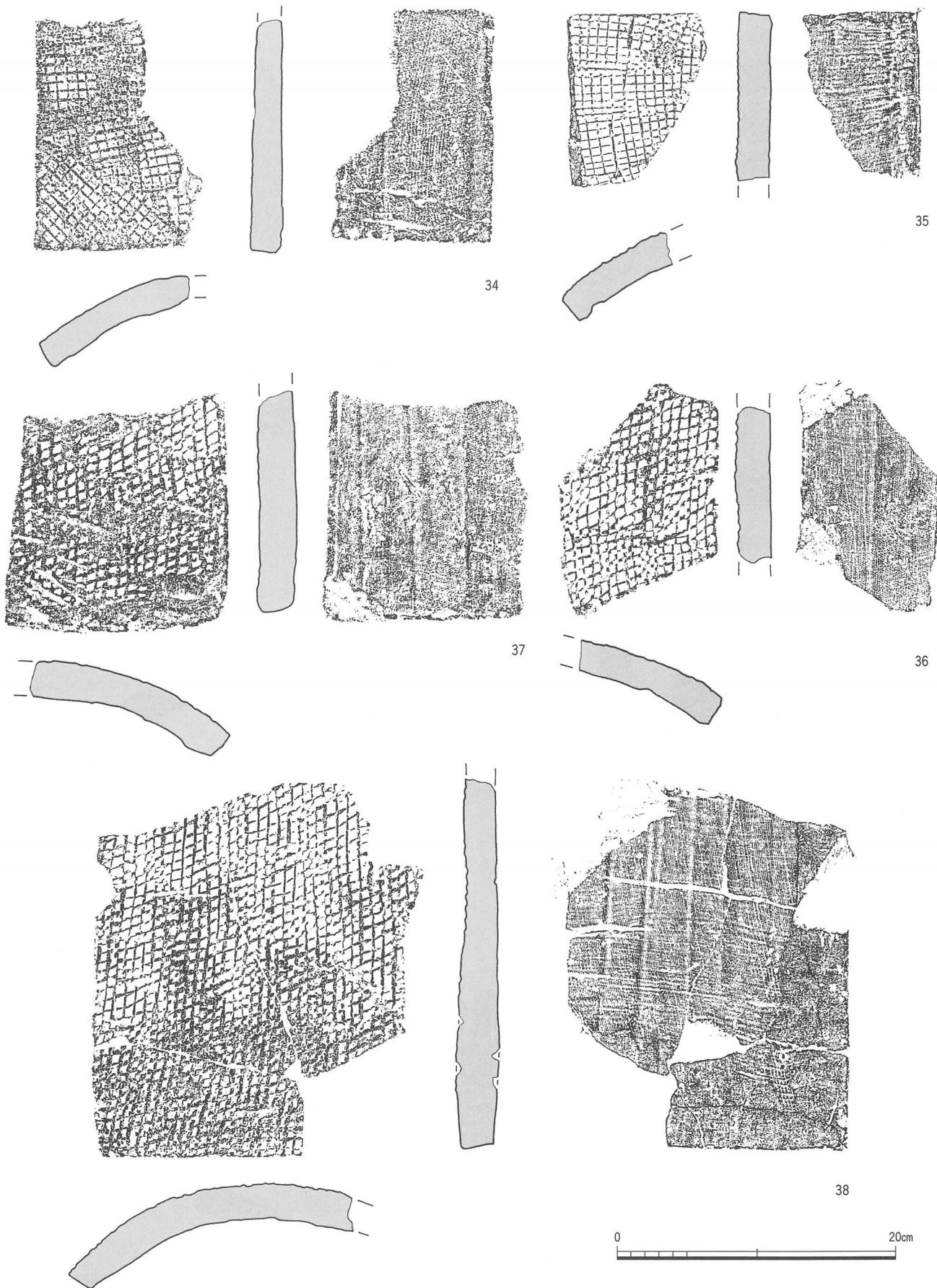


Fig. 17 平瓦1・2類 1:4

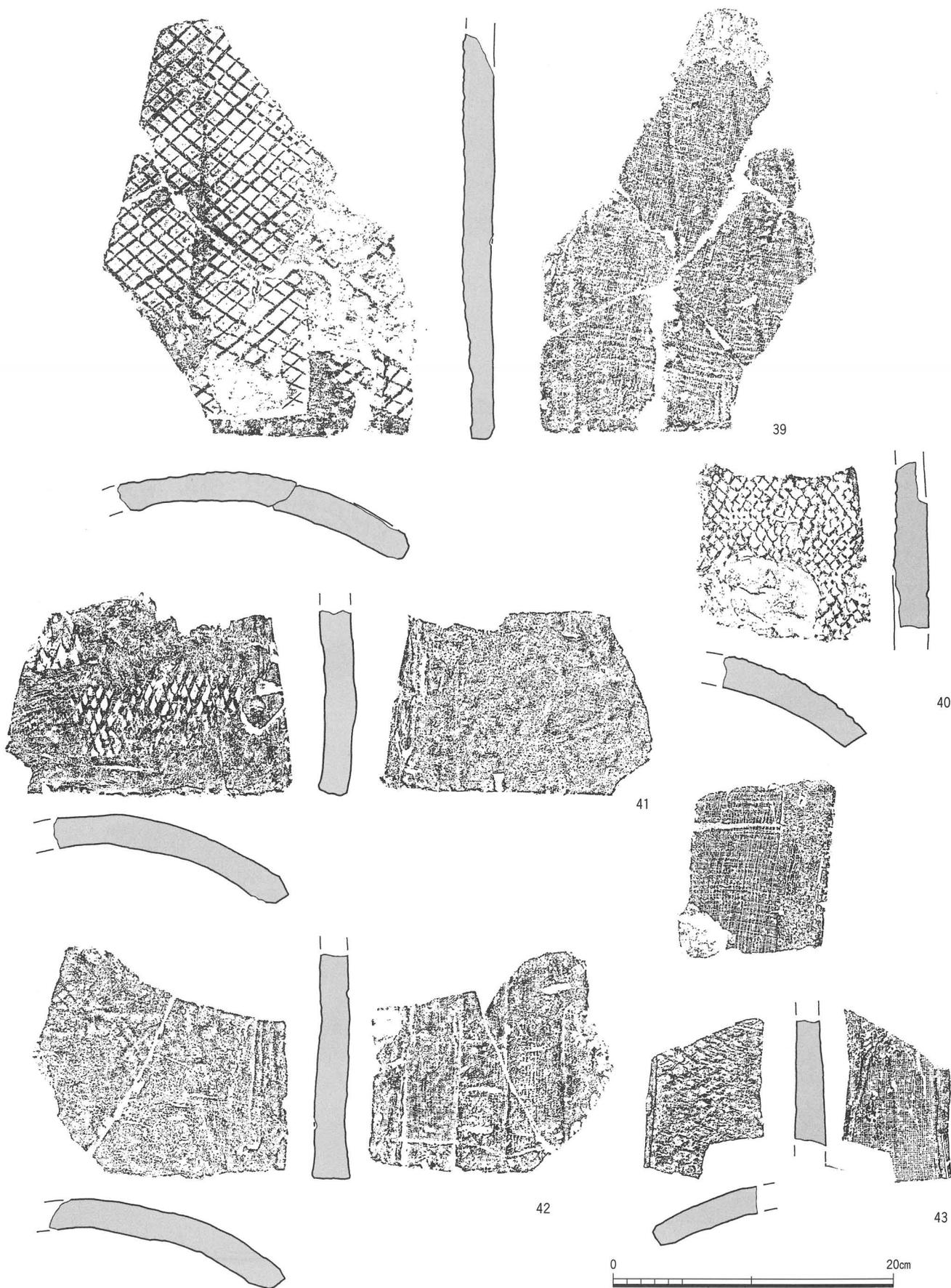


Fig. 18 平瓦2類 1:4

平瓦2類 (Fig.17・18、PL.22)

斜格子刻線叩きをもつ粘土板桶巻作り平瓦の一群。叩き板はa～dの4種類確認できる。またその他に、ナデ消されて叩き板の同定はできないが、斜格子叩きの確認できる一群をeとした。

平瓦2類a (36～38)は、格子目の刻線が木目に直交および斜交する叩き板を使用する。叩き板の刻線は、2～3mmの太さをもつ。凹面には、段差の大きい幅2.4～3.7cmの側板痕、および布圧痕が明瞭に残る。胎土は長石・石英を少し含むだけで精良。

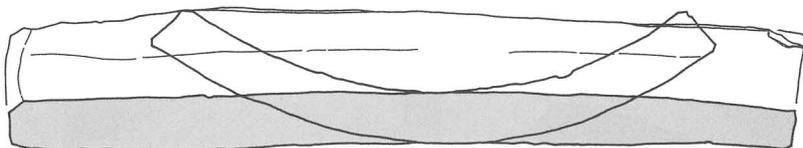
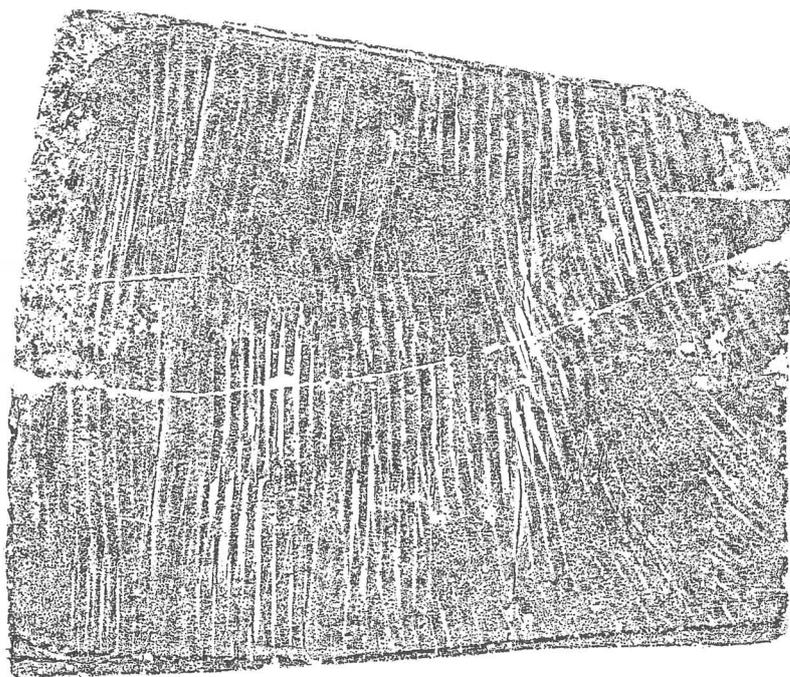
36は、凹面に糸切り痕を明瞭に残す。側面調整はc手法。焼成は良好で、色調は10YR7/3にぶい黄橙色。井戸SE9330出土。

37は、広端から狭端に向かって叩き板の重なりが確認できる資料である。側面調整はc1手法。焼成は軟質で、色調は2.5Y6/1黄灰色。井戸SE9330出土。

38は、瓦の厚さが2.6～3cmと厚手である。凹面に残る布圧痕は、布が横方向に引っ張られていたために、横方向のしわがいくつかできている。側面調整は広端部分に分割破面が少し残っており、a手法とわかる。また、幅の広いヘラケズリを凹面側の側縁や広端に沿って行う。焼成は堅緻で、色調はN8/0暗灰色。井戸SE9885出土。

平瓦2類b (39)は、叩き板が、短冊形を呈するものである。叩き板の大きさは幅8.5cm、長さは恐らく広端から狭端まであり、格子目は木目に斜交する。

39は、S型の粘土板の合わせ目で割れている。合わせ目には、接着面を増やすために指で凹凸をつけてある。凹面には側板痕と布目痕が残り、側面調整は凹凸面ともヘラケズリするc3手法。焼成は軟質で、胎土はやや粗く、長石・石英・黒色粒を含む。色調は2.5Y6/1黄灰色。井戸SE9330出土。



44

Fig. 19 平瓦3類 1:4

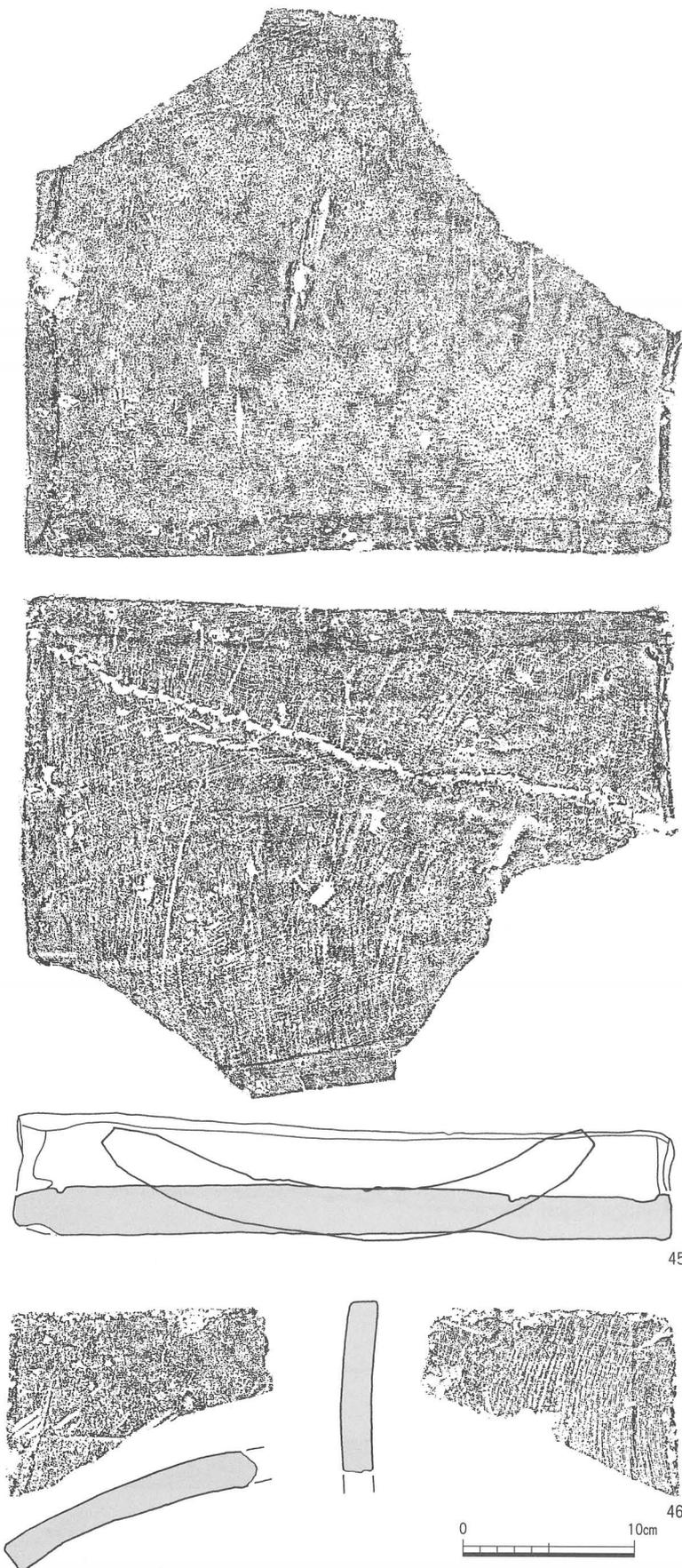


Fig. 20 平瓦3類 1:4

平瓦2類c(40)の叩き板は、斜格子の刻線がシャープで細かい。刻線の太さは1~4mmある。

40の凹面は、明瞭な布圧痕をもち、側縁に沿って幅広のヘラケズリがある。側面調整はc手法。焼成は良好で、精良な胎土に、長石・石英を少し含む。色調は7.5Y7/1灰白色。第131次SF73包含層出土。

平瓦2類d(41)は、横方向に叩き目をナデ消されており、叩き板の詳細な形状はわからない。しかし、刻線はやや太く、縦長の斜格子をもつ。凹面は、縦方向のち横方向の丁寧なナデ消しにより布目をほとんど残さない。側面はc3手法で調整するが、その断面形状は剣先形に近い。焼成は良好。胎土は精良で、長石・石英を含む。色調は7.5Y7/1灰白色。東二坊坊間路西側溝SD6032B出土。

平瓦2類e(42・43)は、斜格子叩きと確認できるものの、ナデ消されて叩き板の同定は不可能なものである。

42は、凸面にかすかな叩きが認められるが、ほとんどナデ消されている。凹面には、幅3.3~3.9cmの側板痕が明瞭に残り、広端から1.8cm上方に布端の圧痕をとどめる。側面調整はc3手法。胎土は精良で、長石・石英・クサリ礫を含む。色調は7.5Y8/1灰白色。第113次SN49包含層より出土。

43は、斜格子叩きを斜め方向にナデ消している資料。凹面には2次焼成痕が残る。側面調整はc3手法。堅緻な焼きで、胎土は精良。長石・石英・クサリ礫を含む。色調は10YR6/2灰黄褐色。井戸SE9330出土。

平瓦3類 (Fig.19~21, PL.23)

平行叩きをもつ粘土板桶巻作り平瓦の一群である。平行叩きをもつものはすべて、叩き目を粗くナデ消す。したがって、叩き板の同定はできなかった。凹面には布圧痕を明瞭に残す。完形品が2点ある。

44は、全長41.0cm、推定狭端幅27cm、広端幅31.1cm、厚さ1.9~2.9cm。叩き板の刻線の幅が6~8mmと広いのに対して、刻線と刻線の間隔が2~3mmと狭い。凸面の叩

き目は、広端では平行しているが、狭端に近くなるにつれて右上がりになる。その後、回転台を利用して、板状工具で粗く横ナデ調整する。凹面は、右上がりの糸切り痕が明瞭に残り、布筒の下に狭端から広端まで直線に伸びる棒状の圧痕がある。分割界線と思われる。側面調整はc3手法。焼成は良好。胎土中には、長石・石英・雲母・クサリ礫・チャートを大量に含む。色調は5Y7/1灰白色。東西溝SD9323出土。

45は、全長38.3cm、推定狭端幅25cm、推定広端幅31cm、厚さ2.4~2.8cm。叩き目は、ほとんど横ナデですり消されるが、平行叩きとわかる。凹面には、緩い円弧を描きながら横位に走る糸切り痕と、布のとじ合わせ痕が残る。側面調整はc3手法。狭端面・広端面と凹凸面に面取りのヘラケズリをする。粘土をよく練らずに使用したためか、胎土中に気泡が目立つ。焼成は軟質で、胎土は石英・長石・金雲母を含む。色調は7.5YR6/6橙色。糸切りの方向・焼成・胎土・色調ともに44とは全く異なる。東西溝SD9323出土。

46は、凸面の平行叩き目を横ナデ調整している資料。凹面は、縦方向の糸切り痕、側板痕を残す。側板の幅は3.6cm。側面調整はc手法。焼成は良好で、胎土はやや粗く、3mm程度の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は7.5Y5/1灰色。中世の井戸SE9346出土。

47は、凹面に縦方向に走る糸切り痕と、分割界線と思われる布筒の下にくぐる撚り紐の圧痕が残る。側面調整はc手法。焼成・胎土・色調ともに46に同じ。井戸SE9330出土。

48は、凸面に側縁と狭端に平行して細いヘラ描き線が入る。横方向のナデ調整の後につけられていること

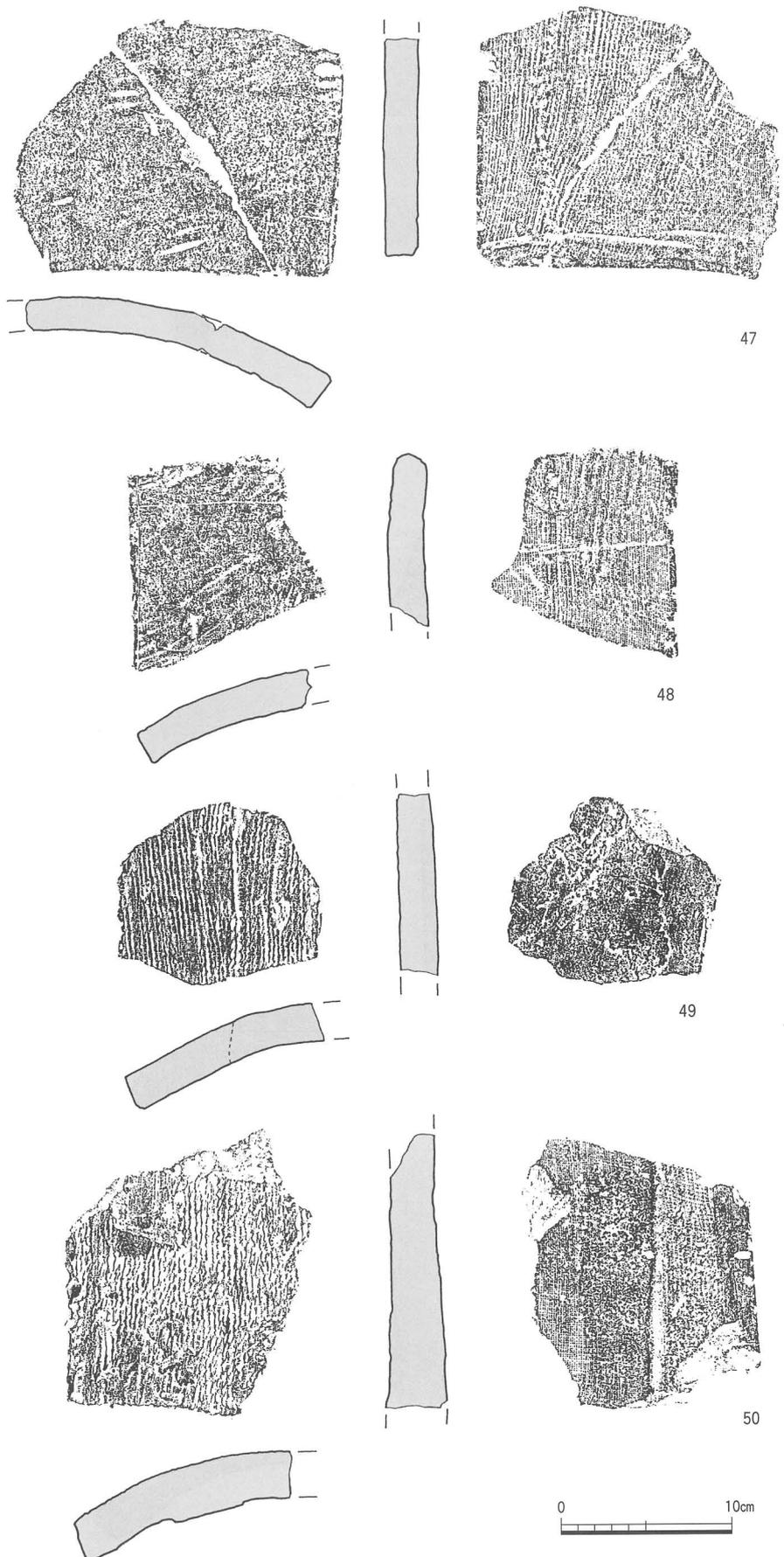


Fig. 21 平瓦3・4A類 1:4

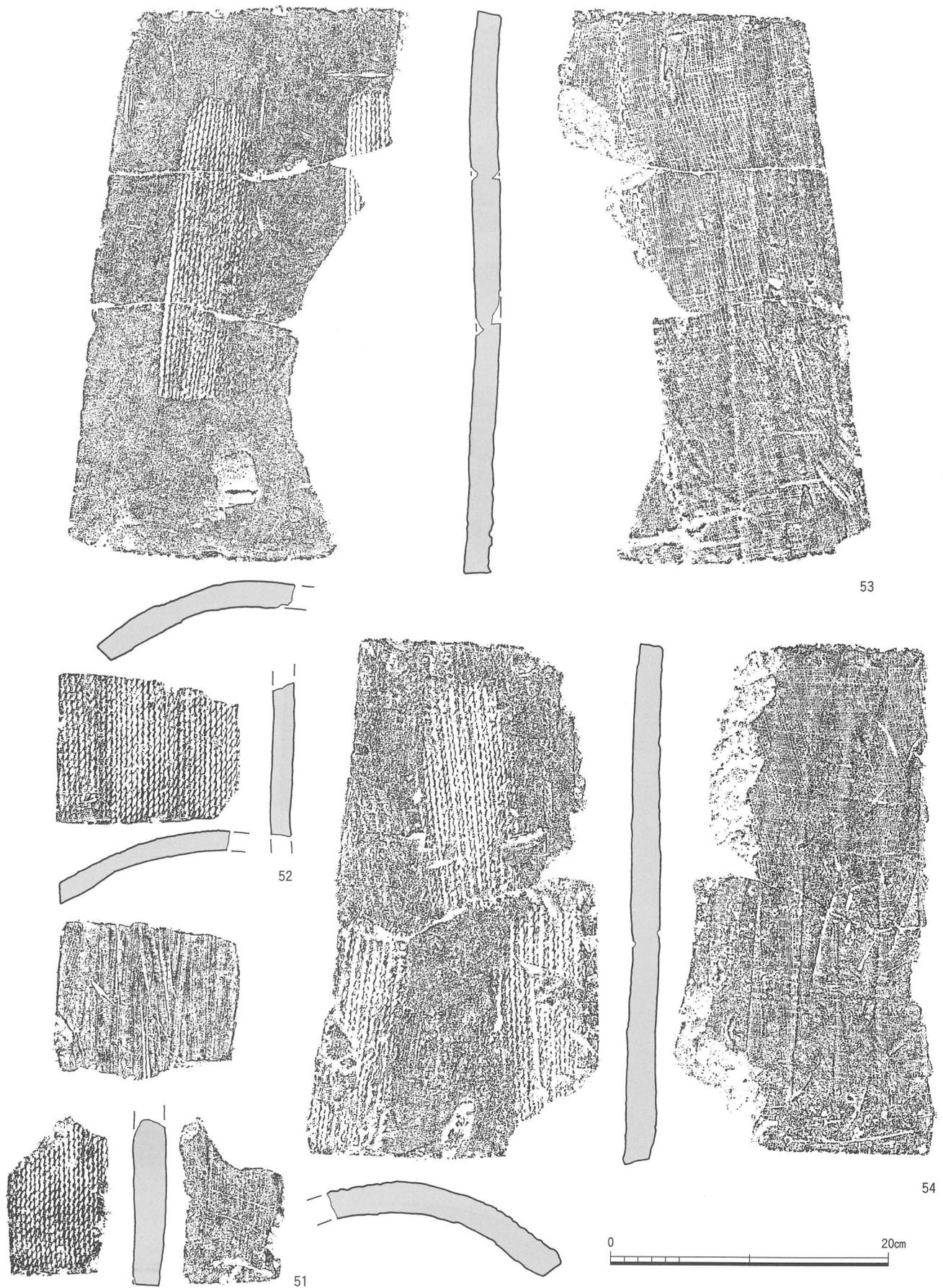


Fig. 22 平瓦 4A・4B類 1 : 4

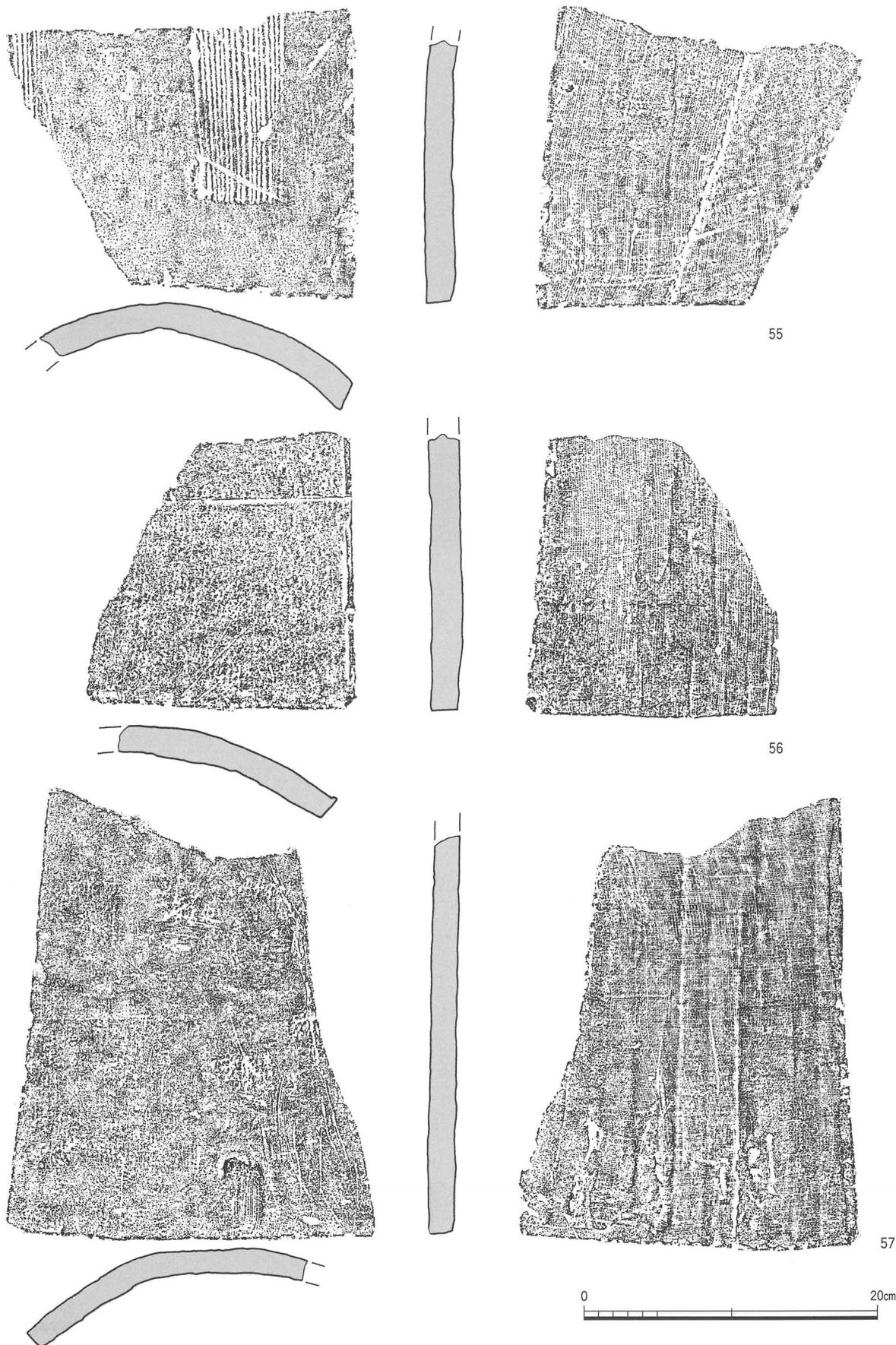


Fig. 23 平瓦 4B類 1 : 4

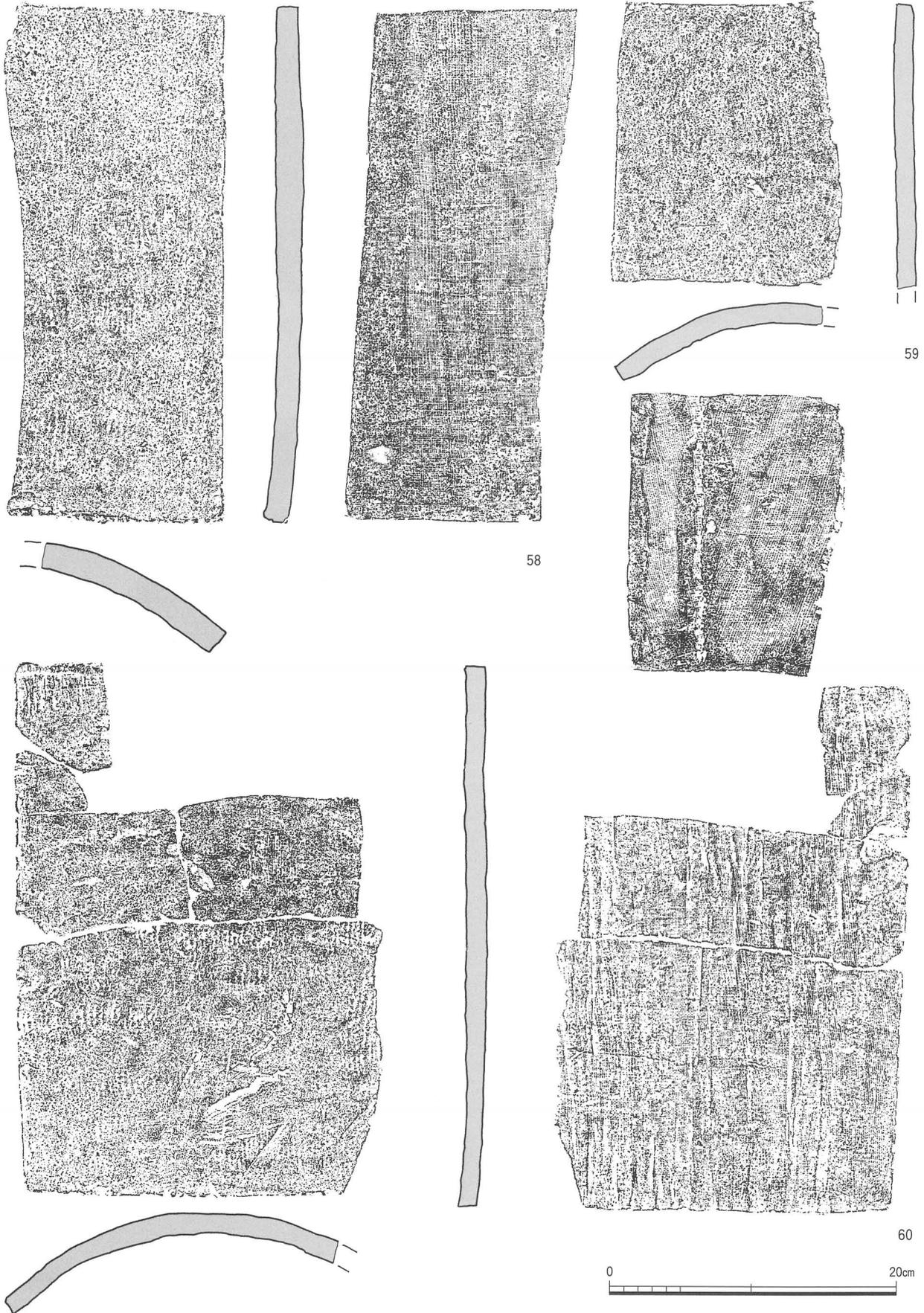


Fig. 24 平瓦4B類 1:4

から、瓦の規格を揃えるためのケガキ線と考えられる。側面はケガキ線に近い部分をc3手法でもって調整されている。その一方で、狭端面はケガキ線があるにもかかわらず、未調整のままである。凹面には、糸切り痕と布圧痕が残る。やや軟質の焼きで、胎土は2mm大の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は2.5Y6/1黄灰色。井戸SE9330出土。

平瓦4類 (Fig.21~31, PL.23~27)

凸面に縄叩きをもつ平瓦の一群である。平瓦4類は、粘土板桶巻作りと粘土紐桶巻作りの2つの異なる製作技法がみられ、前者を4A類、後者を4B類に分類した。

i. 平瓦4A類 (49~51)

平瓦4A類は、縦縄叩きをもつ粘土板桶巻作りの一群である。縄叩きの原体の形状によってaとbに細分できる。

平瓦4A類a (49・50) は、正方形に近い縦縄叩き板で叩かれたもの。叩き板の縄はやや細く、10本/3cmの密度。凹型台を使用するため、叩き痕の一部が押し潰される。側面調整はc手法であり、凸面と側面との角度が鈍角になる。焼成は良好で、精良な胎土に2mm大の長石・石英・クサリ礫を含む。

49は、2次焼成痕がある。凸面は、縦方向に軽くナデ調整する。色調は5Y7/1灰白色。中世の井戸SE9885出土。

50は、厚さが2.5~3.5cmと厚手である。49と同じく2次焼成痕がある。凹面は側板痕の段差が大きい。側板の幅は4.0cm。側縁に沿って幅広のヘラケズリを施す。色調は5Y7/1灰白色。第131次SF73包含層出土。

平瓦4A類b (51) は、叩き板が短冊形を呈す縦縄叩きをもつもの。縄は太く、密度は8本/3cm。1点のみ出土した。

51は、縦方向のナデ調整で、凹面の布目痕をほとんどナデ消す。側面調整はc手法であり、凸面と側面との角度

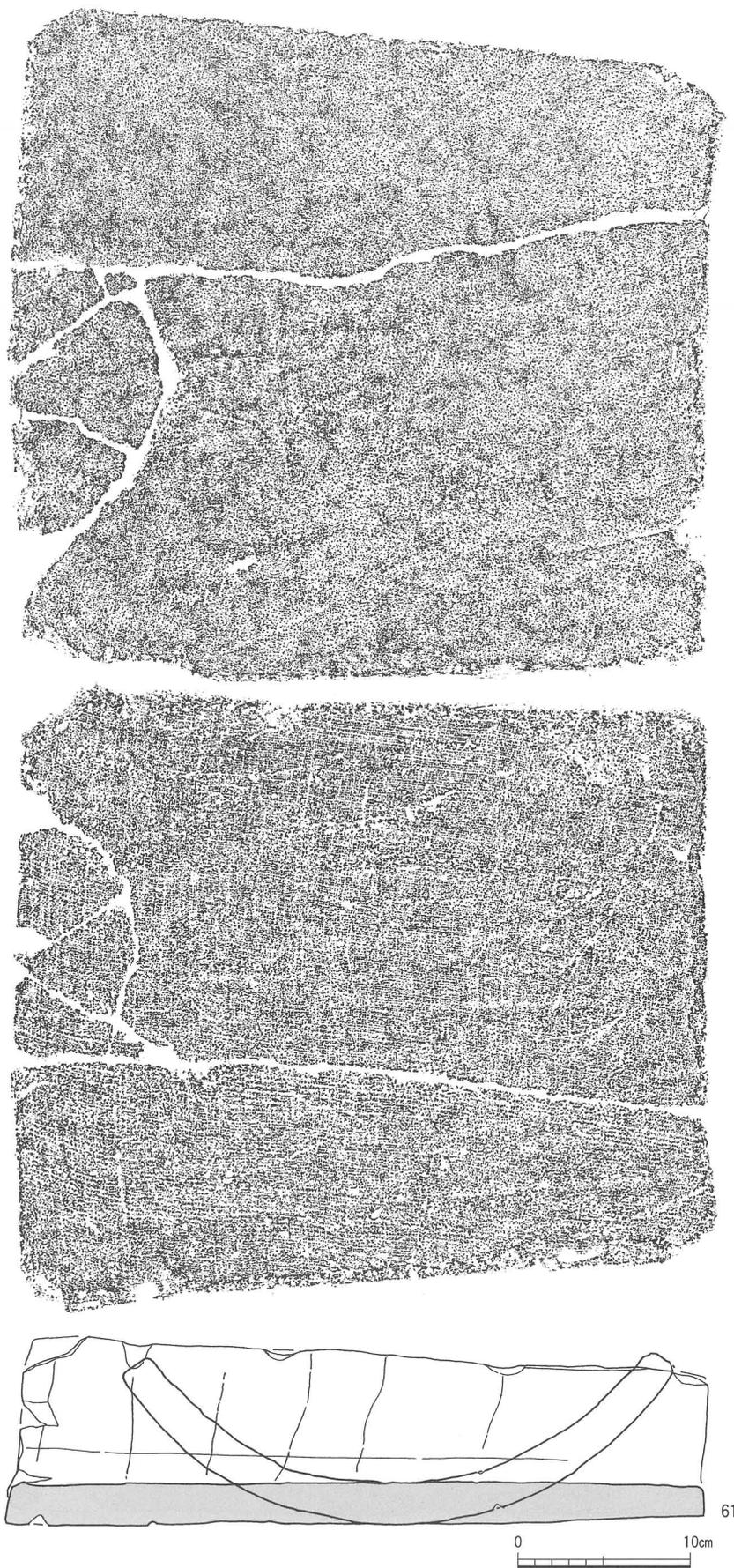


Fig. 25 平瓦4B類 1:4

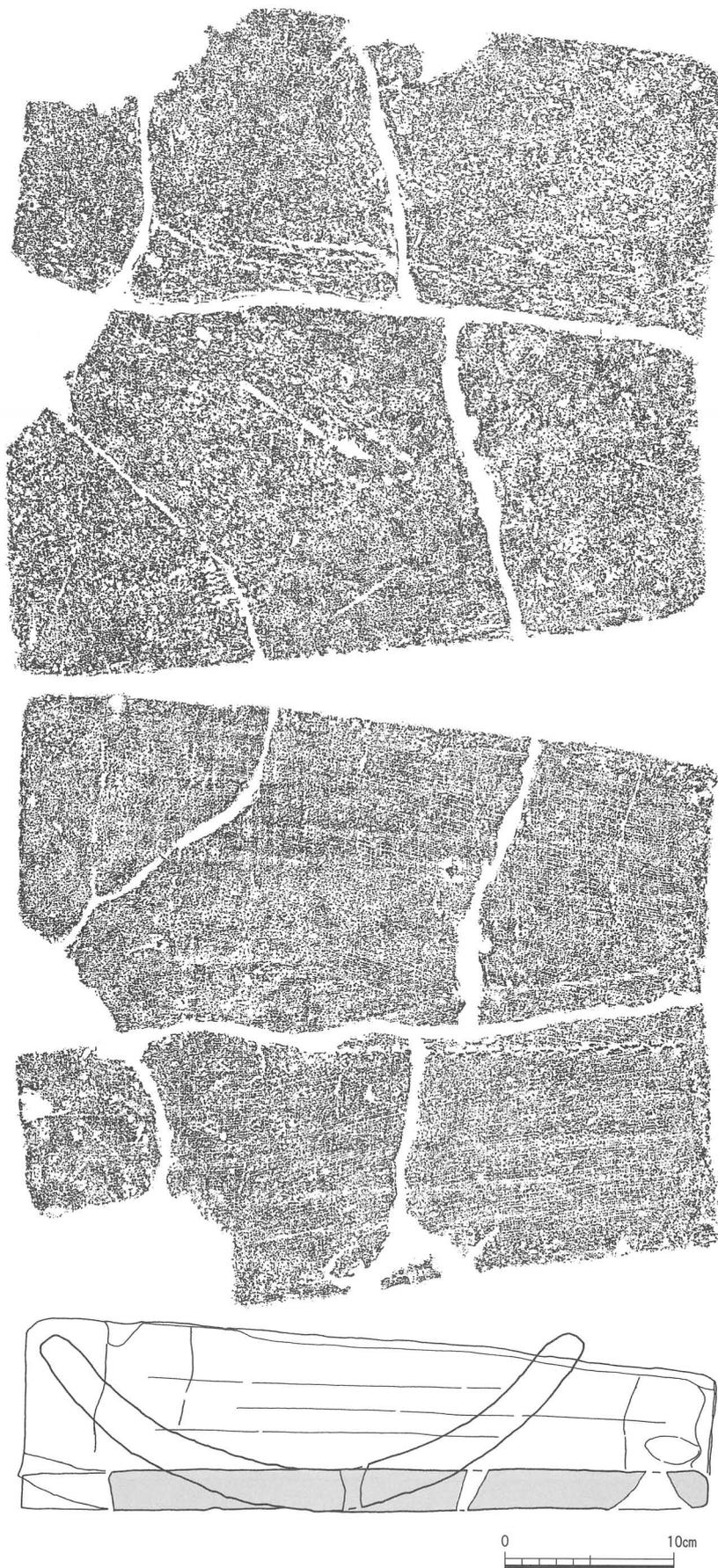


Fig. 26 平瓦4B類 1:4

が鈍角になる。焼成は軟質。胎土はやや粗く、1mm大の長石・石英・チャートを含む。色調は5Y4/1灰色。井戸SE9346出土。

ii. 平瓦4B類 (52~68)

平瓦4B類は、粘土紐桶巻作りの縄叩きをもつ一群。叩き板の形状や、その後の調整手法で、a~cに分類できる。さらに平瓦4B類cについては、胎土や焼成の特徴からc1とc2に細分した。

平瓦4B類a (52) は、凸面全体に縦縄叩きをもつものである。縄の密度は7本/3cm。1点確認した。縦方向のナデ調整で、凹面の布圧痕および側板の段差をほとんどナデ消して平滑にする。側面調整はc手法で、凸面と側面との角度が鈍角になる。焼成は軟質。胎土はやや精良で、1mm大の長石・石英を少量含む。色調はN6/0灰色。南面外濠SD501出土。

平瓦4B類b (53~55) は、短冊形を呈す叩き板で、凸面全体を叩き調整した後にナデ消し、再度まばらに縄叩きを行う一群。縦縄叩きの縄の密度は、約8本/3cm。叩き板はいくつかバリエーションがあるが、明確に判別できなかった。凹面には調整がなく、粘土紐の接合痕、布圧痕を明瞭に残す。粘土紐の幅は4~5cm。焼成は軟質で、2~5mmの長石・石英を多く含む。

53は、全長41.4cmを測る。凹面には、布筒のとじ合わせ痕が確認できる。布のとじ目はぐし縫いで、縫い目もぐし縫い。側面調整はc手法で、凸面と側面の角度は鋭角になる。軟質の焼きで、2mm大の長石・石英を含む。色調は5Y6/1灰色。南面外濠SD501から出土した。

54は、全長38.4cmを測る。凹面には幅3.4cmの側板痕が残る。側板の段差が大きいところは、その連結部を縦方向にナデ調整をして平滑にする。側面調整はc3手法。色調は5Y6/1灰色。南

62

面外濠SD501出土。

55の凹面には、布筒のと同じ合わせ痕が残り、向かって左側が布のと同じ目痕、右側が布の縫い目痕で、どちらもまつり縫いである。色調は5Y6/1灰色。南面外濠SD501出土。

平瓦4B類c (56~68) は、縦縄叩きで成形した後に縄叩きをナデ消す一群である。焼成と胎土の特徴から4B類c1と4B類c2に2分できる。

平瓦4B類c1 (56~60) は、南面外濠SD501から一括出土した。瓦の厚さは薄手のものが多い。焼成は基本的に良好で、胎土には2mm程度の長石・石英を含む。

56は、回転台を利用した横方向の板ナデで叩き目をナデ消す。凸面の側縁際には、凹型台の痕跡がある。凹面は、縦方向に粗くナデられているが、側板痕が強い部分は布圧痕が残っている。側面調整はc手法。色調は2.5Y6/2黄灰色。

57は、凹面に、粘土紐接合痕、布圧痕、幅4cmの側板痕を明瞭に残す。側面調整はc1手法である。堅緻な焼成で、色調は5B5/1青灰色。

58は、全長36.7cm。凹面には、布圧痕と粘土紐の接合痕が残る。粘土紐の幅は約6cm。一部に布のと同じ合わせ痕を留めるが、縦方向にナデて平滑にする。側縁際には、狭端と広端の2箇所に分界点がある。側面調整はc手法。堅緻な焼きで、色調は5B4/1暗青灰色。

59は、厚さが1.2~1.5cmの薄手の平瓦である。凹面は、布のと同じ合わせ痕の凹凸を縦方向にヘラケズリして平滑にする。側面調整はc1手法。色調はN4/0灰色。

60は、全長38.6cmを測り、粘土紐の接合面で割れているのがわかる資料。粘土紐の幅は6~8.5cm。凸面の側縁際の上半部には、凹型台の圧

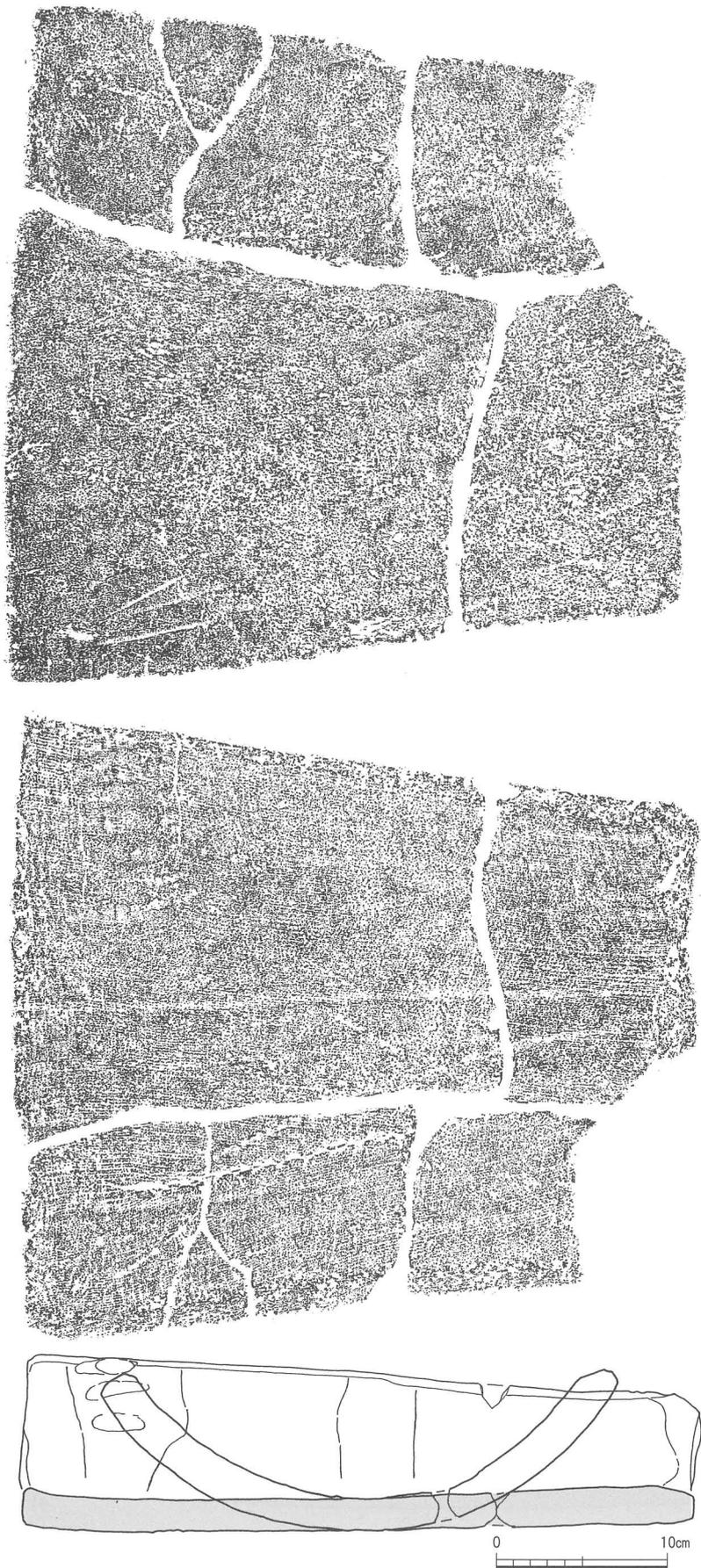


Fig. 27 平瓦4B類 1:4



Fig. 28 平瓦4B類 1:4

痕がある。側面調整はc手法。色調は5YR5/6明赤褐色。

平瓦4B類c2 (61~68) は、南北溝SD9561から一括出土した。瓦は厚さ2.5~3.5cmと厚い。粘土円筒を3分割した平瓦である。凹面には、粘土紐の接合痕、布圧痕を明瞭に残す。焼成は軟質で、粗い胎土。3mm大の長石や石英を大量に含む。

61は、全長40.9cm、狭端幅29.6cm、推定広端幅33cm。凹面には、粘土紐の接合痕と布圧痕が残る。粘土紐は、約4cmの幅で9段積み上げる。両側縁には、狭端側と広端側にそれぞれ2カ所の分割界点がある。側面調整はc手法。右の側縁は広端に近い部分で分割截線を引き損じた痕跡がある。色調は2.5Y6/1黄灰色。

62は、全長41cm、狭端幅28.4cm、推定広端幅35cm。凹面には、布のとじ合わせ痕がある。とじ目・縫い目ともまつり縫い。また、瓦の中央付近の、狭端から1cm下がった部分に径3.5cmの円形の窪みがある。桶のとじ合わせに関する痕跡だろうか。側面調整はc1手法で、狭端も凹面側をヘラケズりする。色調は2.5Y6/1黄灰色。

63は、全長39.5cm、推定狭端幅26cm、広端幅34.3cm。凸面全体を丁寧に斜位方向にナデ調整する。凹面には、幅5.2~6cmの粘土紐の接合痕と布のとじ合わせ痕が残る。布のとじ合わせ痕は、どちらもまつり縫いである。また、右側縁際に分割界点がある。側面調整はc1手法。色調は10YR7/4にぶい黄橙色。

64は、全長39.1cm、推定狭端幅32cm、広端幅36.8cm。凹面には、粘土紐の接合痕、幅2.8cmの側板痕が明瞭に残る。また、両側縁には、分割界点がある。凹面向かって左の側縁の8mm内側に分割截線の引き損じが残る。側面調整はc手法。色調は2.5Y6/6橙色。

65は、全長41.2cm。凹面からみて狭端の右側の角は、粘土紐の合わせ目で欠損している。合わせ目の上には狭端から広

端まで続く布のとじ合わせ痕があり、それに合わせ目を沿わせたのがわかる。側面調整はc手法。色調は2.5Y7/2灰黄色。

66は、全長41.3cm、狭端幅26.2cm、広端幅34cm。凹面に残る粘土紐の接合痕は、幅約4～6cmで、10段積み上げている。右の側縁には、分割界点が2カ所ある。また、62と同じように、分割界点とは別に、中央左寄りの狭端から4cm下に突起状の圧痕がある。側面調整はc手法。狭端の凹面もヘラケズリして面取りをする。色調は5Y6/1灰色。

67は、広端幅34.1cm。凸面は、斜位にナデ調整する。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、どちらもまつり縫い。また、分割界点も両側縁に明瞭に残る。色調は7.5Y6/6橙色。

68は、推定広端幅32cm。凹面に残る粘土紐接合痕の幅は、他の4B類c2のそれよりも狭く、約3cmである。また、布のとじ合わせ痕も確認でき、ともにまつり縫いである。側面調整はc手法。色調は2.5Y5/6明赤褐色。

平瓦5類 (Fig.32, PL.27)

凸面をナデやハケ目などで調整して、もとの叩き目を全く残さない一群である。粘土板桶巻作りの5A類と粘土紐桶巻作りの5B類に分けることができる。

i. 平瓦5A類 (69～72)

69は、凸面を縦方向にハケ目調整する。また、焼成する際に、別個体の側縁が溶着した痕も残る。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、布とじも布の縫い目もまつり縫いである。側面調整はc手法。焼成は良好で、やや精良な胎土には長石・石英を若干含む。色調は10YR5/1褐灰色。第113次SN49東二坊坊間路東側溝SD6031から出土。

70は、Z型の粘土板の合わせ目で割れている資料。凸面には、横方向の板ナデ調整を行う。凹面には、布のとじ合わせ痕が確認でき、布のとじ目がぐ

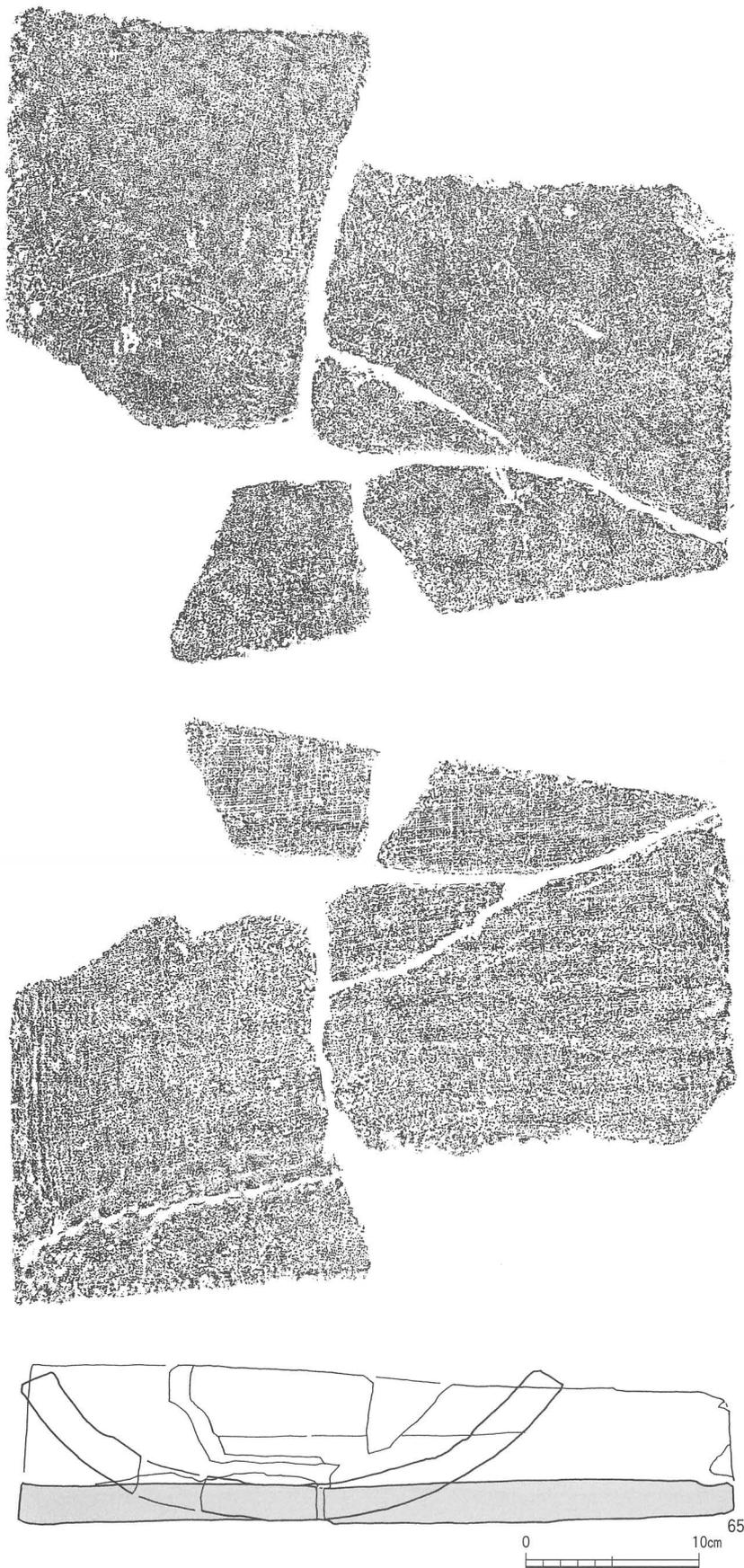


Fig. 29 平瓦4B類 1:4

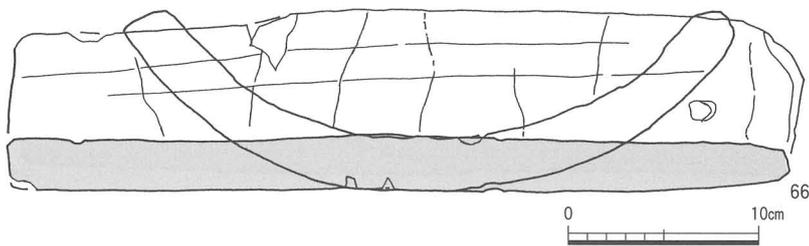
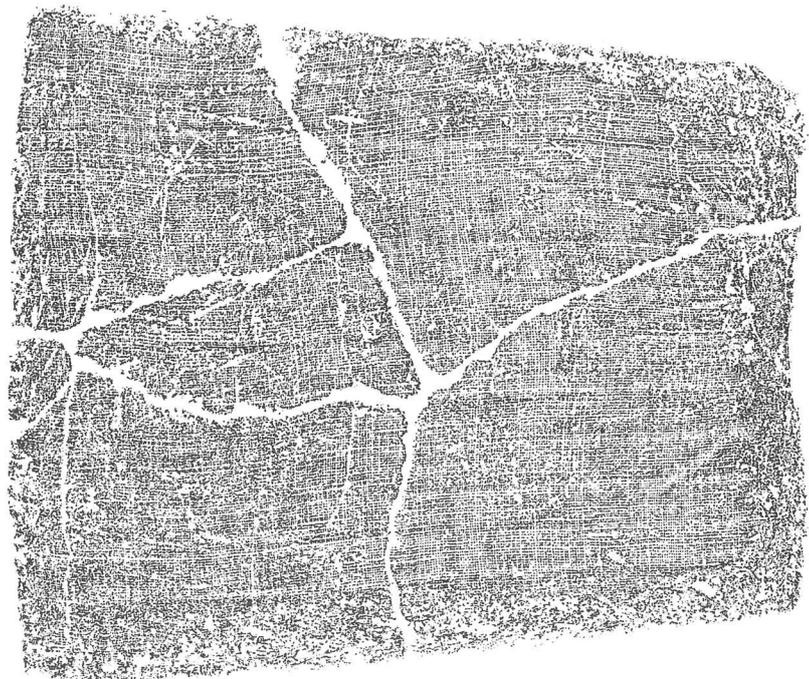
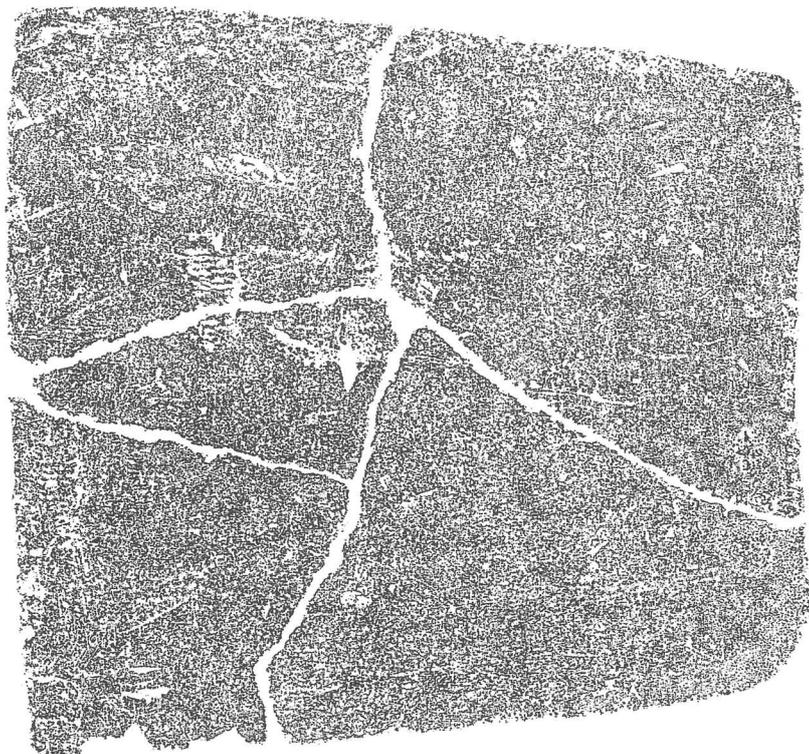


Fig. 30 平瓦4B類 1:4

し縫い、布の縫い目がまつり縫いとわかる。また側縁際には分割界線の痕跡がある。焼成はやや軟質で1mm大の長石・石英・クサリ礫を少し含む。側面調整はc手法。色調は5YR5/1褐灰色。第113次SO49東二坊坊間路東側溝SD6031出土。

71は、凸面を縦のち横方向のナデで調整する。凹面は、左上がりに走る糸切り痕、布圧痕が明瞭に残る。側面調整はc3手法。焼成はやや良好で、長石・石英・クサリ礫を含む。色調は2.5Y6/1黄灰色。東西溝SD9323出土。

72は、凸面を回転台を利用した横ナデで調整する。凹面には、側縁際に布筒と模骨の間にくぐる縦位の撚り紐の圧痕がある。分割界線と思われる。側面調整はc3手法。広端面は凹面側を面取りする。焼成は堅緻で、2mm大の長石・石英・クサリ礫を大量に含む。色調は10Y5/1灰色。第113次SN49包含層出土。

ii. 平瓦5B類 (73)

73は、粘土紐桶巻作りの平瓦。凸面調整は、横方向のハケ目で調整した後に、無文叩きで広端側を叩く。凹面には粘土紐の接合痕が残る。広端に近い側縁際には、分割界点の痕跡が残る。側面調整はa手法。堅緻な焼成で、胎土には1mm程度の長石・石英を若干含む。色調は10R5/2灰赤色。南北溝SD9561出土。SD9561から出土した中では、唯一須恵質の瓦である。焼成と胎土の特徴以外は、凹面に粘土紐の接合痕を明瞭に残すこと、分割界点、凸面ナデ調整など平瓦4B類c2と共通する点も多い。

平瓦6類 (Fig.33・34、PL.28・29)

凸面布目平瓦の一群である。本調査区から出土した凸面布目平瓦については、小谷徳彦が一部報告している²⁾。ここでは、氏の分類を基本的に踏襲してa～dに細分した。それぞれ小谷分

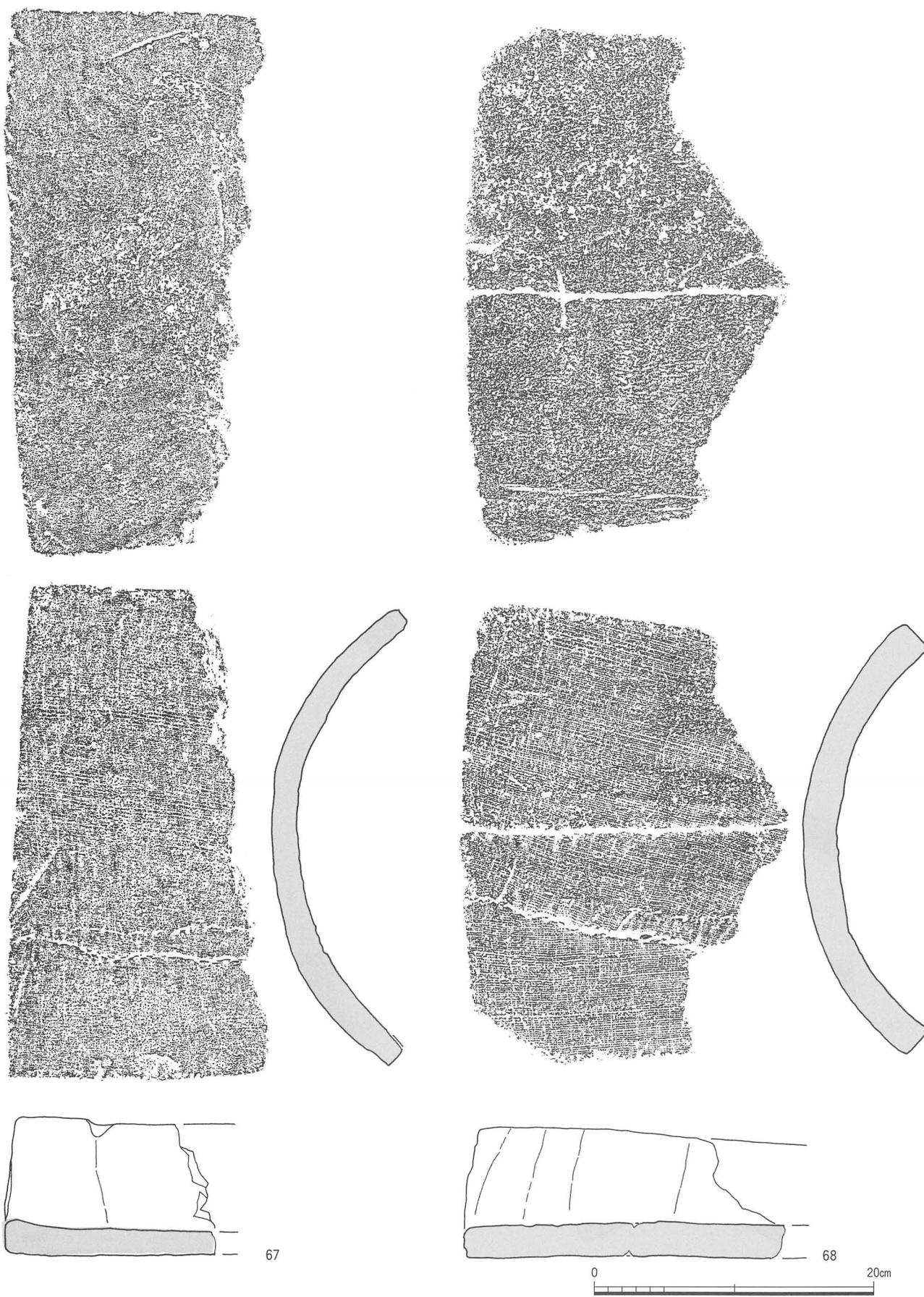


Fig. 31 平瓦4B類 1:4

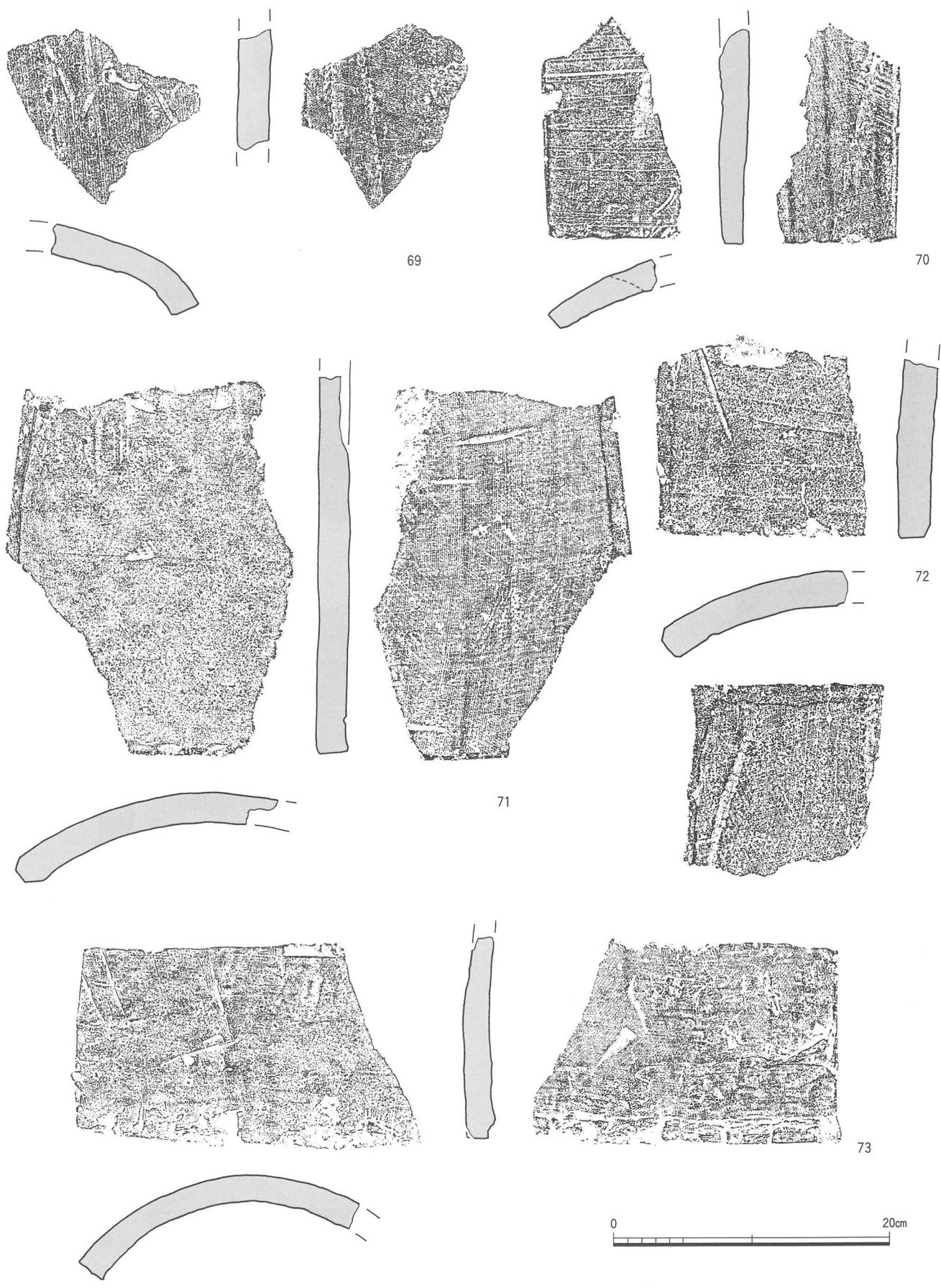


Fig. 32 平瓦 5A・5B類 1:4

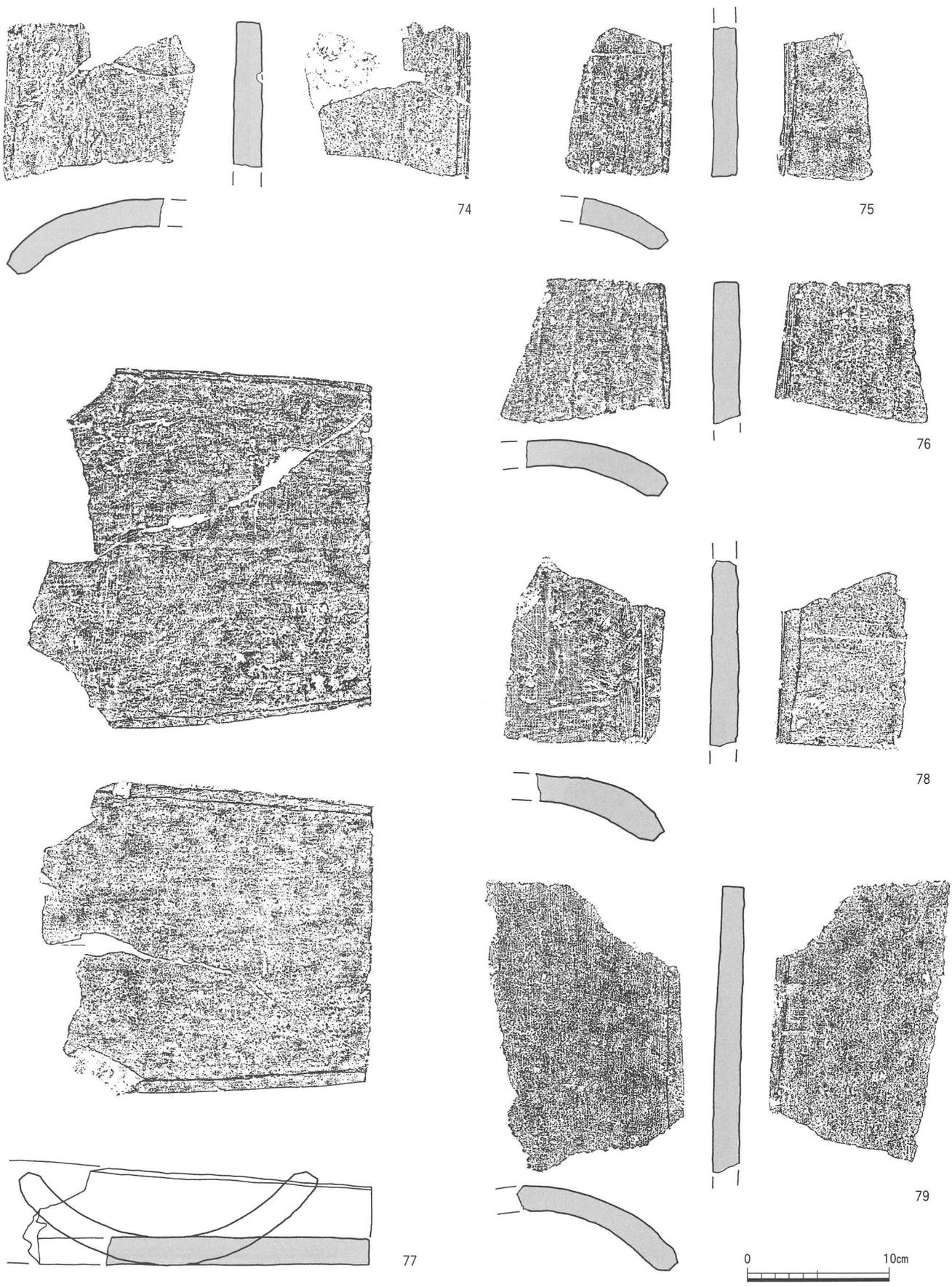


Fig. 33 平瓦6類 1:4

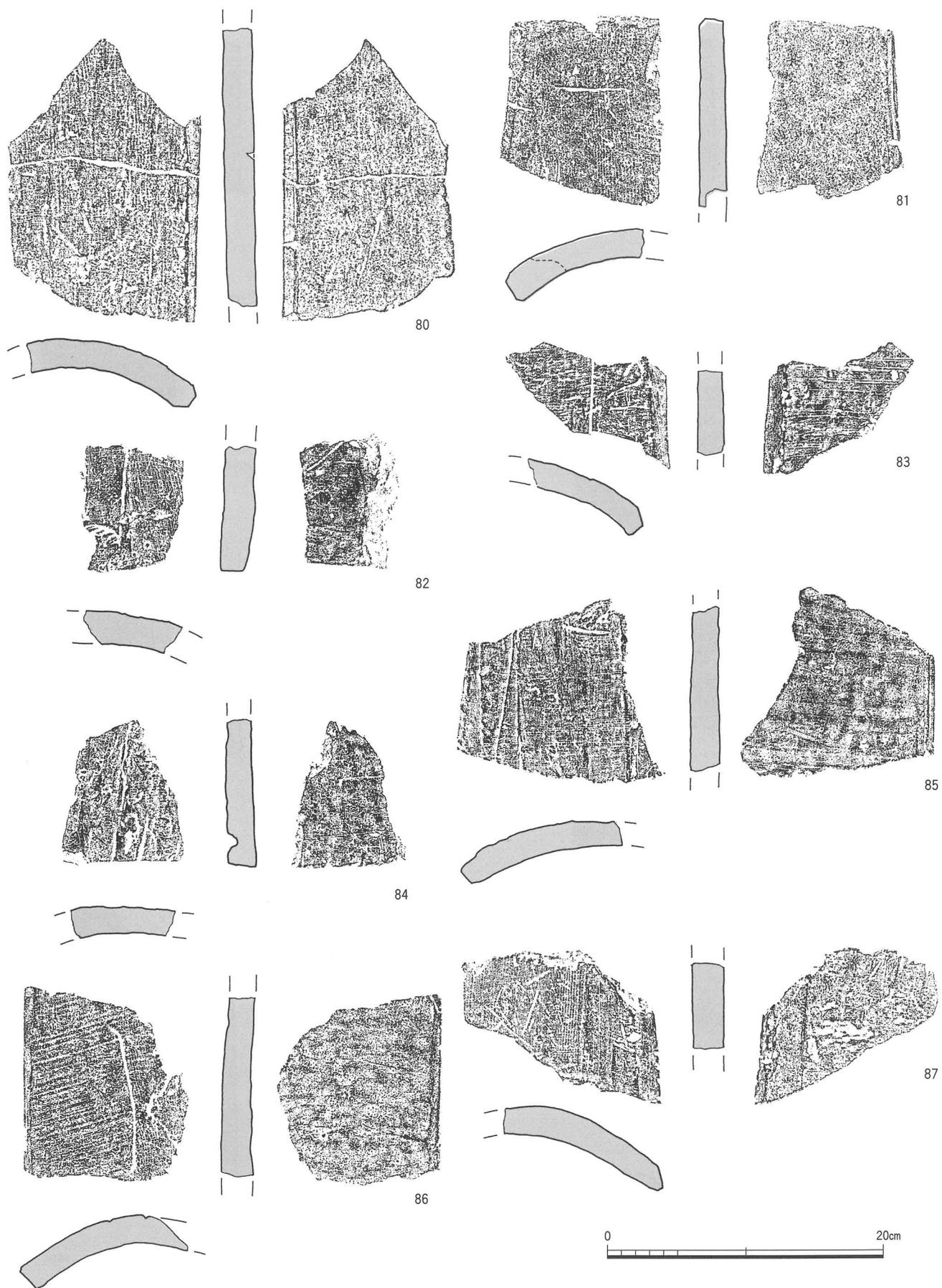


Fig. 34 平瓦6類 1:4

類の1～4類に対応する。

平瓦6類a(74～77)は、凸面に布圧痕と側板痕を明瞭に残す一群。狭端幅が残存する77から、かなり小型の平瓦とわかる。川原寺所用の凸面布目平瓦にあるような、布を側板に留めつける撚り紐の圧痕(布留痕)は明瞭には確認できない。4.5～5cm毎に布が左右に引っ張られた痕跡がかすかにあるので、かろうじて側板に布を留めつける撚り紐があったと推測できる程度である。凹面は棒状の工具などで丁寧になで、叩きなどの痕跡は一切残さない。側面調整は全て、分割截面・破面とともにヘラケズリした後に凹凸面とも面取りするc3手法。胎土は精良で、1mm程度の長石・石英・クサリ礫を少し含む。小谷はこの一群を荒坂瓦窯産としているが、荒坂瓦窯産に特徴的な断面剣先形の側面をもつものがないこと、布留痕が明確に確認できないことから、荒坂瓦窯と比定するには若干疑問が残る。

74は、凸面に残った側板痕の幅は2.3cm。凹面は縦方向のナデ調整。焼成は良好で、色調は10Y5/1灰色。井戸SE9330出土。

75は、凸面に横位に走る糸切り痕が確認できる。堅緻な焼きで、色調は10BG4/1暗青灰色。井戸SE9328出土。

76は、凸面に残る側板の幅は2.3cm。凹型台を使用したためか、布目が一部潰れる。焼成は良好で、色調は2.5Y6/1黄灰色。井戸SE9330出土。

77は、狭端幅19.3cm。凸面には、横位に走る糸切り痕と桶の側板痕が確認できる。側板の幅は2.5cm。凹面は縦方向のナデの後に横方向にも丁寧にナデ調整する。側面は両側とも、広端から狭端に向かってヘラケズリする。焼成は良好で、色調は2.5Y7/1灰白色。東二坊坊間路西側溝SD6032より出土。

平瓦6類b(78～81)は、6類aに類似するものの、異なる点が3つある。1点目は、凸面の側板痕は平滑で、布留痕は確認できないことである。2点目は、側面調整はすべてc3手法だが、凹凸を幅広くヘラケズリする場合が多いこと、3点目は、胎土が粗く、最大5mmの長石・石英・クサリ礫を多く含むことである。

78の凹面には、横方向のヘラ描き線のような細い線が、破片の中央少し上よりと、広端側の破面に入っており、それを横方向にさらにナデ消す。詳細は不明だが、ナデ調整の工具が当たったとも考えられる。焼成は堅緻で、色調は5B5/1青灰色。第113次RE52表土出土。

79は、凸面に左上がりの糸切り痕が確認できる。凹面は、縦方向の丁寧なナデ調整。堅緻な焼成で、色調は

N3/1暗灰色。井戸SE9330出土。

80は、凸面に左上がりの糸切り痕、幅2.3cmの側板痕が確認できる。凹面は縦方向にナデた後、部分的に横方向にもナデて整える。焼成は良好で、色調は10YR7/2にぶい黄橙色。井戸SE9330出土。

81は、凸面に左上がりの糸切り痕と粘土板の合わせ目Z型が確認できる。凹面は縦方向のナデ調整。狭端は凸面側を面取りする。焼成は良好で、色調は5Y6/1灰色。第113次SN51包含層より出土。

平瓦6類c(82～86)の凸面には、糸切り痕を明瞭に残す。桶の側板痕は、明瞭に残るものと、そうでないものがある。また、縦10cm程度の撚り紐の圧痕を残すものが多い。小谷徳彦は、これを布を側板に留めつけるための撚り紐と考えた³⁾。実際に86をみると、撚り紐は布目の上にあり、しかもその両端は布筒の下にくぐるのがわかる。したがって、やはりこれは布留めのための撚り紐とみてよからう。布留痕ほど、側板に布をきっちり留めつけていないので、ところどころ布がよれているものが多い。凹凸面は粘土タタラを十分に練っていなかったせいも、表面の凹凸が激しい。焼成は甘いものが多く、胎土は3mm大の長石・石英・クサリ礫を若干含む。

82は、凸面に布のほつれがみられ、広端から1.6cm上に撚り紐の圧痕が確認できる。凹面は横方向のナデ調整。焼成は軟質で、色調は7.5Y2/1黒色を呈す。第113次RF55灰褐土から出土。

83は、凸面に、横方向の糸切り痕と撚り紐痕が確認できる。凹面は横方向にナデているが、凹凸が激しい。側面調整は、凸面側をヘラケズリするc2手法である。焼成は軟質で、色調はN4/0暗灰色。井戸SE9330出土。

84は、凸面の凹凸が激しい。凹面は横方向のナデ調整。焼成は軟質。色調は10YR7/3にぶい黄橙色。東西溝SD9323出土。

85は、凸面に幅2.8cmの側板痕が明瞭に残る。横方向の糸切り痕と撚り紐痕が確認できる。また、側縁に近い部分で、側板の上を斜めに走るダーツの痕跡があるが、縫い目痕は確認できない。凹面は横方向のナデ調整。側面調整はc3手法である。井戸SE9330出土。

86は、Z型になる粘土板の合わせ目で割れている。凸面には、やや右上がりの糸切り痕と撚り紐痕が確認できる。凹面は横方向にナデているが、凹凸が激しい。側面調整はc3手法。焼成は軟質で、色調は2.5Y3/2黒褐色。

4類d(87)は、軟質の焼成で、黄橙色の色調を呈する一群である。胎土は精良で、1mm程度の長石・石英・

クサリ礫を含む。

87は、凸面に側板の圧痕を明瞭に残す。側板の幅は2.5cm。凹面は横方向のナデ調整。側面調整はc3手法だ

が、凸面からのヘラケズリが深く、凹面側は、凹面に沿うように幅広く面取りしているので、剣先形のような断面を呈す。第113次SH49包含層より出土。

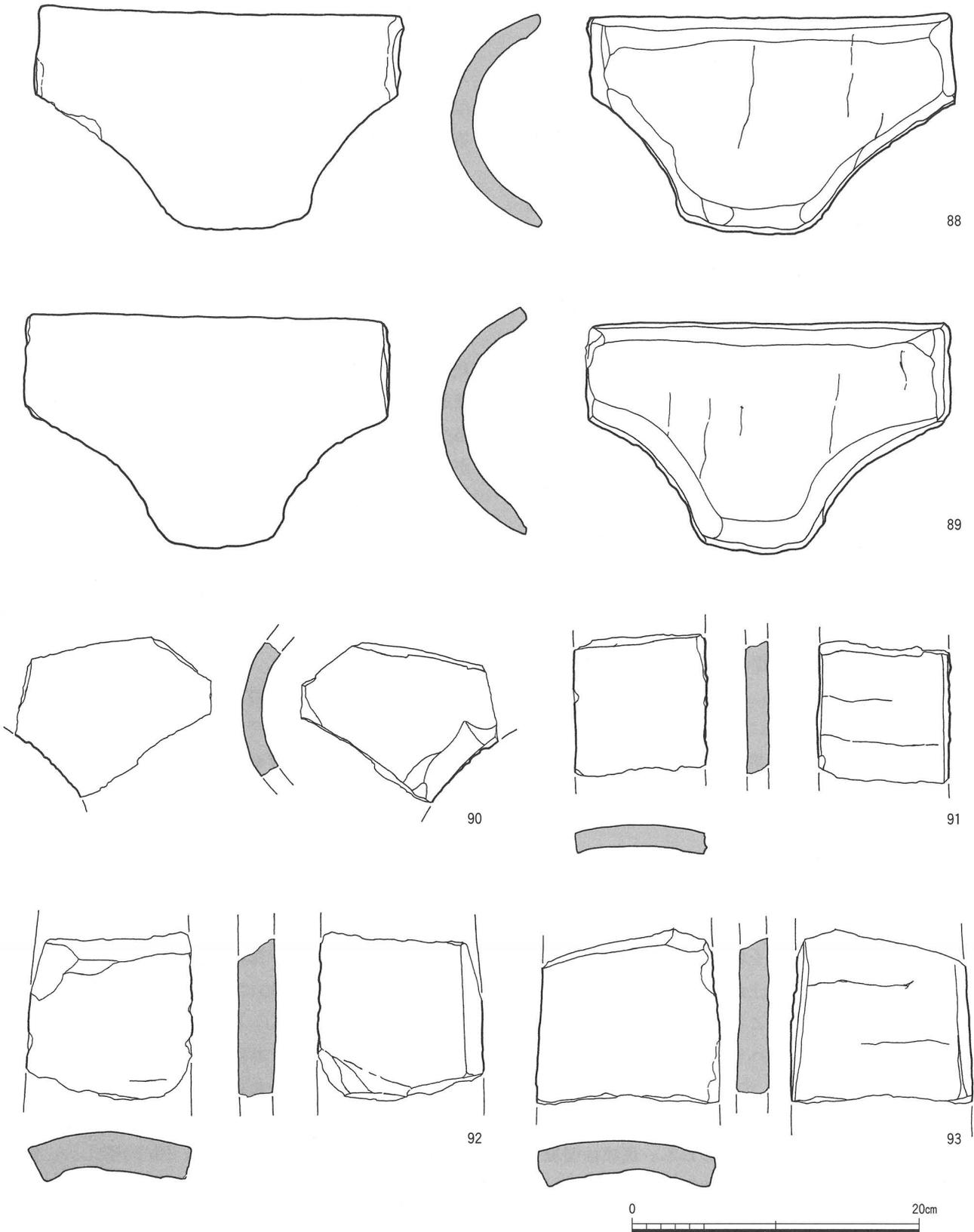


Fig. 35 面戸瓦・熨斗瓦 1:4

E 面戸瓦 (Fig.35、PL.30)

面戸瓦は全部で7点出土した。全て粘土紐巻きつけ技法の丸瓦を焼成前に加工した切面戸瓦である。ここでは、完形2点を含む3点を報告する。

88は、全長25.3cm、舌部上下幅16cm、両袖部の端部幅7.5cm、厚さ1.5cmを測る。凸面の調整は摩滅が著しく不明だが、凹面には布圧痕が明瞭に残る。また、面戸瓦の端面周囲全てを、凹面側からみて時計逆回りにヘラケズリする。焼成は軟質で、やや精密な胎土に2mm程度の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は2.5YR3/1暗赤灰色。南北溝SD9561より出土。

89は、全長25cm、舌部上下幅15cm、左袖端部幅7.6cm、右袖端部幅9cm、厚さ1.3cm。凸面には、縦縄叩き後に、回転台を利用した縦方向のナデ調整を行う。面戸瓦に成形する前の丸瓦円筒の段階での調整である。凹面には、布圧痕が明瞭に残り、周囲全てを何度かに分けてヘラケズリする。焼成は堅緻で、2mm程度の長石・石英を少し含む。色調は10R4/2灰赤色。南北溝SD9561出土。

90は、凸面からみて右の舌部から袖部にかけてが残存している。凸面は、縦縄叩きの後に横方向のナデ。凹面は、布圧痕が明瞭に残る。端面は、舌部から袖部に向かって凹面側からやや幅広のヘラケズリを行う。焼成は堅緻で、やや粗い胎土に2mm程度の長石・石英を多く含む。色調はN5/0灰色。南面外濠SD501出土。

F 熨斗瓦 (Fig.35、PL.30)

全部で5点出土した。全て粘土紐桶巻作り平瓦を焼成前に分割加工した切熨斗瓦である。そのうちの3点を報告する。

91は、破片の中央部の幅が9cm、厚さ1.4cmを測る。凸面は、縦縄叩きを横方向にナデ消す。凹面には、粘土紐の接合痕、布圧痕、幅約2.5cmの側板痕を明瞭にとどめる。側面調整は片方はa手法、もう片方はc手法である。焼成は良好で、胎土には2mm程度の長石・石英を多く含む。色調はN5/0暗灰色。土坑SK9740出土。

92は、破片中央部の幅が11cm。平瓦の側縁をそのまま用いたためか、片方の側縁が斜めに傾いて一方で幅が狭くなっている。凸面は、縦縄叩きを横方向にナデ消す。凹面には、布圧痕、幅約3cmの側板痕が残る。側面調整はc手法。焼成は良好で、2mm程度の長石・石英・クサリ礫を含む。色調は10YR7/3にぶい黄橙色。南面外濠SD501より出土。

93は、破片中央部の幅が12.5cm。92と同じく、幅が狭い方を上にした場合、凸面からみて左側が斜めに傾く。

凸面は縦縄叩きのちに、横方向のナデ調整。凹面は粘土紐の接合痕、布目痕、幅約3.3cmの側板痕が明瞭に残る。側面調整は片方がc手法、もう片方が凸面側を面取りするc2手法。焼成は良好で、1mm程度の長石・石英・クサリ礫を多く含む。色調は7.5YR7/4にぶい橙色。南面外濠SD501出土。

G 小 結

以上、これまで出土した瓦類を報告したが、本調査区には粘土板巻きつけ技法と粘土紐巻きつけ技法という異なる二つの技法で製作された瓦が存在する。これらは地点を変えて出土しており、六条大路SF2910を境にして以南では粘土板巻きつけ技法の瓦が、以北では粘土紐巻きつけ技法の瓦が主体を占める。つまり外周帯を含む宮内とその外とでは、瓦の様相が異なる(『紀要2001』)。ここでは、本調査区出土の瓦について、六条大路を挟んで南と北にわけて若干の考察を加え、小結としたい。

1. 六条大路以南の瓦—小山麩寺の瓦—

第113・131次調査区SF2910以南から出土した瓦類は、井戸SE9330もしくは包含層から出土したものが大半で、明確な建物の遺構に伴うものはない。しかし、重弧文軒平瓦、行基式の丸瓦1類、刻線叩きをもつ平瓦1～3類、平瓦6類とした凸面布目平瓦(以下、凸布)など、藤原宮の瓦とは明らかに異なる一群が分布する。さらに凸面に縄叩きがある瓦がほとんどないことも特筆できよう。

これらの瓦は、調査区から約200m南に位置する小山麩寺所用の可能性が高いことが『紀要2001』でも指摘されている。

小山麩寺所用の重弧文軒平瓦は、近江俊秀によって8型式に分類されている⁴⁾。しかしながら、本調査で出土した重弧文軒平瓦は、そのどれとも合致しない。

また、檀原考古学研究所が収蔵する小山麩寺の丸・平瓦の資料を実見すると、丸瓦は縄叩きが、平瓦は縄叩きと凸布が主体で、斜格子叩きはごく少量あるものの、本調査区出土の平瓦1・2類とは叩き原体が異なる。さらに平行刻線叩きに至っては全く確認することができなかった。このように小山麩寺の丸・平瓦は、六条大路以南出土の瓦とかなり異なる様相を示す。

ただし、凸布である平瓦6類は、細分したa～dの4種全て小山麩寺の凸布と共通することが確認できた。特に長い撚り紐痕をもつ平瓦6類cは、小山麩寺特有の凸布として注目できる。

したがって、平瓦6類のみが小山麩寺所用瓦で、それ以外の瓦は他の場所からの流出とするより、平瓦1～3

類も含めて小山麿寺所用の瓦と考えるほうが自然である。小山麿寺は、近江による出土瓦の詳細な分析で、最初に金堂・講堂が造営され、一定期間を経て中門・回廊、続いて藤原宮の造営中に南門造営と、建物によって瓦の様相はかなり異なることが明らかにされている⁵⁾。現状では小山麿寺の堂宇の中で、平瓦1～3類と凸布を主体とする未発掘の建物が存在すると想定しておきたい。

ii. 六条大路以北の瓦—藤原宮の瓦—

六条大路SF2910以北から出土した瓦の量は、出土位置によって大きな偏りがあり、ほとんどが南面外濠SD501と南北溝SD9561からの出土である。特に南面外濠SD501出土の瓦は、埋没した外濠の上面に並べるような形で出土しており、意図的かは不明なものの、一括性が高い。

これらの瓦類は、藤原宮大極殿や朝堂院所用瓦と比べて若干小さい。また、軒瓦、丸・平瓦、道具瓦ともに一定の規格性があり、それぞれの瓦がぴったりと組み合わせる。したがって、この一群は、同じ建物で使用した瓦であり、出土位置からみても南面大垣の所用であろう。

藤原宮大垣所用軒瓦は、東面大垣で6276C-6647（飛鳥藤原第24次調査『藤原概報9』）、東面北門では6279B-6646C、6276C-6647C、6274Aa-6646A・Bのセットであり、また南門中門付近では6278B-6647D、6278C-6647Eが比較的多く出土することが指摘されている⁶⁾。

今回出土した軒瓦は非常に数が少なく、南面大垣の所用瓦を特定することは不可能である。しかし、南面外濠SD501出土の軒瓦に限れば、6275A・B、6643Cなど高台・峰寺産の製品が目立つ。また、6642Abは本調査区において3点出土しているが、そのうちの2点がクサリ礫を非常に多く含む高台・峰寺産の胎土だった。6642Abは高台・峰寺産の軒平瓦と製作技法が類似しながらも、クサリ礫を含まない粗い胎土であるが故に産地不明のPグループに分類されている⁷⁾。今回高台・峰寺産の胎土を備える6642Abの出土によって、6642Aの日高山瓦窯から最終的に高台・峰寺瓦窯へ移動した可能性が高くなった⁸⁾。

さて、軒瓦は高台・峰寺産が比較的目立ったが、丸・平瓦に目を転じると、高台・峰寺産の製品は少なく、丸瓦2類a、平瓦4B類といった、クサリ礫を含まない、砂粒の多い粗い胎土の製品が大部分を占める。これらの丸・平瓦は、ともに粘土紐巻きつけ技法である。

藤原宮造瓦における粘土紐巻きつけ技法は、その生産地が大和盆地内に限られる。南面外濠SD501と南北溝

SD9561から出土した瓦類の粘土紐巻きつけ技法の割合は、軒瓦も含めて100%である。この数値は、南門中門地域出土の軒丸瓦の粘土紐巻きつけ技法が占める割合が57%であることに比べると圧倒的に高い（『藤原報告Ⅱ』）。もっとも、軒丸瓦のみと、丸・平瓦も含んだ瓦類全てとを単純には比較できない⁹⁾。しかしながら、大垣周辺部でも粘土紐巻きつけ技法の割合の高い箇所があり、しかも軒瓦と丸・平瓦とでは胎土や焼成が異なること、特に丸・平瓦の胎土は特徴的で、あまり宮中中枢部ではみられないことは指摘できると思う。

大和盆地内で生産された藤原宮屋瓦には、瓦窯が特定できない造瓦グループが3つ存在する¹⁰⁾。本調査区で出土した丸・平瓦は、断定はできないが、そのうちのNやPといったグループの胎土に非常によく似ている。

今回の調査で、南面大垣周辺で粘土紐巻きつけ技法の瓦が多く出土したことは、藤原宮の大垣造営過程を考える上で重要である。また、藤原宮屋瓦は、宮造営を周辺部から中枢部へと進める中で、高台・峰寺瓦窯にその生産を集中させると考えられている。今回報告した六条大路以北の瓦によって、その前段階の宮周辺部造営期における大和盆地産の瓦の一樣相をうかがい知ることができた点でも大きな成果といえるだろう。

註

- 1) 大脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研、1991年
- 2) 小谷徳彦「飛鳥における凸面布目平瓦の一事例」『奈良文化財研究所紀要2004』奈文研、2004年
- 3) 前掲註2) 参照
- 4) 近江俊秀「7世紀後半の造瓦の一形態—明日香村小山麿寺を中心として—」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集、同刊行会、1999年
- 5) 前掲註4) 参照
- 6) 山崎信二「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢Ⅱ』奈文研創立40周年記念論文集、同朋舎、1995年
- 7) 花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻2号、考古学研究会、1993年
- 8) しかしながら、6643Abにクサリ礫を含まない粗い胎土の一群が存在することも事実である。これらの一群は、範傷の進行具合から今回出土した高台・峰寺産の胎土の6643Abよりも若干先行すると思われる。
- 9) 実際、西方官衙では丸・平瓦における粘土紐巻きつけ技法の割合が軒瓦のそれよりも高い（『藤原報告Ⅱ』）。
- 10) 前掲註7) 参照

3 土器類

高所寺池の調査では、縄文時代～近代にかけての遺物が出土した。古墳時代、飛鳥・奈良時代、鎌倉時代土器の出土量が多く、六条条間路南側溝SD4752や東西大溝SD9633では多量の土器が出土した。

本稿では、遺跡を理解する上で重要となる遺構からの出土土器を中心に報告する。藤原宮期前後の遺構については、宮内・宮外での土器のあり方を知るために項目を分けた。なお、古墳時代土器の調整技法名や時期区分については、田辺昭三氏による陶邑編年、その他の土器の記載方法は『藤原報告Ⅱ』など、既刊の奈文研刊行物に従う。

A 条坊関係遺構出土土器 (Fig.36～40)

現・高所寺池は、藤原宮南面大垣SA2900をもって藤原宮内・宮外に分かれる。調査では南面大垣SA2900や六条大路SF2910を中心に、南面内濠SD502・外濠SD501、東二坊坊間路の東西側溝SD6031、SD6032A・B、六条大路の南北側溝SD2909、SD2915、六条条間路SF4750の南北側溝SD4752・4751という、条坊関係遺構を多く検出した。各遺構の遺物出土量は概して少なく、まとまった出土量をみることは、東二坊坊間路西側溝SD6032Bと六条条間路南側溝SD4752のみである。

藤原宮南面大垣内濠SD502・外濠SD501出土土器 (Fig.36)

南面内濠SD502・外濠SD501では、ごく少量の土器が出土した。内濠出土土器には土師器杯A、杯G、高杯A、須恵器壺蓋がある。外濠では土師器杯H、皿A、須恵器杯B、甕などが出土した。

1は土師器杯Cの口縁部である。口縁端部は肥厚する。内面はヨコナデのち一段放射暗文を施す。外面は口縁部にヨコナデのちミガキを施す。口縁部以下はナデの。口径は16.0cm。2は杯G。やや平坦な底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁端部内面には面をもつ。見込み部分には植物の圧痕が残る。底部内外面をナデ、のち口縁部をヨコナデする。口径17.6cm、器高4.0cmを測る。3は

土師器杯H。底部は大半を欠く。底部内面はナデ、外面はヘラケズりする。口縁部はヨコナデする。口径は15.2cmを測る。4は皿A。口縁部から見込み部分までが遺存する。口縁端部は内側へ折る。口縁部内面には一段放射暗文を施す。口径は23.0cmである。5は高杯Aの脚部。裾部を欠失している。芯棒成形後、内面を工具で削り、外面を面取りする。

6は須恵器杯B。平坦な底部にやや外方へ開く口縁部がつく。高台の貼付位置は、立ち上がり部分よりも内側にある。口径18.4cm、高台径12.0cm、器高4.4cmを測る。7は須恵器壺蓋。丸みのある頂部に、受部よりも僅かに突出する口縁部がつく。つまみは欠失している。頂部内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケズりする。口径は9.0cmである。8は中型甕の口縁部片。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部外面には面をもつ。口径は24.2cm。

南面内濠SD502・外濠SD501出土土器は、外面にミガキを施す土師器杯Cや、立ち上がり部分よりも内側に高台を貼り付ける須恵器杯Bがある一方、口縁端部を内側に折り曲げる土師器皿Aなど、新しい様相を示す土器も少量含んでいる。したがって、本遺構出土土器は飛鳥Ⅳ～Ⅴ、すなわち7世紀末～8世紀初頭に主体があるといえる。

東二坊坊間路西側溝SD6032B出土土器 (Fig.37)

東二坊坊間路西側溝は新旧2条ある。新しい側溝SD6032Bでは比較的多くの土器が出土した。土師器には杯A、杯C、杯G、杯H、皿B、鉢、甕B、鍋Bなどがある。須恵器は杯B蓋、鉢、壺、甕などが出土した。

9、10は土師器杯A I。平坦な底部に、やや外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸く肥厚し、やや内側へ傾く。内面はヨコナデのち二段放射暗文を施す。外面の調整は、底部にヘラケズりを施すb手法による。口径は9が17.6cm、10は18.0cm、10の器高は6.0cmを測る。11は杯C II、12は杯C I。12は底部を僅かに欠く。口縁部外面から内面全体をヨコナデする。11は一段放射暗文と螺

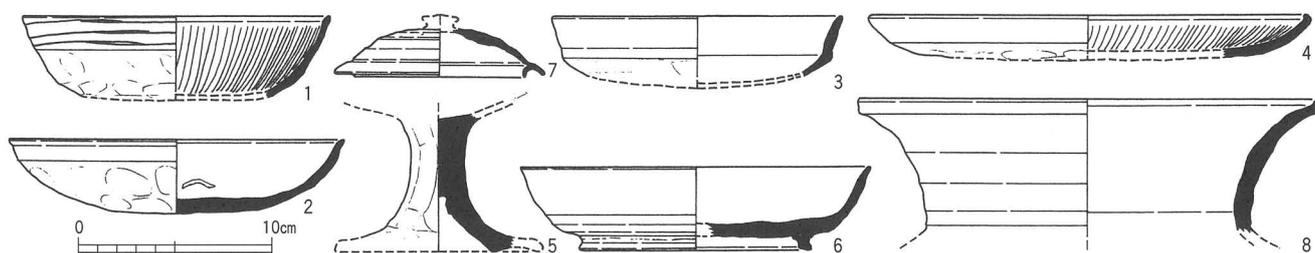


Fig. 36 南面大垣内濠SD502・外濠SD501出土土器 1:4

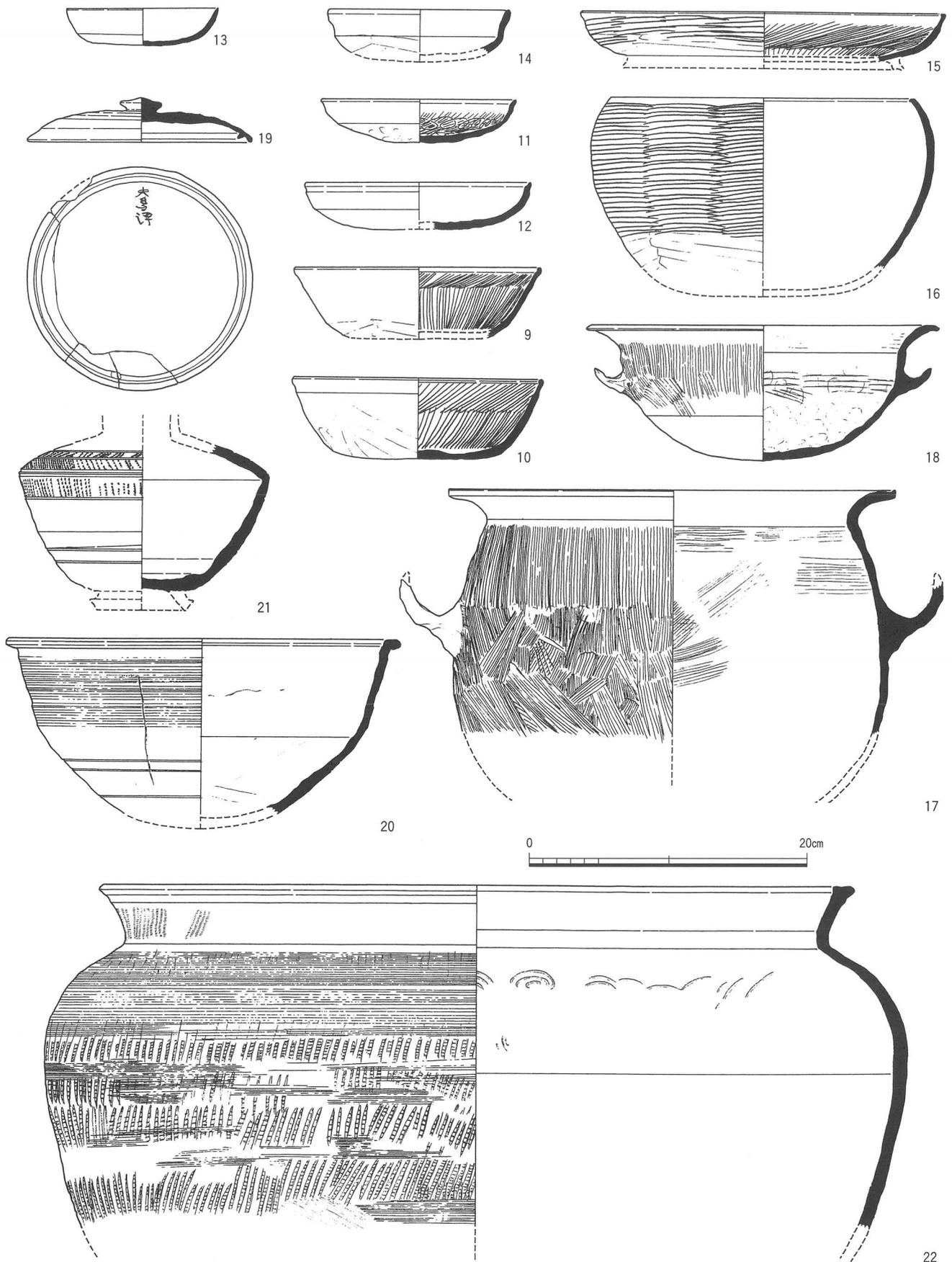


Fig. 37 東二坊坊間路西側溝SD6032B出土土器 1 : 4

旋暗文を施す。底部外面には、指頭圧痕が明瞭に残る。12は摩滅が激しく、暗文の有無は不明。11は口径14.0cm、器高3.2cmで、12は口径16.4cm。13は杯G。完形に復元できる。口径は11.0cm、器高は2.8cmである。14は杯H。底部の大半を欠失する。器壁は厚みがある。外面は、底部と口縁部の境に鈍い稜がある。口径15.0cmを測る。15は皿B。底部の大半と高台を欠失する。底部外面には高台の貼付痕跡が残る。口縁端部は外傾する面をもつ。内面は、ヨコナデのち二段放射暗文を施す。口径は26.0cm。16は鉢で、底部を欠失する。内面全体をナデ、外面は底部にヘラケズリを施し、のち口縁部を磨いて仕上げる。焼成は甘く、内面に暗文はみられない。口径は22.0cmである。17は甕B。丸みのある体部に、大きく外方へ開く口縁部がつく。口縁端部外面には面をもつ。把手の接合方法は貼付技法による。体部内面にハケメを施したのち、ナデを施す「大和型」の資料である。口径は32.4cm。18は鍋B。丸みのある底部に、大きく外反する口縁部がつく。端部は丸くおさめる。体部内面はヨコハケのちナデを施す。底部はユビオサエを施す。外面はタテハケのち底部をナデる。口縁部はヨコナデする。口径25.2cm、器高10.0cmを測る。

19は須恵器杯B蓋。ほぼ完形で出土した。やや丸みのある頂部に、先端のやや突出した宝珠つまみと小さなかえりのある口縁部がつく。ロクロ成形後、頂部内面をナデ、外面の三分の一程度をロクロケズリする。頂部内面には篋で「大鳥評」と記す。これは河内国大鳥郡の、大宝令以前の表記である。陶邑古窯址群の大半が大鳥郡に含まれることから、この蓋も陶邑産であり、土器の貢納制の一端を示す重要な資料である。口径16.4cm、器高3.3cmである。20は鉢。底部は欠失する。口縁端部は粘土を外方へ折り曲げ、上面に面をもたせる。底部は内面をナデ、外面をロクロケズリする。カキメを施したのち、ヘラ記号「|」を記す。口径は28.4cmである。21は台付長頸壺。高台と口頸部は欠失している。肩部はやや張る。体部下半はロクロケズリののち、二条の沈線を施す。肩部には沈線と刺突文を施す。22は甕C。体部下半を欠失する。最大径は体部上位に求められる。口縁端部上面は面をもつ。外面は格子目タタキののち、カキメを施す。内面はロクロナデを施すが、同心円当具の痕跡が残る。口径は54.4cmを測る。

これら東二坊坊間路西側溝SD6032B出土土器は、口縁端部を軽く内側へ折り込む土師器杯A Iや皿B、やや平坦な頂部に小さなかえりをそなえた口縁部がつく須恵

器杯B蓋の存在に特徴がある。したがって、本遺構出土土器は、飛鳥Ⅳ～Ⅴ（7世紀末～8世紀初頭）に比定できよう。

東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器 (Fig.38)

高所寺池の東辺に位置する東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器の大半は古墳時代の土器である。古代の土器はごく僅かであるが、土師器には高杯、甕など、須恵器には杯A、杯B蓋、甕などがある。

23は土師器高杯H。杯底部の一部および裾部を欠失する。杯部は浅く、底部もやや平坦である。底部内面をナデ、外面をヘラケズリし、口縁部をヨコナデする。柱状部は内面をヘラケズリして成形する。軟質で、柱状部外面の調整は不明。口径は15.0cmを測る。

24は須恵器杯A。底部と口縁部の一部が出土したのみである。底部外面はヘラ切りする。25は杯B蓋。完形で出土した。丸みのある頂部に、小さなかえりをもつ口縁部と、丸みのある宝珠つまみがつく。頂部外面の二分の一程度をロクロケズリする。口径10.6cm、器高2.8cmである。26は中型甕である。口縁部から体部上位にかけての破片が出土した。口縁端部は面をもつ。体部内面に同心円当具をあてがい、外面は、ほぼ全面に平行タタキを施す。のち、体部外面にカキメを施し、口縁部をロクロナデで仕上げる。口径は19.4cmを測る。

これら東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器は、出土量は少ないものの、飛鳥Ⅳ～Ⅴすなわち7世紀末～8世紀初頭に比定できよう。

六条条間路南側溝SD4752出土土器 (Fig.39・40)

高所寺池の北辺に位置する六条条間路南側溝SD4752では多量の土器が出土した。土師器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、ロクロ製土師器杯C、皿A、高杯C、高杯H、甕A、甕B、長胴甕などがある。須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、椀A、鉢F、壺、短頸壺蓋、甕などがある。

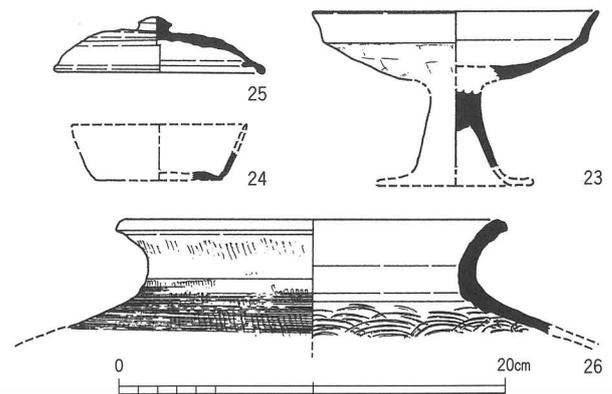


Fig. 38 東二坊坊間路東側溝SD6031出土土器 1 : 4

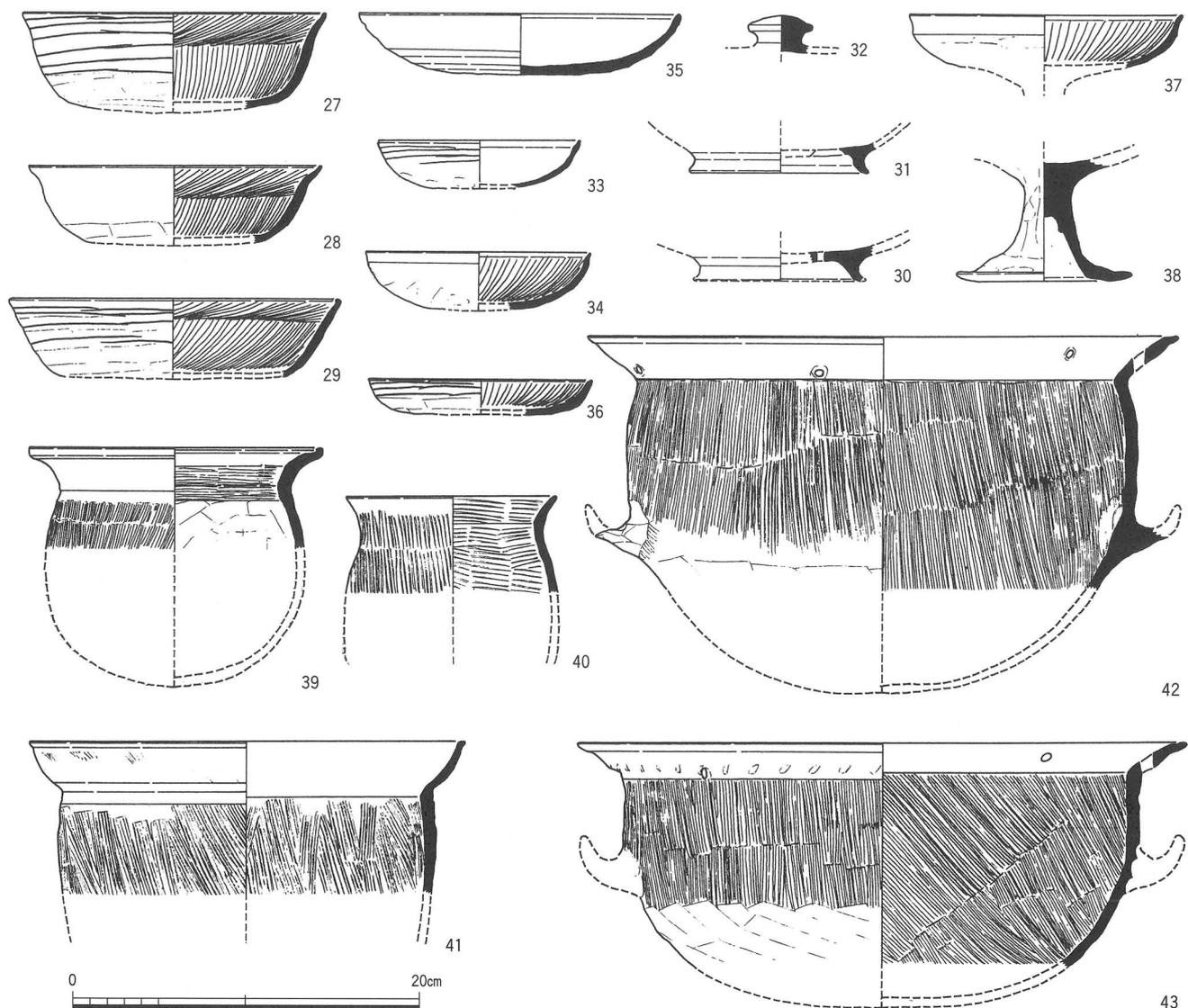


Fig. 39 六条条間路南側溝SD4752出土土師器 1:4

27~29は土師器杯A。いずれも底部を欠失する。口縁端部は27、28が丸くおさめるのに対し、29は内側へ折り込む。内面は底部をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、二段放射暗文を施す。27の外表面は、口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリし、ミガキを口縁部のみに施すb1手法による。28は口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリするb0手法である。29はb1手法を基調とするものの、口縁端部直下のみをヨコナデし、以下にヘラケズリを施す点で特異であるといえる。口径は13.2~19.2cmを測る。30、31は杯B。いずれも底部のみの出土で、焼成後に円孔を穿つ。底部内外面はナデを施す。31の高台径は10.2cmである。32は杯B蓋。つまみのみの出土である。33、34は杯C II。いずれも底部を一部欠失する。33は口縁部をヨコナデし、外面にミガキを施す。内面には暗文は見られない。34は、底部内面をナデ、口縁部をヨコナデした後、

一段放射暗文を施す。口径は33が11.8cm、34が13.2cmである。35はロクロ製土師器杯C。ほぼ完形で出土した。底部外面をロクロケズリする。口径18.6cm、器高3.6cmを測る。36は皿A。底部を一部欠失する。内面は、底部をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、一段放射暗文を施す。外面調整はb1手法による。口径は13.0cmである。

37は高杯Cの杯部である。口縁部を強くヨコナデしたのち、一段放射暗文を施す。口径は16.0cm。38は高杯A。脚柱部のみが出土した。芯棒成形後、脚部内面を工具で削り、外面を面取りする。裾部はヨコナデする。裾部径は10.4cmである。39、40は甕A。39は体部中位以下を欠く。体部は内面にケズリ、外面にハケメを施したのち、口縁部内面をハケメ、外面をヨコナデで仕上げる。40は、やや胴長な体部に直線的にやや外方へ開く口縁部がつく。内外面全体に粗いハケメを施す。口径は39が17.0cm、40

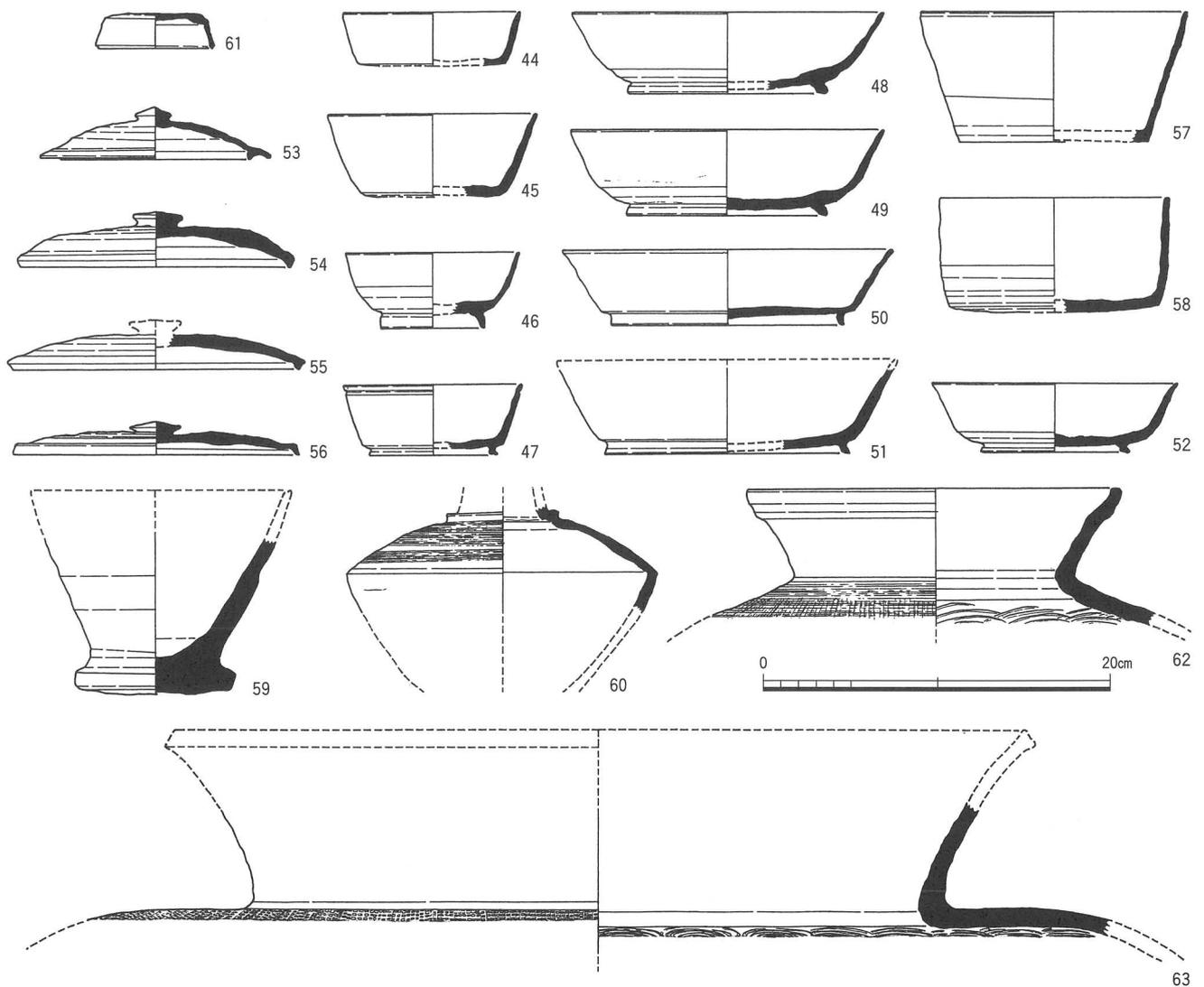


Fig. 40 六条条間路南側溝SD4752出土須恵器 1:4

が12.2cmである。41は長胴甕。緩やかに内弯する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデする。口縁部外面にはハケメの痕跡が残る。42は甕B、43は鍋B。いずれも底部と把手を欠く。内外面にハケメを施したのち、底部外面をヘラケズリする。口縁部はヨコナデののち、円孔を穿つ。各円孔の間隔より、その数は42は8箇所、43が7箇所程度と推測できる。口径は42が34.4cm、43が35.4cm。これらの甕は、体部内面の調整技法や口縁部の形態から39が河内型、40~43は近江型と判断できよう。

44、45は須恵器杯A。いずれも底部の一部を欠失する。口径は44が10.2cm、45が12.0cmで、45がやや深手である。46~52は杯B。口径の大小により三種に分かれる。杯BⅢ(46、47)の高台の貼付位置は立ち上がり部分よりも少し内側にある。高台端部は46が丸くおさめるのに対し、

47は平坦である。47の口縁端部外面には一条の沈線を巡らせる。46が口径10.0cm、高台径6.0cm、器高4.4cm、47は口径10.4cm、高台径7.4cm、器高4.0cmである。杯BⅠ・BⅡ(48~52)の口縁部は、底部から大きく外方へ開く。50以外は器壁に厚みがあり、立ち上がり部分よりもやや内側につけた高台はやや外方へ開く。口径は17.9~19.0cm、高台径は11.4~14.2cm、器高は4.5~5.0cmを測る。53~56は杯B蓋。53のみ口縁部にかえりを有する。いずれも頂部外面はロクロケズリ、内面にはナデを施す。つまみの先端は、53が尖るのに対し、54、56は扁平である。法量は口径10.8~16.6cm、器高2.0~2.8cmである。57、58は椀A。いずれも底部の一部を欠失する。口縁部は平坦な底部から、ほぼ垂直に立ち上がる。底部をヘラ切りしたのち、口縁部中位以下をロクロケズリする。口径は57が15.5cm、58が13.4cmである。59は鉢F。口縁端部を欠

失する。底部はヘラ切りする。軟質で胎土が脆いため、使用痕を確認することはできない。60は長頸壺。体部中位から頸部の破片が出土した。肩部は強く張る。体部と頸部をそれぞれロクロ成形し、接合する。その際、体部と頸部の境に粘土紐を巡らせ、ロクロナデする。体部は肩部より上にカキメを施す。壺におけるこのような接続方法は東北地方でもみられるが、接合の様子は多少異なるので、東北産とは言い切れない。61は須恵器短頸壺蓋。扁平な頂部に、垂下する口縁部がつく。口縁端部外面には面をもつ。頂部内面はナデを施すが、外面は降灰のため、ヘラ切り後の調整は不明。口径6.4cm、器高2.0cmである。62は中型甕。口縁部から体部上位までの破片が出土した。体部外面は、平行タタキを施したのち、カキメを施す。内面には同心円当具痕が残る。口縁部は内外面ともにロクロナデで仕上げる。口径は21.8cmである。63は大型甕。端部を除く、口縁部から体部上位までの破片が出土した。体部外面は格子目タタキを施す。口縁部はロクロナデで仕上げる。

以上が六条条間路南側溝SD4752出土土器の概要である。土師器は杯Aに器高が深いものと浅いものがあること、杯Bの高台が安定したもので、立ち上がり部よりやや内側に位置すること、甕の口縁端部外面に面を持たないことに特徴がある。須恵器は、丸みのある頂部に扁平なつまみとかえりのない口縁部がつく杯B蓋が多いこと、立ち上がりより内側に位置しながらも、垂下せずやや外方に広がる高台を持つ杯Bが多いことに特徴がある。よって、本遺構出土土器の主体は飛鳥Ⅳ～Ⅴ（7世紀末～8世紀初頭）にその年代が求められる。

B 藤原宮域内の遺構出土土器 (Fig.41～45)

藤原宮域内の遺構には、掘立柱建物や堀、溝、土坑などがある。遺構の密度は、南へ向かうにつれ低くなる。多量の土器が出土した遺構には、東西大溝SD9633や土坑SK9660などがある。

東西棟建物SB9600・南北堀SA9595・SA9636・東西堀SA9580出土土器 (Fig.41) 掘立柱建物や堀など、建物の柱穴から出土した土器の量はごく僅かである。土師器には杯C、杯G、杯H、高杯H、ロクロ製土師器杯B蓋が、須恵器には杯A、杯B蓋、杯G蓋がある。

64は須恵器杯A、65は杯B蓋。東西棟建物SB9600の抜取穴から出土した資料である。64は、ほぼ完形で出土した。平坦な底部にやや外方へ開く口縁部がつく。底部外面はヘラ切りのまま。口径11.1cm、器高5.0cm。65は平坦な頂部に、小さなかえりをそなえた口縁部と、先端の

丸いつまみがつく。口径14.8cm、器高2.6cmを測る。

66、67は南北堀SA9595出土土器である。66はロクロ製土師器杯B蓋。口縁部から頂部の一部にかけての破片が出土した。内面にはかえりの剥離痕が残る。口径は11.4cmである。67は完形の須恵器杯G蓋。平坦な頂部に、かえりをもつ口縁部と先端の尖ったつまみがつく。かえりは受部よりも突出しない。頂部外面の三分の一をロクロケズリする。口径11.8cm、器高3.2cmを測る。

68～71は東西堀SA9580出土土器である。68は土師器杯C。底部を僅かに欠失する。口縁部は上方へ伸びる。底部内面から口縁部外面をヨコナデする。底部外面はユビオサエを施す。内面には放射状暗文を施す。口径は10.2cm。69は杯G。底部を僅かに欠く。口縁端部はやや外方に広がる。口径は11.0cm。70は杯H。口縁部と底部の境には明瞭な稜がある。口径は12.0cmを測る。71は高杯Gの脚部である。中実の柱状部に大きく外方へ開く裾部がつく。裾の端部は丸くおさめる。脚部内面をヘラケズリし、外面を面取りする裾部はヨコナデする。裾部径は11.2cm。

72は南北堀SA9636出土の土師器杯G。完形に復元できる。口縁端部は外方へ開く。口径は15.1cmを測る。

以上が掘立柱建物および堀からの出土土器の概要である。掘立柱建物SB9600出土土器は、平坦な頂部で小さなかえりがつく須恵器杯B蓋や底部の平坦な杯Aから飛鳥Ⅳ（7世紀末）に比定できる。南北堀SA9595出土土器は、平坦で器高の低いロクロ製土師器杯B蓋と、かえりの位置が接地面近くにある須恵器杯G蓋から飛鳥Ⅳ、南北堀SA9636出土土器は、杯Gの法量から飛鳥Ⅳ、東西堀SA9580出土土器は、土師器杯の法量から飛鳥Ⅳ～Ⅴ

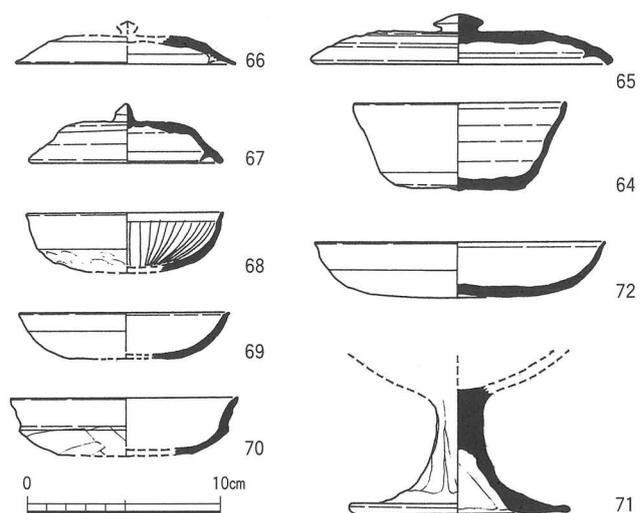


Fig. 41 掘立柱建物・堀出土土器 1:4

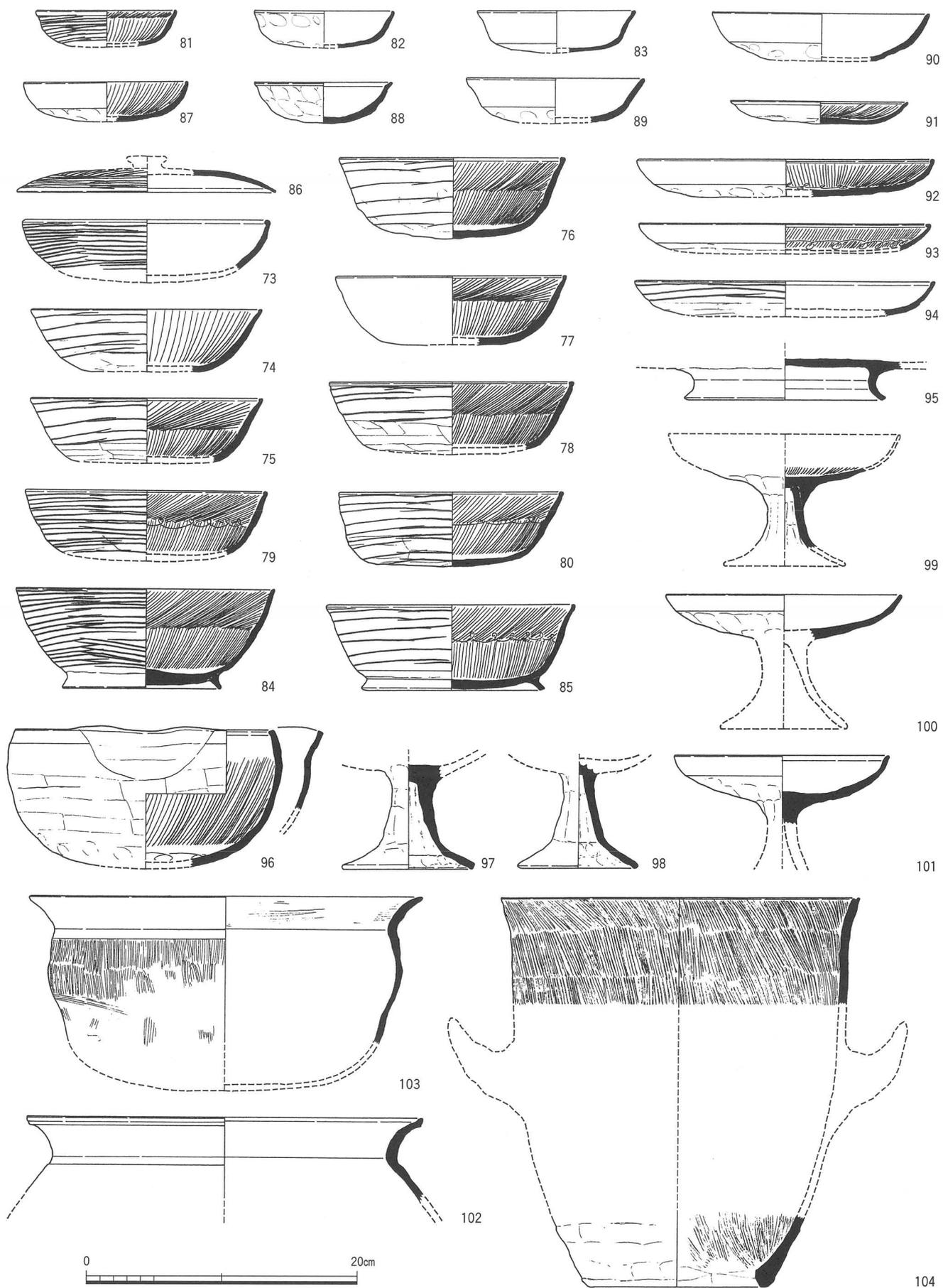


Fig. 42 東西大溝SD9633出土土師器 1:4

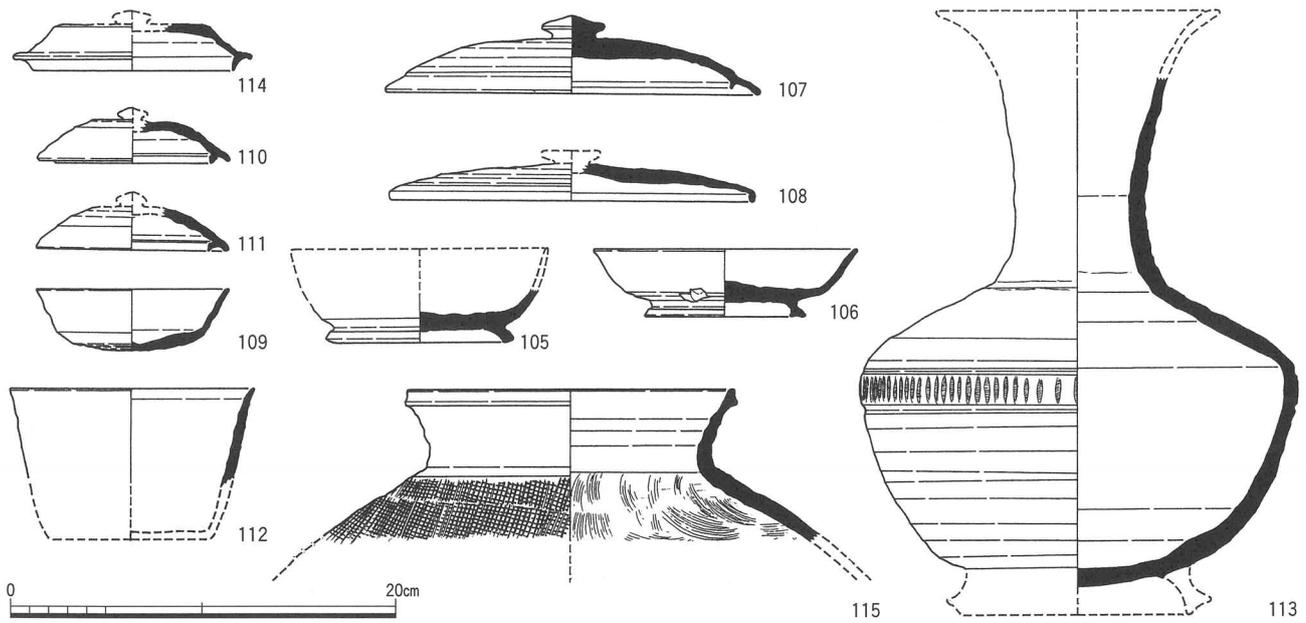


Fig. 43 東西大溝SD9633出土須恵器 1:4

(7世紀末～8世紀初頭)頃に比定できる。

東西大溝SD9633出土土器 (Fig.42・43) 高所寺池の北西に位置する東西大溝SD9633では、比較的多量の土器が出土した。土師器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、皿A、皿B、鉢、高杯、甕、鍋、甑がある。須恵器は杯B、杯Gの蓋と身、椀A、台付長頸壺、甕などがある。

73～83は土師器杯A。口縁端部はやや肥厚しており、中には、やや内側へ折り込むものもある。内面の暗文は、一段放射暗文を施すもの(74)、二段放射暗文を施すもの(75～78、81)、二段放射暗文と連弧文を施すもの(79、80)の三者がある。外面の調整は73が口縁部をヨコナデするa1手法、74、75、78がb1手法、76、80はb3手法による。82、83は風化のために暗文の有無や調整は不明。84、85は杯B。厚みのある底部に、上方へ直線的に伸びる口縁部と外方へ広がる高台がつく。口縁端部は丸くおさめるが、85はやや内側に折り込む。底部内外面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、84は内面に二段放射暗文を、85は二段放射暗文と連弧文を施す。外面の調整はともにa1手法による。法量は、84が口径19.0cm、高台径11.6cm、器高7.4cm、85は口径16.1cm、高台径12.8cm、器高6.4cmを測る。86は杯B蓋。頂部の一部とつまみを欠失する。内外面をナデ、のち外面にミガキを施す。口径は19.0cm。87は杯CⅡ。やや平坦な底部に内弯しながら立ち上がる口縁部がつく。底部中央をわずかに欠失する。口縁部をヨコナデしたのち、口縁部内面に一段放射暗文を施す。口径は12.0cmである。88～90は杯G。内面はいずれも底部をナデたのち、口縁部をヨコナデする。外面は、口縁

部をヨコナデするもの(89、90)が多い。法量は、口径10.2～13.0cm、器高は2.4cm程度である。91～94は皿Aである。口縁端部は内面に段をもつもの(91)丸くおさめるもの(92、94)と、内側へ折り込むもの(93)がある。91は口縁部に一段放射暗文を施す。外面調整は、ヘラケズリしたのち、口縁部をヨコナデするb0手法。口径は13.0cm、器高2.0cmである。92～94はいずれも底部の一部ないし大部分を欠失する。92、93は底部内面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、口縁部内面に一段放射暗文、見込み部分には螺旋暗文を施す。外面の調整は、92がa0手法、93がb0手法である。いっぽう、94は底部内面をナデ、口縁部をヨコナデする。外面の調整はb1手法による。口径は21.4～22.0cmである。95は皿B。平坦な底部に高めの高台がつく。高台下位は大きく外反する。底部内外面はナデ、高台はヨコナデで仕上げる。高台径は14.4cmである。96は鉢。半球形を呈しており、口縁部の一部を片口とする。内面全体をナデ、外面全体をヘラケズリしたのち、口縁端部をヨコナデする。内面の見込み部分よりも上には一段放射暗文、見込み部分に螺旋暗文を施すが、いずれも粗雑である。片口部分を除いた口径は19.2cmを測る。97～101は高杯。完形に復元できるものはない。97、98は脚部。裾部外面は面をもつ。裾部内面には指頭圧痕が残る。裾部径は97が9.4cm、98が8.4cmを測る。100、101は杯部の破片。底部をナデ、口縁部をヨコナデする。杯部内面に暗文をもつのは、99のみである。口径は100が17.2cm、101が15.7cmである。102は甕A、103は鍋A。102は体部のほとんどを、103は底部を欠失

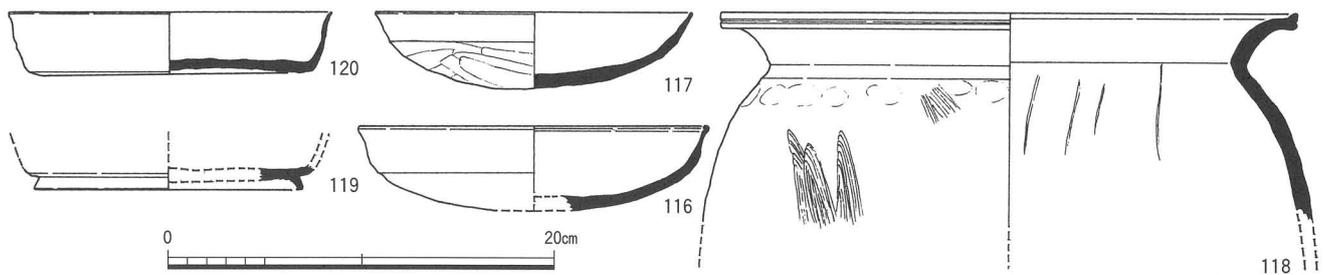


Fig. 44 南北溝SD9577出土土器 1:4

する。102は体部内外面をナデ、口縁部をヨコナデで仕上げる。103は胴の短い体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面にナデ、外面にハケメを施し、のち口縁部をヨコナデする。口縁部内面にはヨコハケの痕跡がうかがえる。両者とも、体部内面をナデることから「大和型」と判断できる。口径は102が29.2cm、103が29.0cmである。104は甑。底部と口縁部が出土した。口縁部内外面にハケメを施す。内面のハケメは底部付近まで施す。底部内外面はヘラケズリする。外面には粘土紐の接合痕がみられる。口径26.4cm、底部径13.2cmを測る。

105、106は須恵器杯B。105は口縁部を欠失する。高台は、立ち上がり部分よりも内側につく。底部外面をヘラ切りし、内面をナデる。105は高台径8.9cm、106は口径13.7cm、高台径8.4cm、器高3.65cmを測る。107、108は杯B蓋。107は完形に復元できる。やや丸みのある頂部に、小さなかえりをそなえた口縁部がつく。つまみは中央部分がやや尖る。108は、平坦な頂部にかえりのない口縁部がつく。つまみは欠失する。頂部内面をナデ、外面のほぼ全面をロクロケズリする。法量は107が口径16.6cm、器高4.2cm、108が口径18.8cmを測る。109は杯G。やや丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。底部内面をナデる。底部外面はヘラ切りのまま。口径10.1cm、器高3.3cmを測る。110、111は杯G蓋で、つまみを欠失している。丸みのある頂部をもつ。110は、かえりが受部よりもわずかに突出する。111は受部とかえりの二点で接地する。頂部内面をナデ、外面をロクロケズリする。口径は8.2cmと10.0cmである。112は椀Aの口縁部である。口縁端部は強くヨコナデし、内傾する面をもたせる。口径は12.8cm。113は台付長頸壺。高台と口縁部を欠く。体部中位以下はロクロケズリする。肩部には刺突文とそれを挟む沈線を上下一条ずつ施す。114は壺蓋。つまみは欠失している。平坦な頂部に、受部よりも大きく突出するかえりがつく。頂部内面はナデを施す。外面は降灰のため、調整は不明。口径は10.5cm。115は中型甕。口

縁端部外面は面をもつ。体部外面には格子目タタキを施す。口縁部はロクロナデする。口径は17.0cmを測る。

以上が東西大溝SD9633出土土器の概要である。土師器は、杯A・杯Bの器高が深く、口縁端部を丸くおさめるものが多いこと、高杯は杯部がかなり浅いことのほか、やや平坦な頂部にかえりのない口縁部がつく杯B蓋、肩部にやや丸みのある台付長頸壺の存在に大きな特徴がある。ただ、頂部が丸くかえりが受部よりも突出しない須恵器杯G蓋など、古い様相を示す土器も一定量含んでいることから、これらの土器群は飛鳥IV～V、すなわち7世紀末～8世紀初頭頃に求められよう。

南北溝SD9577出土土器 (Fig.44) 南北溝SD9577は、高所寺池の北東部に位置する。遺物の出土量は少ない。土師器には杯C、杯H、甕Aなど、須恵器には杯B、皿Aなどがある。

116は土師器杯C。丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめ、端部内面は沈線状に凹む。b手法で調整し、底部外面に黒斑がある。口径は18.2cmを測る。117は杯H。丸みのある底部に、外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。底部は内面をナデ、外面をヘラケズリする。口縁部はヨコナデする。口径16.6cm、器高4.0cmである。118はいわゆる「大和型」の甕A。丸みのある体部に外方へ大きく開く口縁部がつく。口縁端部外面には沈線のある面をもつ。体部内面はナデ、外面はハケメのちナデを施す。口縁部はヨコナデする。口径は30.2cmである。

119は須恵器杯B。底部～高台の小片が出土した。高台は華奢なつくりで、貼り付け位置は立ち上がり部よりも内側に貼り付ける。高台径は14.0cmを測る。120は皿A。ほぼ完形で出土した。やや上げ底気味の底部から垂直に立ち上がる口縁部がつく。底部は外面をヘラ切りし、内面をナデる。口径16.8cm、器高3.2cm。

これら南北溝SD9577出土土器は、丸みのある底部の外面をヘラケズリする大型の土師器杯Hや、口縁端部外面に凹面のある甕A、底部から垂直に立ち上がる口縁部

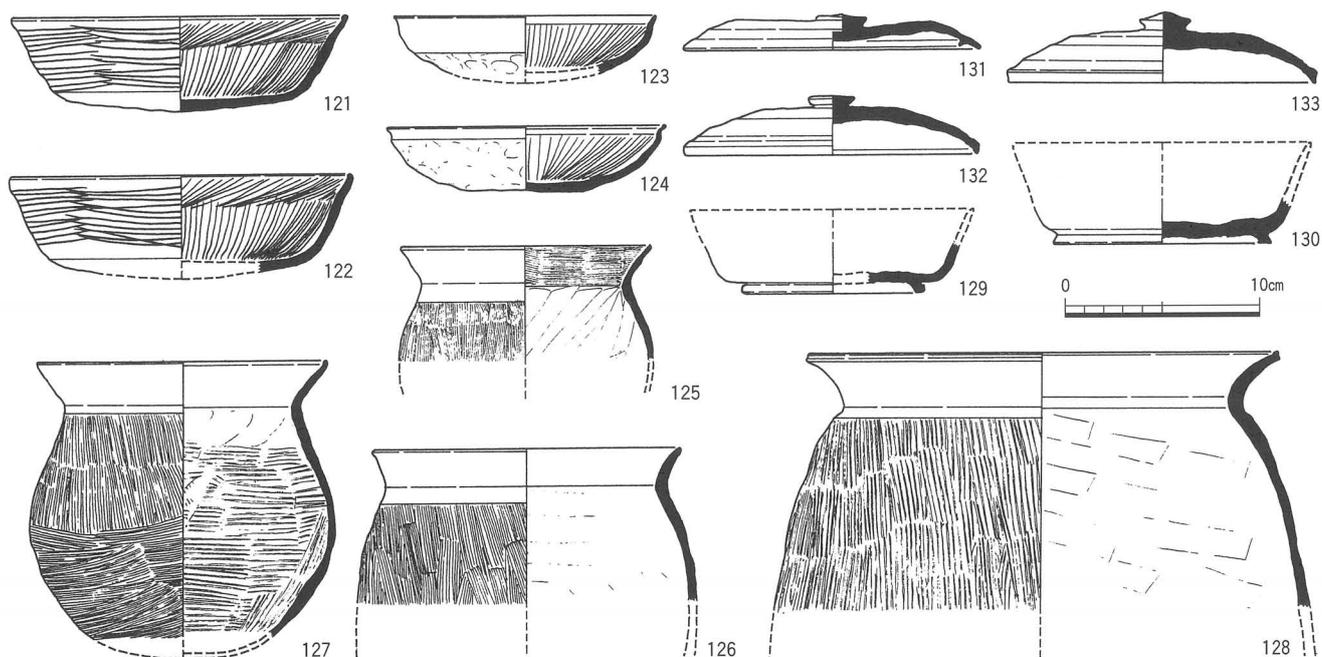


Fig. 45 土坑SK9660出土土器 1:4

をもつ須恵器皿Aに特徴がある。時期判定のできる資料に乏しいものの飛鳥V（藤原宮期）とすることができる。土坑SK9660出土土器（Fig.45）高所寺池の北西部で検出した土坑SK9660からは、比較的まとまった量の土器が出土した。土師器には杯A、杯C、甕A、甕C、須恵器には杯B、杯B蓋、平瓶、甕がある。

121、122は土師器杯A Iである。ともに、やや丸みのある底部に、直線的に外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は、121が内側へ軽く巻き込むのに対し、122は丸く納める。外面は底部をナデ、口縁部をヨコナデのちミガキを施す。口縁部内面はヨコナデののち、二段放射暗文を施す。121の法量は口径17.4cm、器高5.1cmで、122は口径17.6cmである。123、124は杯C IIで、123は底部の一部を欠く。底部内面をナデ、口縁部内外面はヨコナデを施す。内面には一段放射暗文を施す。口径は13.6cmである。124は口縁端部が外反する。内面全体をヨコナデし、体部外面は不調整。口縁端部を強くヨコナデし内面に一段放射暗文を施す。口径14.4cm、器高3.5cmを測る。125～127は甕Aである。体部内面をヘラケズリする「河内型」（125）、ナデる「大和型」（126）、ハケメを施す「近江型」（127）の三者がある。125、126は体部下半を、127は底部を欠く。口径は13.0～16.0cmを測る。128は大和型の甕C。体部下半を欠失する。口縁端部外面には面をもつ。口径は24.4cm。

129、130は須恵器杯B。ともに遺存状態が悪く、口縁部以下が残存するのみである。高台の貼付位置は、129

が底部の立ち上がり位置よりも内側に、130が立ち上がり部分直下にある。杯部は底部外面をヘラ切りする。高台径は129が8.6cm、130が11.2cm。131～133は杯B蓋。131以外のかえりをもたず、丸みのある頂部につまみがつく。つまみの形態は、131、133がやや高く、132は扁平なものである。頂部内面をナデ、外面をロクロケズリを施す。口径15.4～16.0cm、器高2.0～3.8cmを測る。

これらSK9660出土土器については、土師器杯A Iの器高が浅くなり、丸みのある頂部にかえりのない口縁部がつく須恵器杯B蓋、高台貼付位置が底部の立ち上がり部分よりも内側にある杯Bの存在に特徴があるといえる。したがって、これらSK9660出土土器の主体は、飛鳥V（藤原宮期）にその年代を求められよう。

C 藤原宮外の古代遺構出土土器（Fig.46～49）

宮外での古代遺構の検出数はごく僅かで、まとまった量の土器が出土したのは五角形井戸SE9330である。

五角形井戸SE9330出土土器（Fig.46）高所寺池の東南部に位置する五角形井戸SE9330出土土器には、土師器杯A、皿A、甕A、長胴甕、鍋B、須恵器杯B、台付長頸壺、平瓶、甕などがある。

134は土師器杯A。口縁部のみが出土した。口縁端部は内側へ軽く巻き込む。調整は内外面ヨコナデの後、内面には一段放射暗文を、外面にはミガキを施す。口径15.0cm。135は皿A。底部は欠失している。口縁部内外面をヨコナデ後、内面には一段放射暗文を施し、外面はa1手法で仕上げる。口径16.4cm。136～139は甕A。136

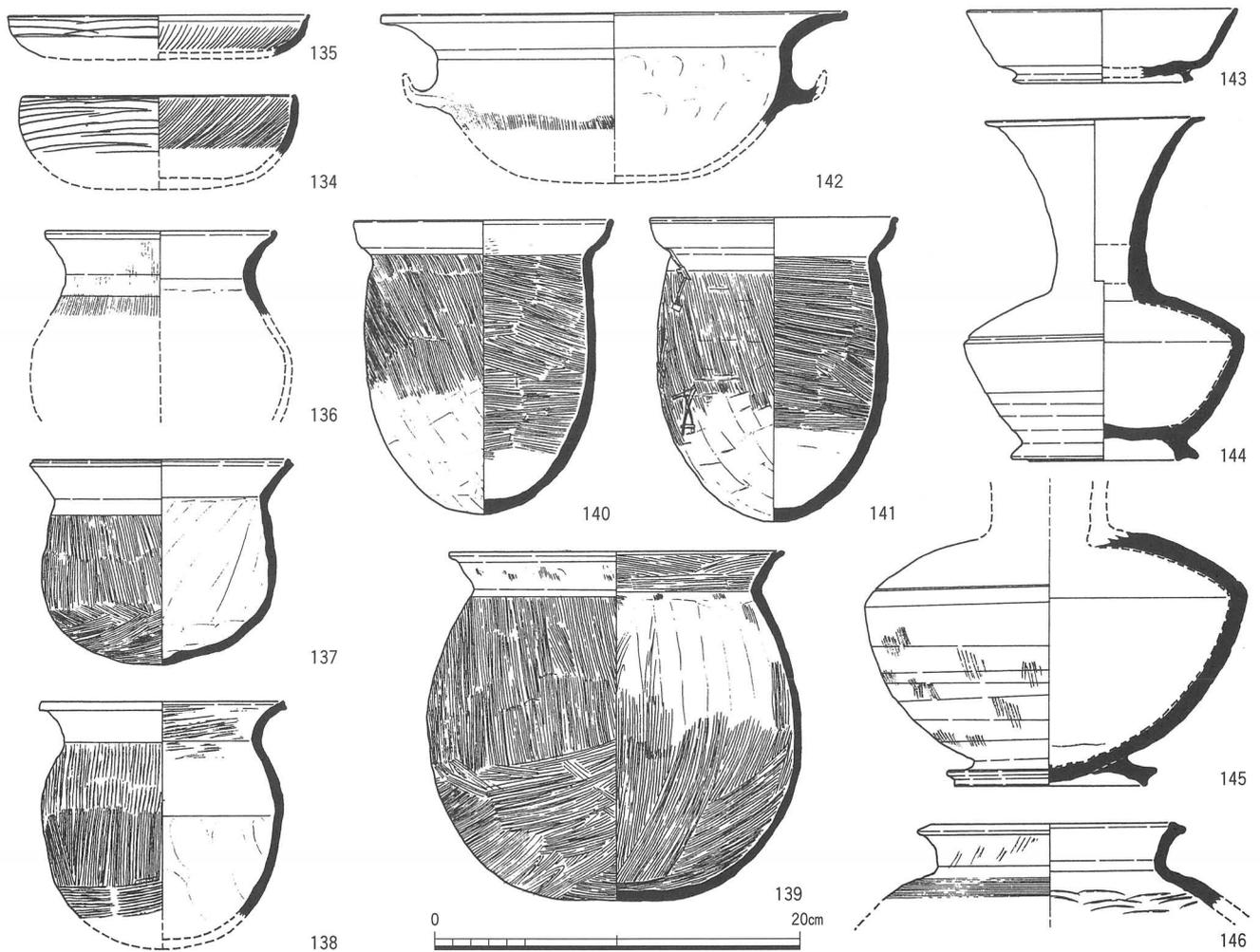


Fig. 46 五角形井戸SE9330出土土器 1:4

は胴部以下を欠失する。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面全体をナデ、外面全体にタテハケを施した後、口縁端部をヨコナデする。137は丸みのある体部に、直線的に外方へ伸びる口縁部が付く。口縁端部内面には凹面をもつ。体部は内面をヘラケズリ、外面をタテハケのちヨコハケを施す。河内型の資料である。138はやや胴の長い体部に、外反する口縁部が付く。口縁端部外面には面をもつ。外面は体部全体にタテハケを施し、底部にヨコハケを施して仕上げる。内面は上半にヨコナデを施し、後に口縁部をヨコハケする。体部内面をナデることより大和型と判断できる。139は、球形の体部に、外方へ直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部内面には段をもつ。型取り成形後、外面は全体にタテハケを施した後、体部下半をヨコハケする。内面は体部全体にハケメを施した後、上半にヘラケズリを施す。口縁部内面にヨコハケ、外面にヨコナデを施す伊勢型の資料。甕Aの法量は口径12.6~18.4cm、器高11.6~19.6cm。140・141は長胴甕。141の体部には、篋目が植物遺

存体として付着している(PL.36)ことから、井戸の釣瓶として用いられたと推測される。内面調整は底部をナデ、体部より上にはヨコハケを施す。外面は上半にハケメを施した後、下半をヘラケズリする。体部内面に見られるヨコハケより近江型と判断できる。140の法量は口径14.2cm、器高16.4cmで、141は口径13.4cm、器高17.0cmを測る。142は鍋B。把手先端と体部下半を欠く。やや扁平な体部に、大きく外反する口縁部がつく。体部外面上半をナデ、下半にハケメを施す。内面は体部にオサエを施す。口縁部はヨコナデする。口径は27.6cm。

143は須恵器杯B。ほぼ完形に復元できる。口縁部は直線的に外方へ伸びる。高台は立ち上がりよりやや内側に、外方へ踏ん張るように付く。口径14.8cm、高台径8.8cm、器高4.0cm。144、145は台付長頸壺。144は完形に復元できる。肩の張った体部に大きく外方へ開く口縁部が付く。体部下半はロクロケズリ、肩部に一条の沈線を施した後、ヘラ切りする。口径12.0cm、高台径8.0cm、器高19.0cm。145は口頸部を欠く。やや丸みのある体部

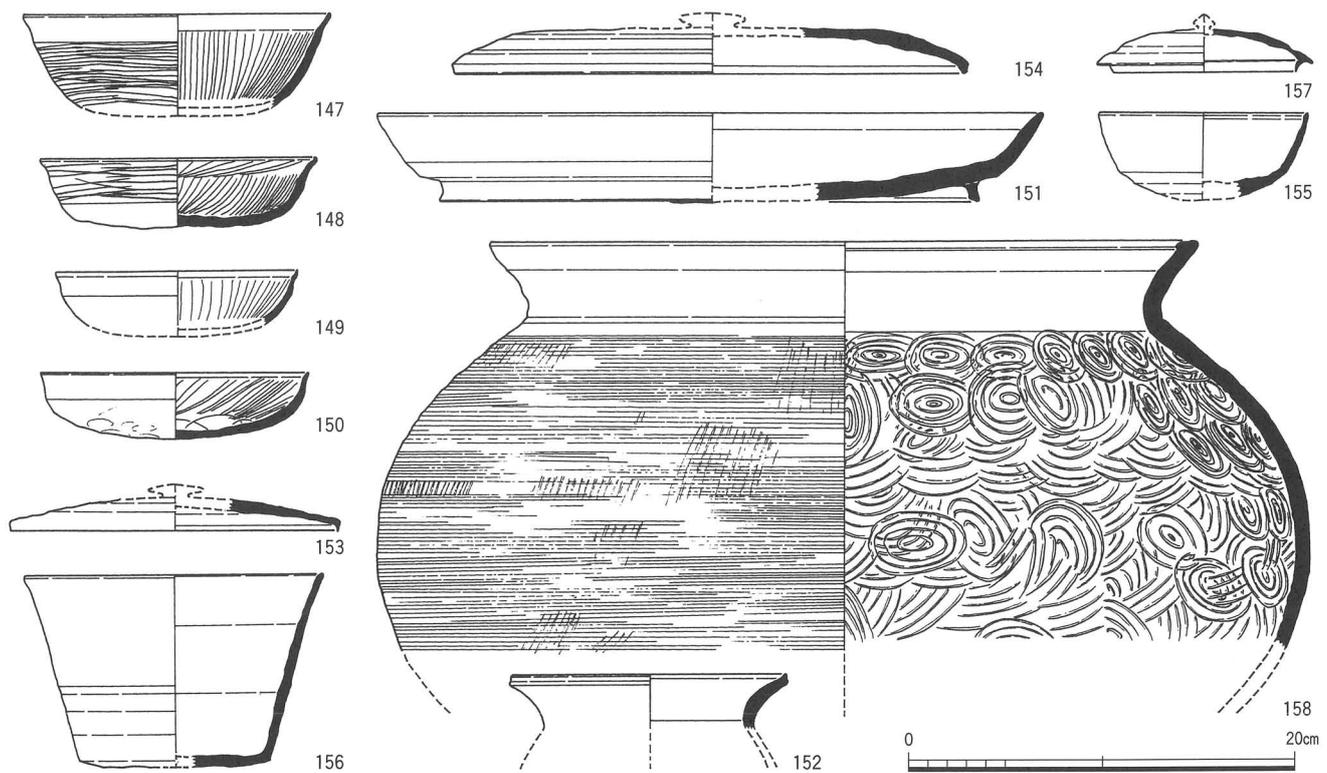


Fig. 47 東西砂溝SD9560・南北砂溝SD9561出土土器 1:4

に、大きくハの字に広がる高台が付く。高台端部外面は面を持つ。肩部のやや上方に一条の沈線、肩部以下にロクロケズリを施す。146は甕A。体部の大部分を欠失する。口縁端部は面を持つ。内面に同心円当具を添え、外面に平行タタキを施したのち、体部外面にカキメを施す。口縁部をヨコナデして仕上げる。口径は15.2cm。

これら五角形井戸SE9330出土土器は、内弯する口縁部を持つ土師器杯Aや口縁端部を丸くおさめる皿A、安定した高台が立ち上がり部分よりも内側に付く須恵器杯B、肩部にやや丸みのある台付長頸壺の存在に大きな特徴がある。したがって、これらの土器群については、飛鳥IV～V、すなわち7世紀末～8世紀初頭にその年代が求められよう。

東西・南北砂溝SD9560・9561出土土器 (Fig.47)

高所寺池の東部に位置する東西・南北砂溝SD9560・SD9561出土土器には、土師器杯A、杯B、杯C、甕A、須恵器杯B蓋、杯G、皿B蓋、椀A、短頸壺蓋、中型甕がある。

147、148は土師器杯A。147は底部を欠失する。口縁端部は丸くおさめる。内面には一段放射暗文、外面には密なミガキを施す。口縁端部はヨコナデする。口径は15.0cm。148はやや丸みのある底部にやや外方へ広がる口縁部がつく。口縁端部は軽く内側へ折る。底部外面には木の葉の圧痕が残る。口縁部内面には二段放射暗文、

外面にはミガキを施す。口径14.6cm、器高3.8cmを測る。149、150は杯C。149は口縁部のみの出土である。口縁部をヨコナデしたのち、内面に一段放射暗文を施す。口径は12.6cmである。150は完形に復元できる。底部外面は不調整で、内面全体と口縁部外面にはヨコナデを施す。内面には粗雑な一段放射暗文と螺旋暗文を施す。口径14.0cm、器高3.5cmを測る。151はロクロ製土師器皿B。丸みのある底部に外方へ広がる口縁部がつく。底部外面をロクロケズリした後、高台を貼り付ける。152は甕A。口縁部のみの出土である。口縁端部外面には面をもつ。口径は14.2cmを測る。

153は須恵器杯B蓋。つまみを欠失する。口径は17.2cm。154は皿B蓋で、口径は26.6cmである。155は杯G。底部中央を欠く。底部は丸みがある。ロクロ成形後、底部外面をロクロケズリする。口径は11.0cmを測る。156は椀A。底部中央を僅かに欠く。体部外面下半から底部外面にはロクロケズリを施す。口径は19.6cmを測る。157は短頸壺蓋。つまみを欠く。丸みのある頂部に受部より突出するかえりをもつ。口径は9.6cm。158は中型甕。体部下半を欠失する。口縁端部上面には内径する面をもつ。体部外面は平行タタキののちカキメを施す。内面には同心円当具痕が残る。口径は36.6cm。

東西・南北の砂溝SD9560・SD9561出土土器には、器高が高く、口縁端部を丸くおさめる土師器杯が古い様相

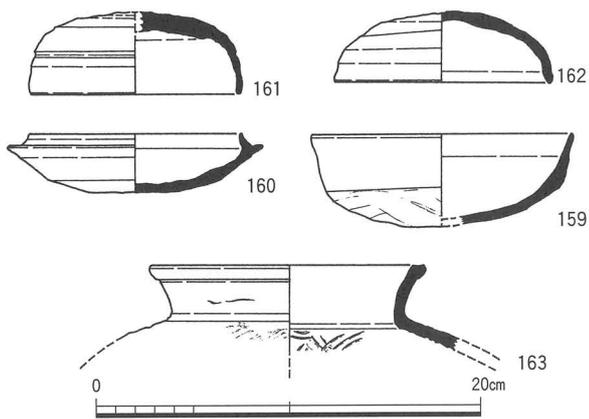


Fig. 48 斜行溝SD9722・9724出土土器 1:4

を示す一方で、器高が低く、口縁端部を内側へ軽く折った土師器杯Aや、口縁端部外面に面をもつ甕A、かえりのない口縁部をもつ須恵器杯B蓋のように新しい様相をもつ資料も一定量出土している。これらの土器は、形態的特徴から飛鳥IV～V（7世紀末～8世紀初頭）に比定できよう。

斜行溝SD9722・SD9724出土土器 (Fig.48) 高所寺池の西南部で検出した、並行する二条の斜行溝SD9722・SD9724では、少量ながら時期的にはまとまった土器が出土した。土師器には杯H、須恵器には杯H、横瓶、甕などがある。出土遺物の大半は須恵器である。

159は土師器杯H。ほぼ完形で出土した。丸みのある底部に直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口径13.7cm。

160は須恵器杯H。やや平坦な底部に、受部よりも突出する口縁部がつく。底部外面をヘラ切りする。口径は11.0cm、器高3.2cmを測る。161、162は杯H蓋。161はやや丸みのある頂部に、垂下する口縁部がつく。肩部には一条の沈線が巡る。頂部外面の三分の一程度にロクロケズリを施す。明灰色で雲母を多量に含む胎土であり、東海地方以東に産地を求められよう。162は丸みのある頂部にやや内弯する口縁部がつく。頂部外面は三分の一程度をロクロケズリする。161は口径11.2cm、器高3.6cm、162は口径10.8cmを測る。163は甕A。口縁部から体部上位にかけての破片が出土した。口縁端部外面には面をもつ。体部は内面に同心円当具を添え、外面を格子目の叩

き板で叩く。のち、口縁部をロクロナデする。口径は14.4cmを測る。

これら斜行溝SD9722・SD9724出土土器は、器高が高く、丁寧にヘラケズリを施す土師器杯H、頂部の三分の一程度をロクロケズリし、口径11cm程度の須恵器杯H蓋の存在などから、これらの土器は飛鳥I（7世紀前半）に比定できる。

大土坑SK9731出土土器 (Fig.49) 高所寺池の西部で検出した大土坑SK9731からは、多量の土師器が出土した。出土土器には土師器杯B蓋、杯C、杯H、甕Aがある。須恵器は僅少でほとんどが小片である。

164は土師器杯B蓋。口縁部を欠失する。平坦な頂部に平坦なつまみがつく。頂部内面をナデ、のち内面に放射暗文と螺旋暗文、外面にミガキを施す。つまみは貼付後、ヨコナデする。165は杯C II。底部の二分の一程度を欠失する。口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁端部内面には面をもつ。底部外面は不調整、口縁部はヨコナデし、口縁部内面には一段放射暗文と連弧暗文を施す。口径は15.8cmである。166、167は杯H。浅手の資料で、やや平坦な底部に直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。166は口径14.0cm、167は口径10.8cm、器高3.6cmである。168、169は甕A。168は完形で出土した。球形の体部に、外方へ開く口縁部がつく。内外面全体にハケメを施したのち、口縁部外面にヨコナデを施す。体部内面にナデを施すことから「大和型」の資料であると判断できる。169は体部中位以下を欠失する。体部内面をヘラケズリ、外面にハケメを施す「河内型」の資料である。口縁部はヨコナデする。168は口径12.3cm、器高12.6cm、169は口径19.2cm。

これら大土坑SK9731出土土器は、165のような器高の高い杯C IIを含むものの、器高の低い杯Hや口縁端部外面に面をもたない甕Aなどによって構成されているため、飛鳥IVすなわち7世紀末にその年代が求められる。

D 古墳時代遺構出土土器 (Fig.50～54)

古墳時代の遺構は、主に高所寺池の東南部で検出した。特に、古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871では、遺構の

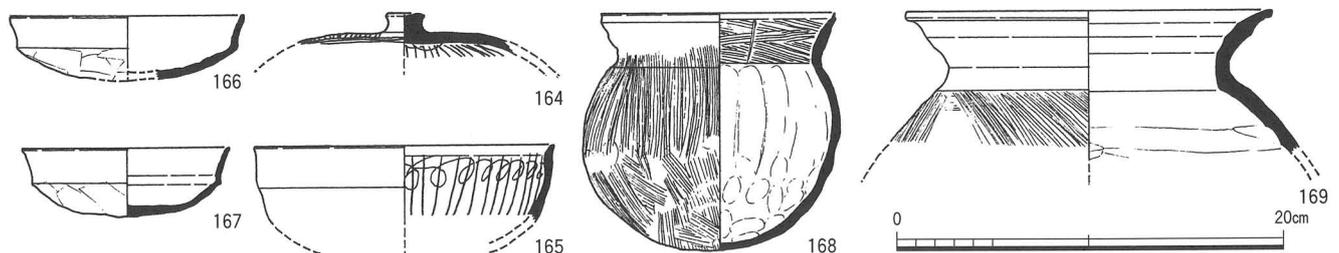


Fig. 49 大土坑SK9731出土土器 1:4

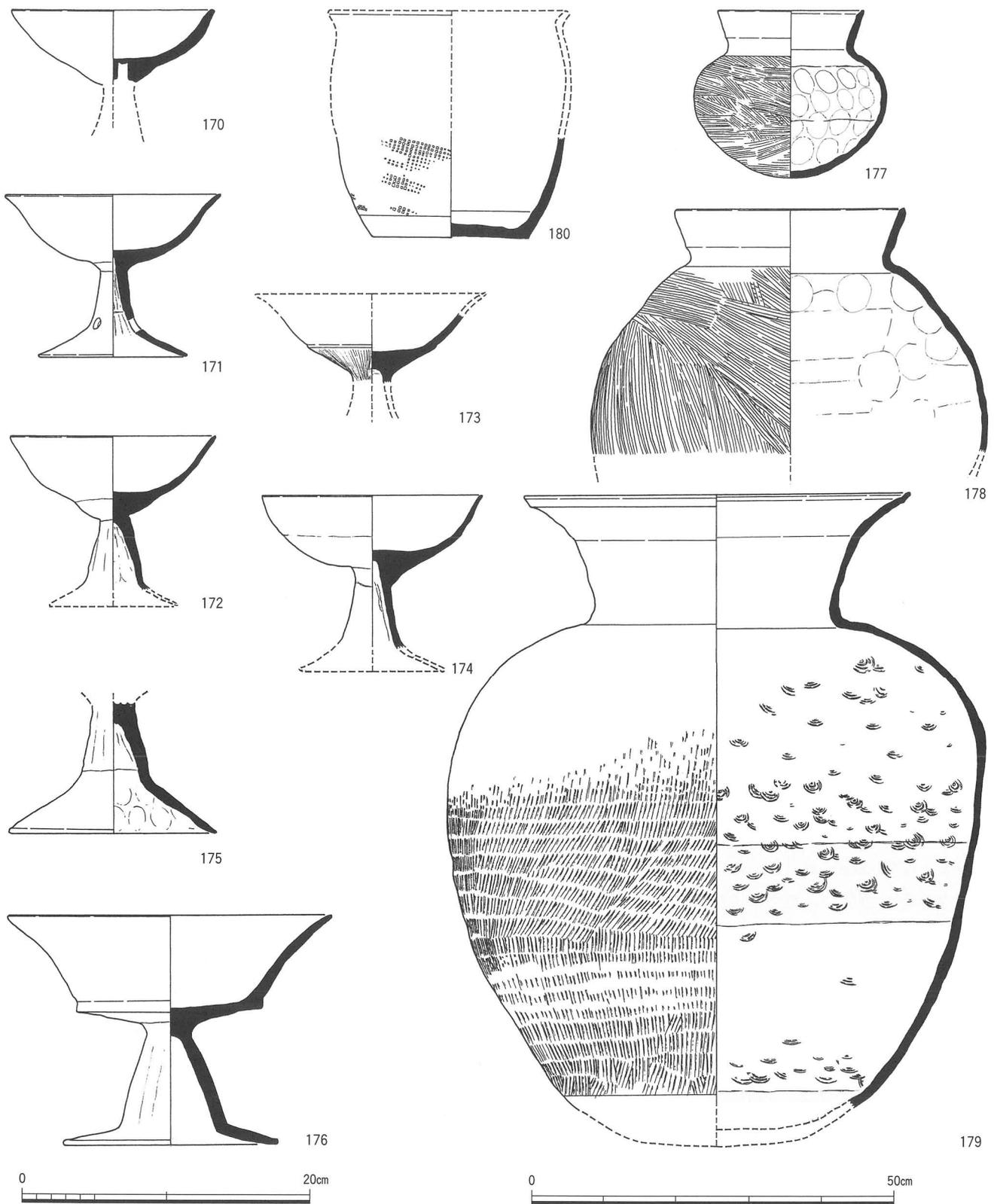


Fig. 50 素掘井戸SE9570出土土器 1:4 (179のみ 1:8)

遺存状態の悪さにもかかわらず、比較的まとまった量の土器が出土した。高所寺池の北西部では古墳時代遺構は検出されなかった。

素掘井戸SE9570出土土器 (Fig.50) 素掘井戸SE9570

は、高所寺池の東部に位置する。土師器高杯、小型丸底壺、甕、須恵器大甕、韓式系土器平底鉢が出土した。

170~176は土師器高杯。そのうち170~174の杯部は碗形を呈する。口縁端部は、緩やかに外反するもの (171)

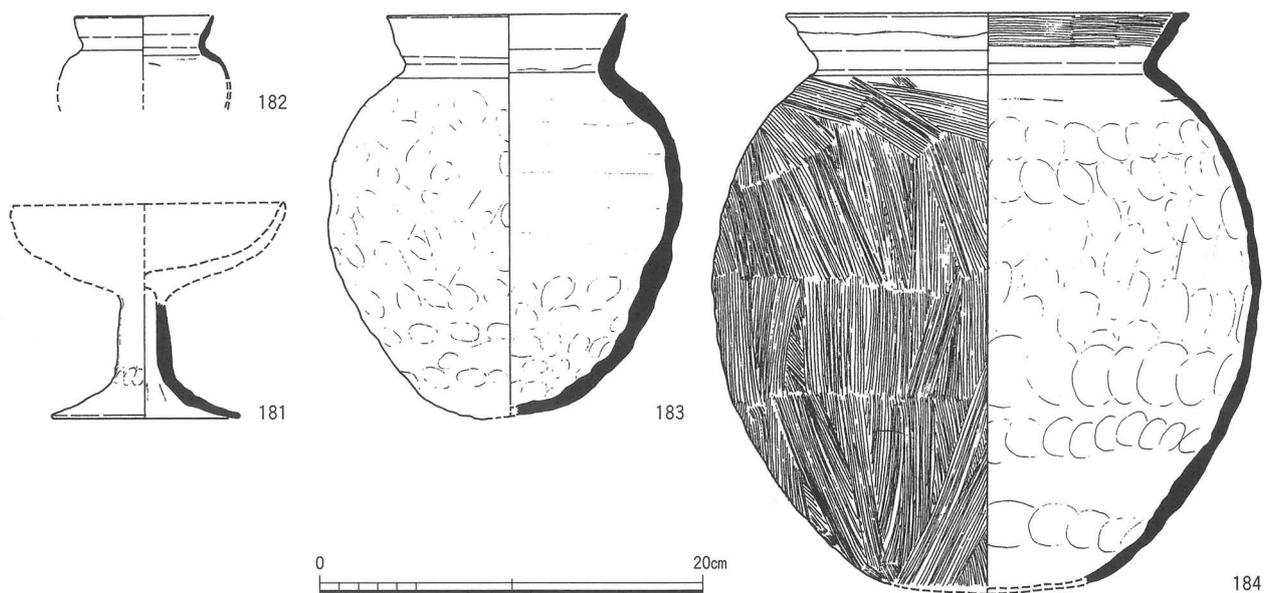


Fig. 51 溝SD9350出土土器 1:4

と直線的に伸びるもの(170、172、174)がある。いずれも杯部底部内外面はナデを施すが、173の底部外面のみナデの後にハケメを施す。口縁部はヨコナデで仕上げる。脚部は概して遺存状態が悪く、端部まで観察できるのは171のみである。絞り込み成形後、柱状部をナデるもの(171、174)と、ケズリを施すもの(172)がある。171の裾部はヨコナデする。口径は14.2~15.3cmで、171の器高は11.3cm、裾部径は10.4cmを測る。175、176は大型高杯。175は脚部のみ、176は完形で出土した。杯部は平坦な底部に、直線的に伸びる口縁部がつく。底部内外面にはナデ、口縁部にはヨコナデを施す。脚部はいずれも絞り込み成形をおこなう。のち、175は裾部外面をヨコナデし、裾部内面には指頭圧痕が残る。176は脚部内面全体にケズリを施し、裾部外面をナデて仕上げる。

法量は、175の裾部径が14.5cmで、176は口径22.8cm、裾部径15.1cm、器高16.2cmを測る。なお、調整の簡略化と立ち上がり気味な裾部をもつ点などから、175が176よりも新しい様相を示しているといえる。177は小型丸底壺。丸みのある体部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく形態である。口縁端部内面には面をもたせる。体部は、内面にユビオサエ、外面にハケメを施す。また、体部内面では粘土接合痕が確認できる。口縁部内外面はヨコナデによって仕上げる。口径10.2cm、器高11.9cmを測る。178は甕。体部下位を欠失している。肩は張らず、体部最大径は中位に求められる。口縁部は直線的に伸びる。体部は内面にユビオサエののちケズリを、外面にはハケメを施す。のち口縁部内外面はヨコナデして仕上げるが、その際、体部と口縁部の境を強くヨコナデしてい

る。口径は16.0cm。179は須恵器大甕。肩の張った、やや胴長な体部に、緩やかに外反する口頸部をもつ。口縁端部外面には面をもたせる。体部は、内面に同心円当具をあてがって叩く。のち、内面は丁寧にスリケシ、外面も半スリケシをおこなう。口縁部は内外面ともにロクロナデを施す。この甕は一括資料でありながら、底部片が全く出土しなかった。故意に打ち欠いてから廃棄したものと思われる。また、体部中位以下には灰色と淡灰色の、二種の粘土を交互に使用している点で特異である。180は韓式系土器の平底鉢である。底部~体部中位にかけての破片が出土した。体部はやや内弯気味に上方へと伸びる。体部内面をナデ、内面は全面をナデるが、底部からの立ち上がり部分は強くヨコナデする。体部外面には、格子目タタキが残る。底部外面には、一辺2.5cm四方の回転台ゲタ痕が僅かに残る。底部径は10.8cm。

素掘井戸SE9570出土土器は、176のような、布留式直後に位置づけられる大型高杯を含みながら、大半は椀形の杯部をもった高杯や複合口縁とハケメの崩れた土師器甕などで構成されている。これらの特徴より、本遺構の主体となる土器群は、5世紀後半頃にその年代が求められるが、上ノ井手遺跡SE030や山田道第二次調査SE2570出土土器よりは、やや新しい様相を示しているといえよう。

溝SD9350出土土器 (Fig.51) 溝SD9350は、素掘井戸SE9570の南方約100mに位置する。出土土器には、土師器高杯や小型丸底壺、甕がある。須恵器には杯H蓋や器台、甕があるが、出土量はごく僅かで、細片のみである。このほか、韓式系土器の細片も出土した。

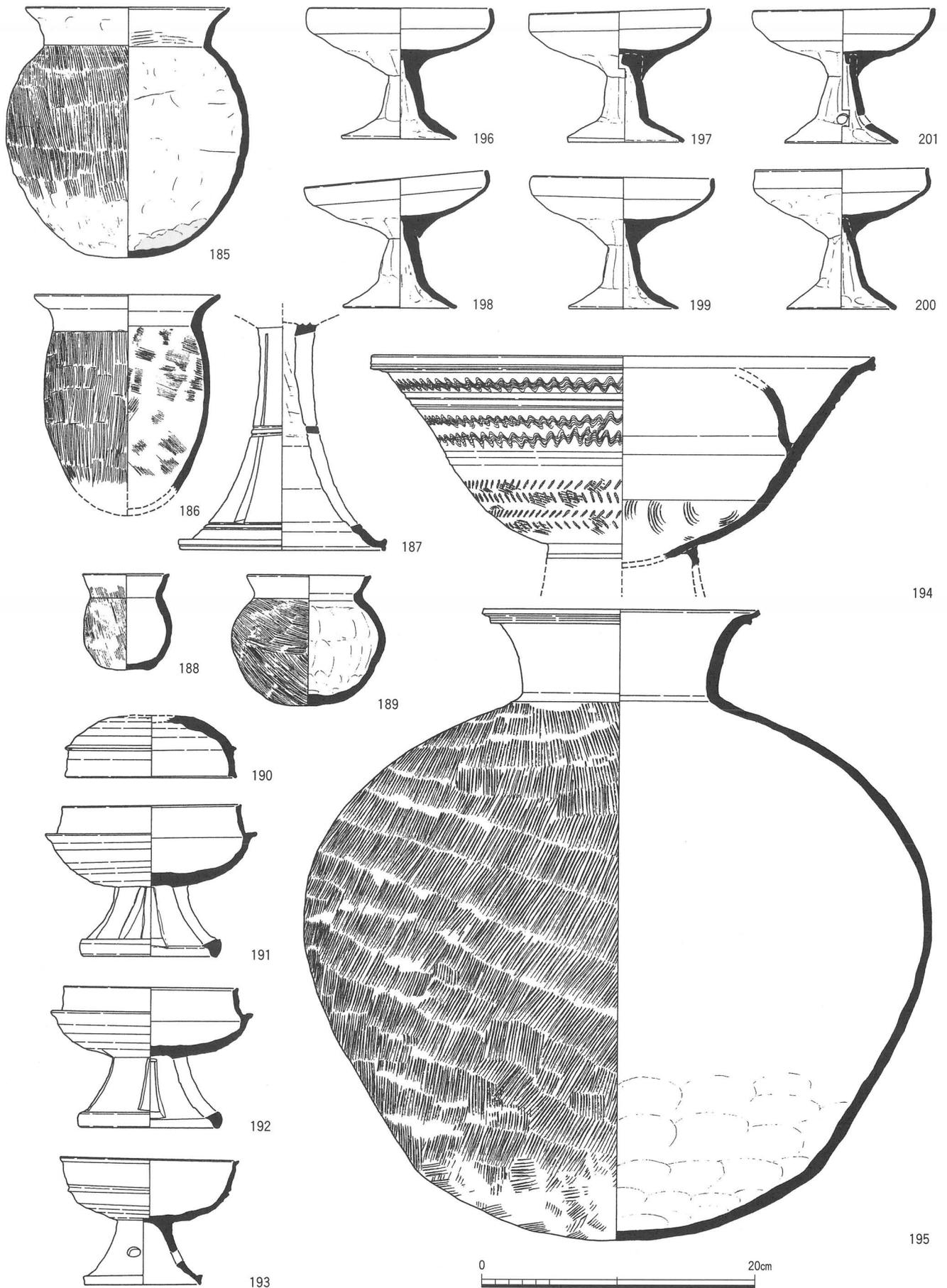


Fig. 52 古墳周濠SD9850・9870・9871出土土器 1:4

181は土師器高杯。脚部は直線的に伸びる柱状部に、ハの字に開く裾部がつく。絞り込み成形後、柱状部の外面をナデ、のち裾部内外面をヨコナデする。裾部内面上半にはケズリの痕跡が認められる。裾部径は9.8cmである。182は小型丸底壺。口縁部から体部上位までの破片が出土した。摩滅が激しく調整の詳細は不明。口径は7.2cmである。183、184は甕。183はほぼ完形、184は二分の一ほどが残存する。183は胴長な体部にやや外方へ開く口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部は内面下半をユビオサエ、上半をヨコナデする。外面はユビオサエの後、ナデを施す。口縁部内外面はヨコナデして仕上げる。口径は12.4cmを測る。184は丸みのある体部に、外方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部には平坦面がある。体部は内面にユビオサエ、外面にハケメを施す。口縁部内面にヨコハケ、外面にはヨコナデを施す。口径は21.0cmを測る。

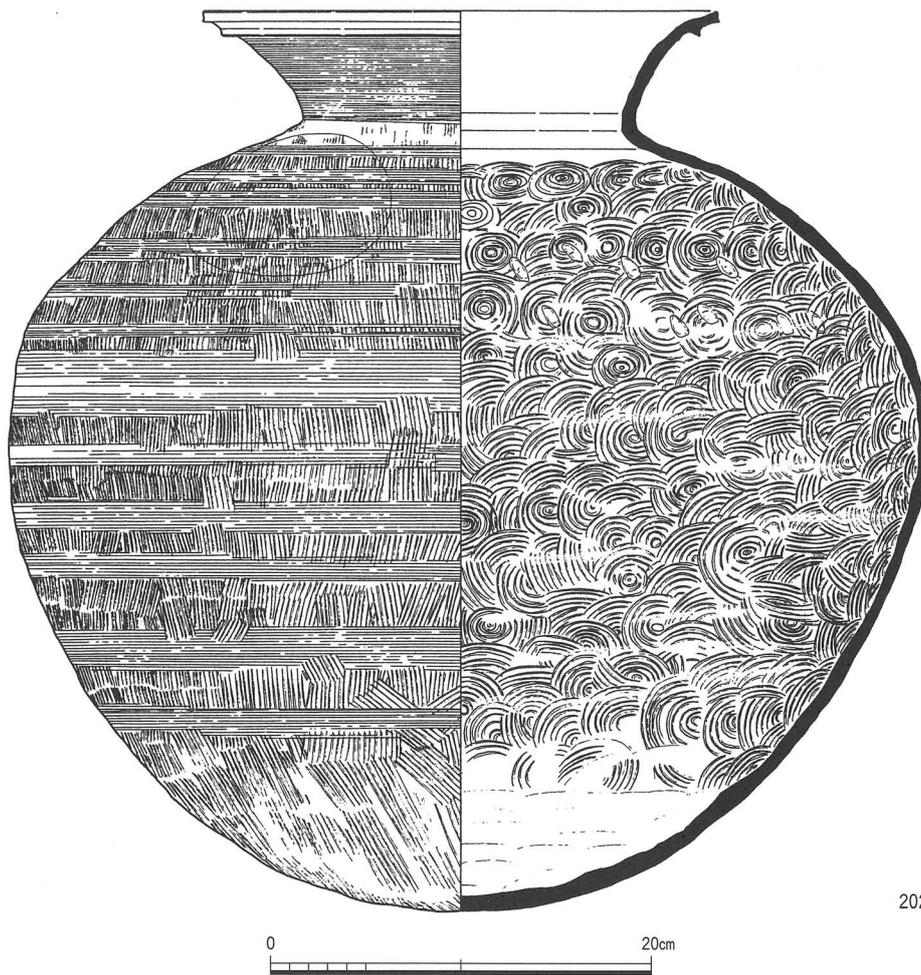
溝SD9350出土の土師器は、崩れた複合口縁をもち、またハケメも崩れていることから、布留式直後すなわち5世紀後半代にその年代を求められよう。高杯は井戸SE9570出土資料と類似しており、ほぼ同時期の所産であると考えられる。

古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871出土土器 (Fig.52) 131次調査で検出した三つの古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871では、遺構の遺存状態の悪さにもかかわらず、比較的多くの土器が出土した。

SD9850出土土器には、土師器甕 (185、186) と須恵器高杯 (187) がある。185は丸みのある体部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部はやや外方へ折り曲げる。体部内面はナデとユビオサエ、外面はハケメを施す。底部外面はやや摩滅している。体部内面には粘土紐の接合痕が残る。また、底部内面には酸化鉄 (ベンガラ) の小塊が付着している。葬送儀礼に用いたベンガラの貯蔵具であると思われる。法量は口径15.0cm、器高18.8cmである。186は底部を欠失している。胴長な体部にやや外方へ開く口縁部がつく形態。体部内面にヨコハケ、外面にタテハケを施したのち、口縁部をヨコナデして仕上げる。口径は13.6cmを測る。187は須恵器高杯。脚部のみの出土である。中位と下位、および裾部の端部外面に沈線を施し、のちに中位の二条の沈線を挟むように三方向から二段、合計六ヶ所に長方形スカシを設ける。内面には粘土の絞り込み痕が残る。裾部径は15.0cmを測る。

SD9850の西方に位置するSD9870の出土土器には、土師器小型甕、須恵器杯H蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、

台付壺がある (188~195)。188、189は小型甕で、ともに完形で出土した。188はやや丸みのある体部で、外面は一次焼成時に黒斑が付着している。口縁部は上方へ伸びる形態で、端部内面には面をもたせる。189は球形に近い形を呈する体部に、やや外方へ伸びる口縁部がつく。188、189ともに内面にナデ、外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデして仕上げる。法量は188が口径6.7cm、器高7.2cm、189は口径8.8cm、器高9.3cmを測る。190は須恵器杯H蓋。丸みのある頂部にまっすぐ降りる口縁部がつく。口縁端部内面には鈍い段が、肩部には鈍い稜がみとめられる。頂部の内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケズリする。ロクロの回転方向は時計回り。口径は12.0cm。191~193は須恵器高杯である。そのうちの191、192は有蓋高杯。191は口縁部の三分の一を欠失している。192は完形で出土した。191、192ともに丸みのある杯部に、直線的に伸びる口縁部がつく。口縁端部は段をもつ。受部は短く、外方へ直線的に開く。脚部は端部外面に丸みのある面をもつ。四方向から工具で切り込みを入れて、方形スカシを設ける。193は無蓋高杯。杯部は、丸みのある底部に、緩やかに外方へ開く口縁部がつく。底部と口縁部の境には鈍い稜がある。底部の内面をナデ、外面の二分の一程度をロクロケズリする。脚部の形態は、裾部の端部外面に面をもたせるもので、三方向から円形スカシを穿つ。陶邑古窯址群梅地区で生産されたものである。これらの高杯の法量は口径12.9~13.2cm、裾部径8.6~10.0cm、器高9.6~11.4cmである。194は裝飾付須恵器の台付壺。台部から壺部中位にかけての破片が出土した。台部はやや器高が低く、底部から緩やかに伸びる口縁部がつく。口縁端部外面には面をもたせる。壺部は台部中位に取り付ける。緩やかに内傾しながら上方へ伸びていることから、器台受部についていた器種としては壺などが想定されよう。器台部分は受部内外面を当具で叩いた後、全体をロクロナデする。内面には当具痕が残る。文様は口縁部から波状文、二条の稜線、二段の波状文、二条の稜線、羽状文の順に観察されるが、施文の順番は (稜線→波状文ないし羽状文) である。二段の波状文は、上段から下段までを連続して施文する。口径は37.0cmを測る。なお、SD9850付近の遺物包含層からは裝飾付須恵器の一部と思われる、須恵質の鳥形土製品が出土している。195は中型甕である。丸みのある体部は、最大径を中位に求められる。口頸部は緩やかに外方へ開く。口縁端部外面には面があり、その直下には下方へ伸びる稜が巡る。体部は内面に同心円当具をあてがい、外



202

Fig. 53 南北溝SD9334出土土器 1:4

面に平行タタキを施す。のち、内面は丁寧にスリ消しているが、底部付近には当具の痕跡が残る。口頸部は内外面ともにロクロナデで仕上げる。口径20.0cm、器高47.0cmを測る。

SD9870の北に位置するSD9871の出土土器は、土師器高杯のみである(196~201)。杯部はいずれも椀形で、緩やかに立ち上がる底部に、上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部はやや内側へ傾く。脚部は、下方に向かって緩やかに開く柱状部に、ハの字に広がる裾部がつく。柱状部は外面を工具で削る。内面には絞り込み痕が残る。裾部は内面をオサエ、外面をヨコナデする。裾部の端部外面には、面取りするもの(197、200、201)と、しないもの(196、198、199)がある。また、201は脚部に一方から円形スカシを穿つ。このような形態の土師器高杯は、葛城地域でもみられる。法量は、口径12.8~13.3cm、裾部径8.0~8.4cm、器高9.8~12.0cm。

これら三基の古墳に伴う周濠から出土した土器の大半は、椀形を呈する杯部に、柱状部から緩やかに開く裾部をそなえた土師器高杯、複合口縁をもたない甕、頂部な

いし底部の二分の一程度をロクロケズリする須恵器杯Hと高杯、頸部外面の文様をもたない須恵器中型甕に特徴がある。したがってこれらの土器群の主体は陶邑編年TK23~47型式、すなわち5世紀末にその年代が求められる。ただし、SD9850とSD9870出土の土師器甕を比較すると、前者は口縁端部に面をもたないため、SD9870よりもやや新しい様相を呈しているといえよう。また、SD9850出土の長脚二段の須恵器高杯脚部とSD9870出土の台付壺は、それぞれ陶邑編年TK43型式に比定できるものであり、周濠埋没時に混入したものと考えられる。

南北溝SD9334出土土器 (Fig.53) 高所寺池の南部で検出した南北溝SD9334からは、少量の土師器細片と須恵器中型甕が出土した(202)。この須恵器中型甕は、ほぼ完形で、体部外面中位まで薄く降灰している。体部上位には、円形の非降灰部分が確認できる。これは、窯詰めの際、体部上位に乗せた杯類の口縁部の痕跡である。体部は当具で内外面を上位から下位に向かって叩く。底部内面は、無文の当具でおさえたあと、ナデおよび半スリケシをおこなう。また、体部内面上位には、小さな楕円

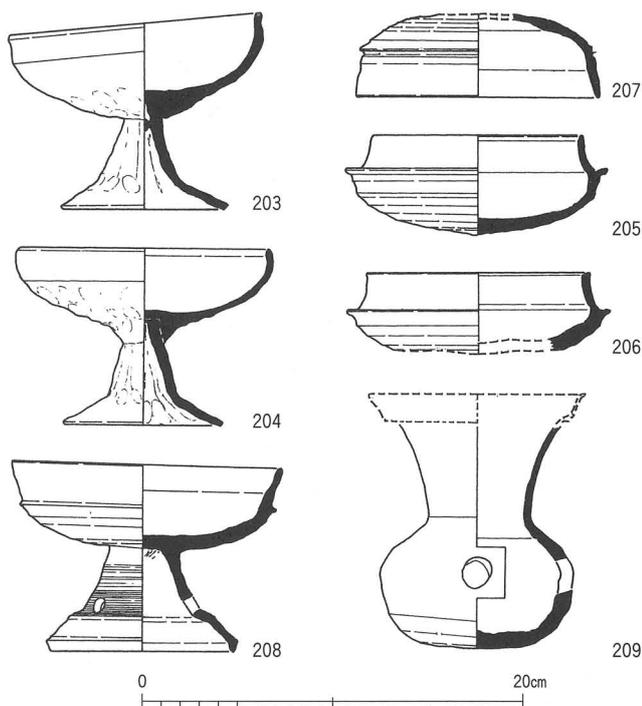


Fig. 54 南北溝SD9581出土土器 1:4

形の窪みが確認できる。これは、体部外面はタタキの後、部分的にカキメを施す際、体部内面上位に添えた指の痕跡と考えられる。口頸部は内面にロクロナデ、外面にカキメを施す。口縁端部外面には、下方に少し伸びる稜と面がある。口径27.0cm、器高47.5cmを測る。この甕の特徴は、口縁部外面と体部外面の一部にカキメを施すこと、

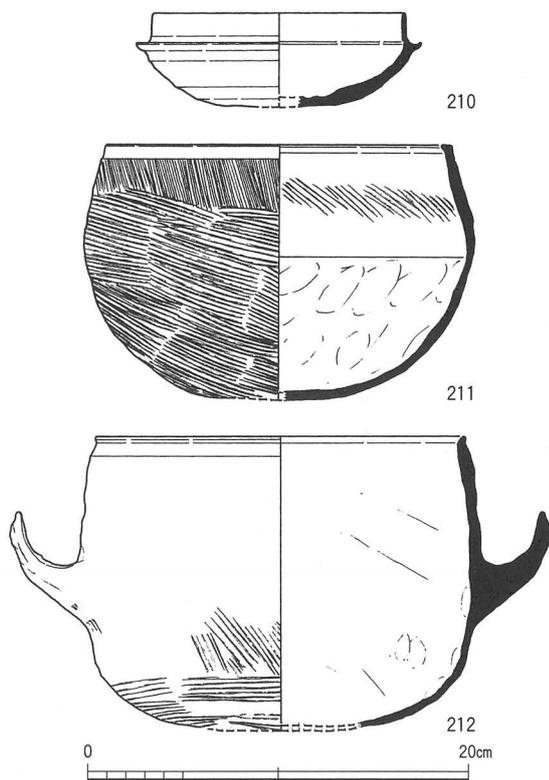


Fig. 55 その他の遺構出土土器 1:4

体部内面に当具痕の半スリケシがみとめられることにある。したがって、本資料は陶邑編年TK47、すなわち6世紀初頭に比定できよう。

南北溝SD9581出土土器 (Fig.54) 南北溝SD9581は、高所寺池の北辺に位置する。遺構面を検出したのみであるが、比較的まとまった量の土器が出土した。土師器には高杯が、須恵器には杯Hと甕がある。

土師器高杯 (203、204) の脚部は、いずれも絞り込み成形後、裾部をヨコナデし、端部を面取りする。杯部は碗形を呈する。口縁端部は、203が僅かに外反するのに対し、204は内弯する。調整は両者とも底部内外面をナデ、口縁部にヨコナデを施す。203は、厚みのある杯部底部に脚部を差し込み、粘土を補充して接合する。204は、杯部と脚部の境に粘土紐を巻き付け、ナデを施して接合する。法量は203が口径13.2cm、裾部径8.4cm、器高10.5cm、204は口径13.0cm、裾部径8.2cm、器高9.5cmである。205、206は須恵器杯H。205は丸みのある底部をもつ。206は底部の二分の一を欠失する。ともに口縁端部には形骸化した段が認められる。底部の四分の三程度にロクロケズリを施す。法量は205が口径11.0cm、器高5.35cm、206は口径11.6cmを測る。207は須恵器杯H蓋。肩部にやや鈍い稜をもつ。口縁端部は段をもたない。頂部の三分の二程度にロクロケズリを施す。口径は12.8cmを測る。208は無蓋高杯。杯部は底部外面をロクロケズリする。底部と口縁部の境には鈍い稜がある。脚部はカキメを施したのち、円形孔を穿つ。裾部は端部に面をもつ。法量は口径14.0cm、裾部径9.6cm、器高10.2cmを測る。甕 (209) の体部は、やや扁平な底部をもつ。口頸基部は太く口縁部に向かって大きく外反する。口縁部は欠失している。波状文などの文様はみとめられない。底部にロクロケズリを施し、体部中位には円孔を穿つ。

このように、南北溝SD9581出土土器には口縁端部の段が消失した須恵器杯H蓋や、文様を施さない、口頸基部の太い須恵器甕に最大の特徴がある。したがって、その年代観は陶邑編年MT15すなわち6世紀前半代に求められる。

E その他の遺構出土土器 (Fig.55)

斜行溝SD9582出土土器 (210) 斜行溝SD9582は、断割によって確認した遺構で、南北溝SD9581に隣接する。本遺構からは、須恵器杯H (210) が1点出土したのみである。本資料は、丸みのある底部に、直線的に上方へ伸びる口縁部がつく。口縁端部には段をもたない。口径13.2cmを測る。形態的特徴や法量から、陶邑編年MT15

(6世紀前半代)に比定できる。

大土坑SK9634出土土器 (211) 高所寺池の排水路に相当する部分で検出した大土坑SK9634では、鉢A (211)が1点出土した。約三分の一が遺存する。内面をハケメのちユビオサエ、外面にハケメを施したのち、口縁部をヨコナデする。口径は18.2cm。藤原宮西方官衙地区で検出した南北道路SF1082の西側溝SD1080出土資料に類例がある(『藤原報告Ⅱ』)が、今回出土した資料の方が器高が高く、やや大型である。飛鳥Ⅳに比定できよう。

土坑SK9635出土土器 (212) 高所寺池の北西隅に位置する土坑SK9635出土土器には、甕X (212)がある。寸胴な体部で、中位に大きく開く把手がつく。口縁部と体部の境は不明瞭である。口縁端部は軽く外方へ開く。体部内面はナデを施す。体部外面は全体をナデたのち、底部付近に粗いハケメを施す。口径は19.4cm。把手の形態から、7世紀後半代に比定できよう。

F 中世遺構出土土器 (Fig.56)

耕作溝を除く中世遺構の多くは、高所寺池の南半分で検出した。特に、113・131次調査では多くの遺構を検出し、良好な資料を得ることができた。一方、高所寺池の北辺や北西部では中世の遺構は検出されず、包含層からの土器出土量もごく僅かである。

井戸SE9328出土土器 (213~227) 高所寺池の南部に位置する石組井戸SE9328からは、土師器小皿、皿、杯、瓦器椀が出土した。土師器皿類の出土量が多い。

213~217は土師器小皿、218~223は皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする簡素な作りである。223は焼成後、底部の二カ所に円孔を穿つ。法量は、小皿が口径8.6~9.1cm、器高1.2~1.6cm、皿は口径11.4~11.8cm、器高2.0~2.4cmを測る。224は杯。全体の二分の一程度が遺存する。平坦な底部から、大きく外方へ伸びる口縁部がつく。底部内面から口縁端部直下をヨコナデする。口径は10.8cm、器高は3.4cmを測る。225~227は瓦器椀。断面形態が三角形を呈する、華奢な高台をもつ。器高は225が高く、227がもっとも低い。227は口縁端部内面の段が鈍い。型押し成形後、内面をナデ、口縁端部をヨコナデする。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残っており、225では指の関節の痕跡が確認できる。内面に施す圏線ミガキの密度は225が高く、227はきわめて低い。また、225のみ口縁端部にまばらにミガキを施しており、ミガキのない226、227よりも古い様相を呈している。口径は10.6~10.8cm、器高は3.5cm前後を測る。

石組井戸SE9345出土土器 (228~231) 石組井戸SE345

は、高所寺池の東南部に位置する。土師器小皿、皿、瓦器椀などが出土した。

228~230は土師器小皿、皿。口縁部はやや外方へ開く。口縁部と底部の境には鈍い稜がある。型押し成形後、口縁部外面から底部内面までをヨコナデする。これらの法量は、小皿が口径8.4cm、器高1.5cm前後、皿は口径11.4cm、器高2.4cmを測る。231は瓦器椀。断面三角形の華奢な高台がつく。口縁端部内面の段は明瞭である。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする。口縁部外面にミガキ、内面全体に圏線ミガキを施す。ミガキの密度は低く、粗雑である。口径は10.8cmを測る。

井戸SE9883出土土器 (232~237) 井戸SE9883は、高所寺池の導水路の北に隣接する。出土土器には土師器小皿、皿、瓦器椀がある。瓦器椀の出土量が土師器よりもやや多い。

232~234は土師器小皿、皿。いずれも底部の大部分を欠失している。口縁部はいずれも外方へ開く。皿は底部と口縁部の境に鈍い稜がみとめられる。口径は232が9.6cm、233が11.4cm、234が14.0cmである。235~237は瓦器椀。断面三角形の華奢な高台をもつ。口縁部外面のミガキもみられず、端部内面の段も鈍い。型押し成形後、口縁部外面から底部内面までをヨコナデし、内面に粗雑で密度の低い圏線ミガキを施す。口径は11.0~11.4cm、器高は3.2~3.6cmである。

石組井戸SE9884出土土器 (238~244) 石組井戸SE9884は、井戸SE9883の約5m東に位置する。土師器皿、土釜、瓦器椀などが出土した。

238、239は土師器皿。口縁部は外方へ開き、端部付近では上方へ直線的に伸びる。型押し成形後、底部外面を軽く削る。口縁部と底部内面はヨコナデする。口径は238が12.0cm、239は12.4cm。240は土釜。鏝部以下を欠失する。鏝部は短く伸びる。口縁端部上面には面をもつ。体部内外面をナデたのち、鏝部をヨコナデしながら貼り付ける。口縁部外面には工具の当たりが残る。口径は26.2cm。241~244は瓦器椀。断面形態が三角形を呈する華奢な高台がつく。口縁端部の段もきわめて鈍く、242や244にいたっては、段を消失している。型押し成形後、口縁部外面から内面全体をヨコナデする。口縁部外面は、まばらなミガキのあるもの(241、242)とないもの(243、244)の二者があり、後者には小型の製品(244)もある。内面の圏線ミガキも粗雑で、243はミガキの密度がもっとも低く、他の資料よりもやや新しい様相を示している。口径は8.0~13.2cm、器高は2.8~3.7cmを測る。

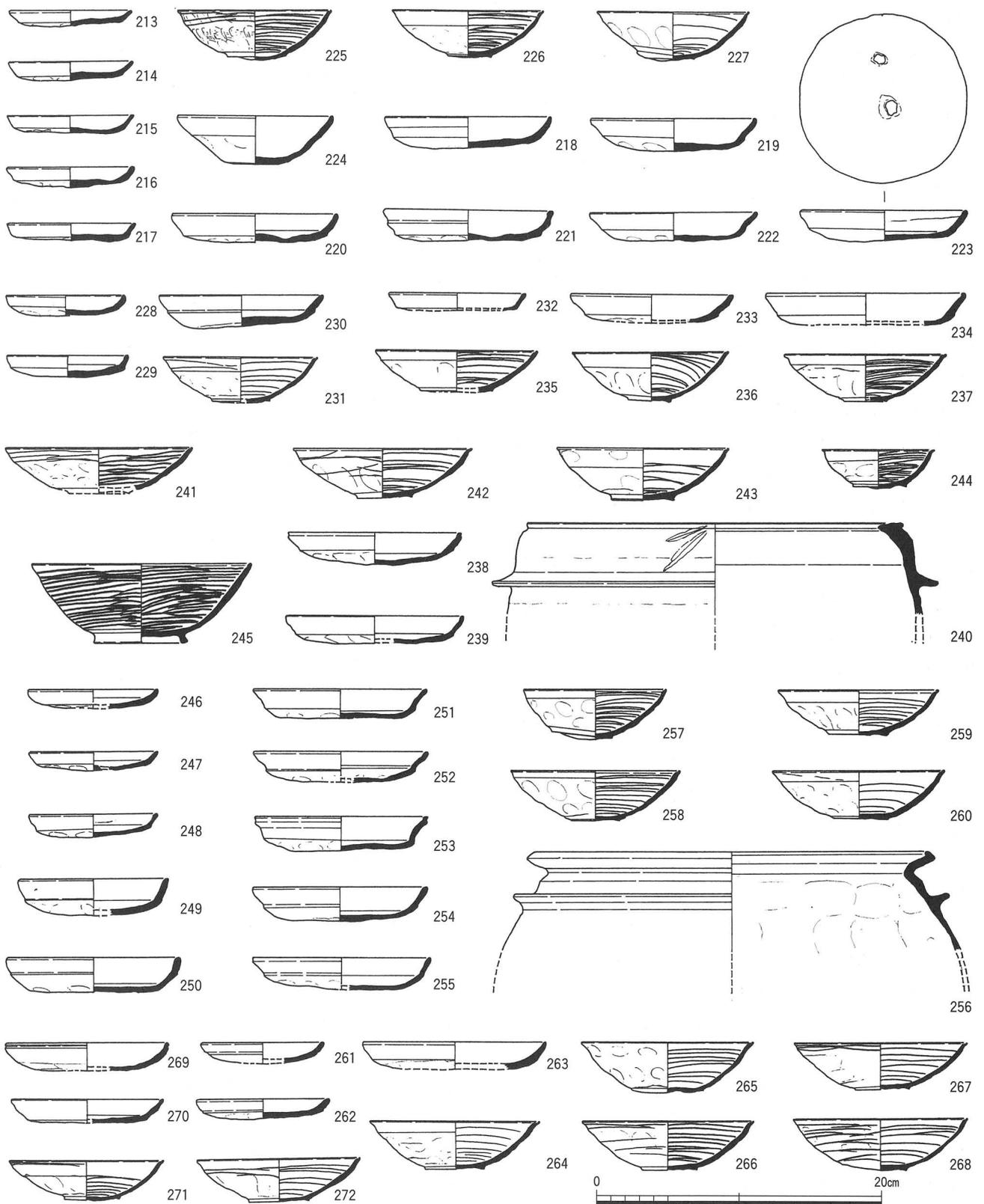


Fig. 56 中世の土器 1 : 4

井戸SE9885出土土器 (245) 石組井戸SE9884の東北に位置する井戸SE9885では、土師器片や瓦器片、黒色土器碗が少量出土した。黒色土器碗 (245) は、平坦な底部に、大きく外方へ開く口縁部と、垂下する高台がつ

く。口縁端部は丸くおさめる。碗は内外面をナデたのち、密なミガキを施す。高台は碗底部に貼付後、ヨコナデする。口径15.4cm、高台径6.2cm、器高5.6cmを測る。

東西溝SD9563出土土器 (246~260) 東西溝SD9563は、

南面内濠SD502の北に位置する。出土した土師器小皿、皿、土釜、瓦器碗の遺存状態は良好である。

246～255は小皿、皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする。小皿は口径9.0cm、器高は1.2～1.6cm、皿は口径12.0～12.4cm、器高2.0～2.4cmを測る。256は土釜。体部中位以下を欠失する。口縁部は大きく外反し、端部は内側へ折り曲げる。鏝部は短い。体部内外面をナデ、口縁部をヨコナデしたのち、鏝部を貼り付ける。口径は27.8cm。257～260は瓦器碗。いずれも内面の圏線ミガキは粗雑で、外面にはミガキを施さない。258、260の口縁部外面には粘土紐の接合痕が残る。口径は10.1～12.2cm、器高は3.2～3.6cmを測る。

土坑SK9326出土土器（261～268） 高所寺池の南端に位置する土坑SK9326では、多くの瓦器碗が出土した。土師器の出土量は少ない。

261～263は土師器小皿、皿。型押し成形後、口縁部をヨコナデする簡素な作りである。小皿は口径8.4～9.2cm、器高1.3cm前後、皿は口径12.8cmである。264～268は瓦器碗。丸みのある底部に、断面三角形の華奢な高台がつく。口縁部は大きく外方へ開き、端部内面には明瞭な段をもつ。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデし、内面には粗雑で密度の低い圏線ミガキを施す。264、265の口縁部外面はミガキを施さない。267は口縁端部付近に、266、268は外面全体にまばらなミガキを施す。口径は12.0cm前後、器高は3.5cm前後を測る。

土坑SK9327出土土器（269～272） 土坑SK9326の西側に隣接する土坑SK9327でも、SK9326とほぼ同量・同内容の土器が出土した。

269、270は土師器皿。底部を僅かに欠失する。口縁部は269が内弯気味に立ち上がるのに対し、270は外方へ直線的に開く。また、269の口縁端部外面には強いナデによってできた凹面がある。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする。底部外面は、269は軽く削るのに対し、270は不調整である。口径は269が11.4cm、270が10.7cmである。271、272は瓦器碗。SK9326と同様、丸みのある底部に、断面三角形の華奢な高台をもつ。口縁端部内面には明瞭な段をもつ。型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデし、内面に粗雑で密度の低い圏線ミガキを施す。口縁部外面にも同様のミガキを施す。口径は11.0cm前後、器高は3.0cm前後である。

以上が高所寺池の調査で検出した中世遺構出土土器の概要である。土師器小皿、皿はいずれも型押し成形後、口縁部外面から底部内面をヨコナデする方法で作られて

おり、法量も小皿は口径8.4cm～9.2cm、器高1.2～1.6cm、皿は口径11.4cm～13.2cm、器高2.0～2.4cmにおさまる。瓦器の法量は、口径8.0cm～13.2cm、器高2.8～3.7cmを測り、口縁部外面や内面にみられるミガキも粗雑で密度が低い。なかには口縁部外面のミガキのないものすら存在している。これらの土師器や瓦器碗は13世紀後半代に比定できる。一方、井戸SE9885出土の黒色土器碗は、内外面を密に磨き、安定した高台をそなえる。よって、その年代は12世紀後半代に求められる。

G 特殊土製品 (Fig.57～60)

本調査で出土した特殊土製品には韓式系土器、陶質土器、漆附着土器、ミニチュア土器、土錘、土製円盤、製塩土器、平瓶転用の尿瓶、陶棺などがある。なかでも韓式系土器、陶質土器の出土量が特に多い。それぞれの遺物の年代は、古墳時代から中世にわたっている。

陶質土器 (Fig.57・58) 陶質土器は、約50点出土した。高所寺池の東南部での出土量が特に多かったが、小片が多く、全形を復元できるものはない。器種が分かるものは壺、甕などがあり、293はほぼ全形を知ることができる資料である。なお、276～282および283・285～290は同一個体と思われる。

291～293は壺。291は体部下半を欠く。丸みのある体部に上方へ伸びる口頸部がつく。体部中位には一条の突線が巡る。外面には4条の波状文が巡る。口径は11.4cmである。292は体部上位の破片である。外面全体にカキメを施したのち、二条の沈線を施す。波状文は最後に施す。内面はナデ、およびユビオサエを施す。293は底部を欠失する。丸みのある体部にやや外方へ開く口縁部がつく。体部は内面にナデおよびユビオサエ、外面にはナデを施す。口頸部は二条の沈線と一条の凸線を施す。波状文は最後に施す。口径は9.0cmを測る。294は甕。口縁部のみの資料である。口縁端部は大きく外反し、端部外面には面をもつ。内面は全体にナデを施す。外面はナデを施したのち、ヨコナデによって体部と接合する。口縁端部は内外面をヨコナデする。口径は35.8cmを測る。

韓式系土器 (Fig.58・59) 韓式系土器片の出土点数は約40点である。出土地点は、陶質土器のそれとほぼ同様の傾向を示す。やはり小片が多い。器形が明らかなものとしては、コップ形土器、平底鉢、甕などがある。

295はコップ形土器。口縁部のみの出土である。口径は10.0cmである。296は平底鉢である。口縁端部と体部下半を欠失する。内面と口縁部外面はヨコナデする。297、298は甕。297は口縁部から体部上位にかけての資

料である。丸みのある肩部から外方へ開く口縁部がつく。口縁端部上面には平坦面がある。内面をナデ、外面を工具で叩いたのち、口縁部内外面をヨコナデする。口径は14.4cmである。298は底部の破片である。外面では、タタキの単位が明瞭である。内面にはオサエを施す。その他の特殊遺物 (Fig.60) ミニチュア土器は4点出土した。310以外は土師器である。309は高杯脚部。裾部端部を欠失する。手捏ね成形後、柱状部内外面にナデを施す。310は須恵器壺。口縁端部を欠失する。手捏ね成形後、体部内面を棒状工具で成形する。底部径は1.8cm。311は甕。完形に復元できる。全体を手捏ね成形し

たのち、口縁部をヨコナデする。口径4.0cm、器高3.6cmを測る。312は中世の土釜。底部を欠失する。半球形の体部に短く伸びる鋳部がつく。鋳部端部は丸くおさめる。口縁端部は内傾する面をもつ。外面には粘土紐の接合痕が残る。体部内外面をナデたのち、鋳部を貼り付ける。口径は4.6cmである。

313~316は土製円盤。出土点数は4点で、専用品と転用品がある。313は須恵器甕の転用品。重量は4.86g。314~316は土師器の専用品。315以外はほぼ完形で出土した。314には線刻がある。重量は314が23.14g、315が7.96g、316が50.5gである。

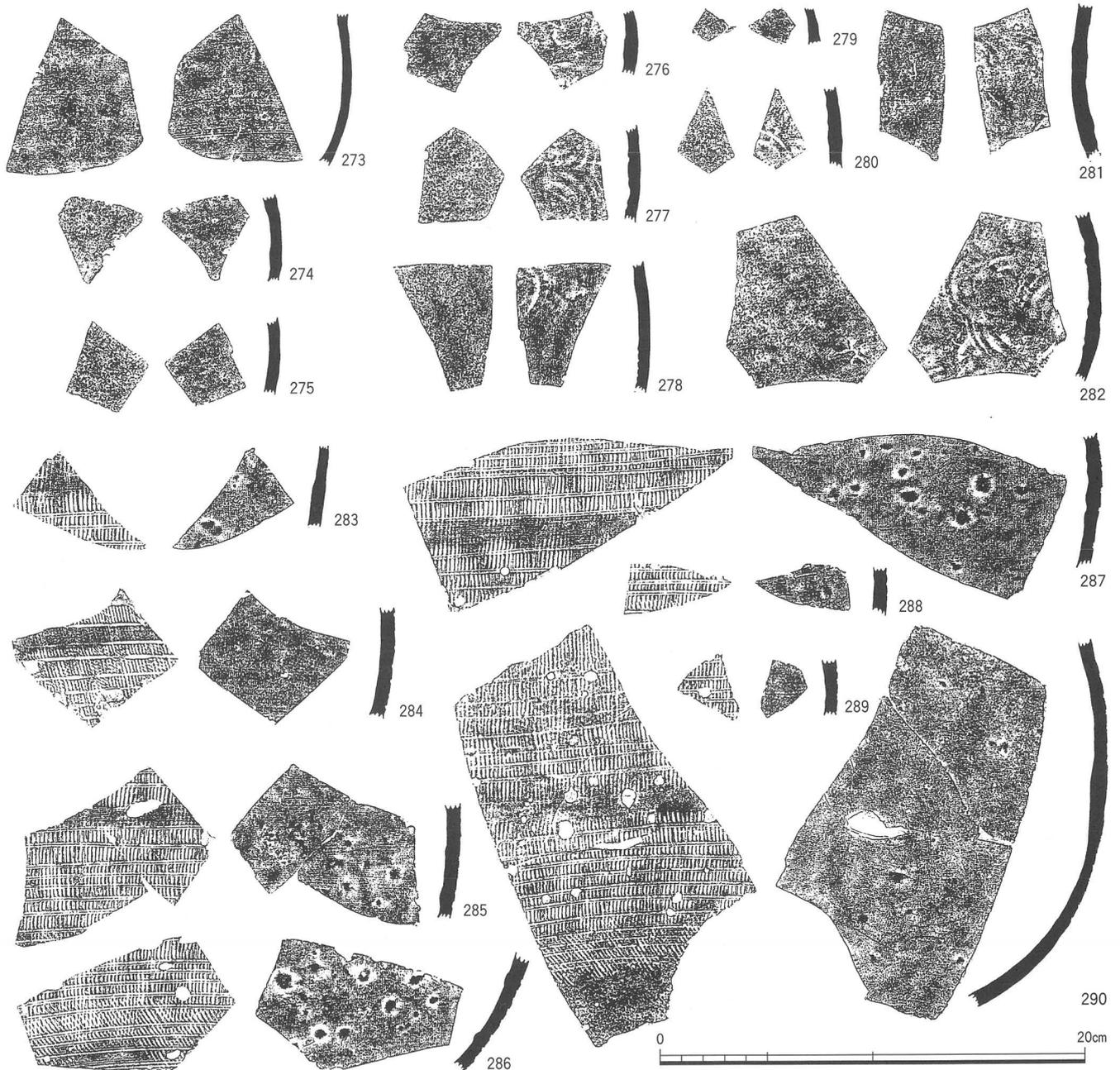


Fig. 57 陶質土器 1:3

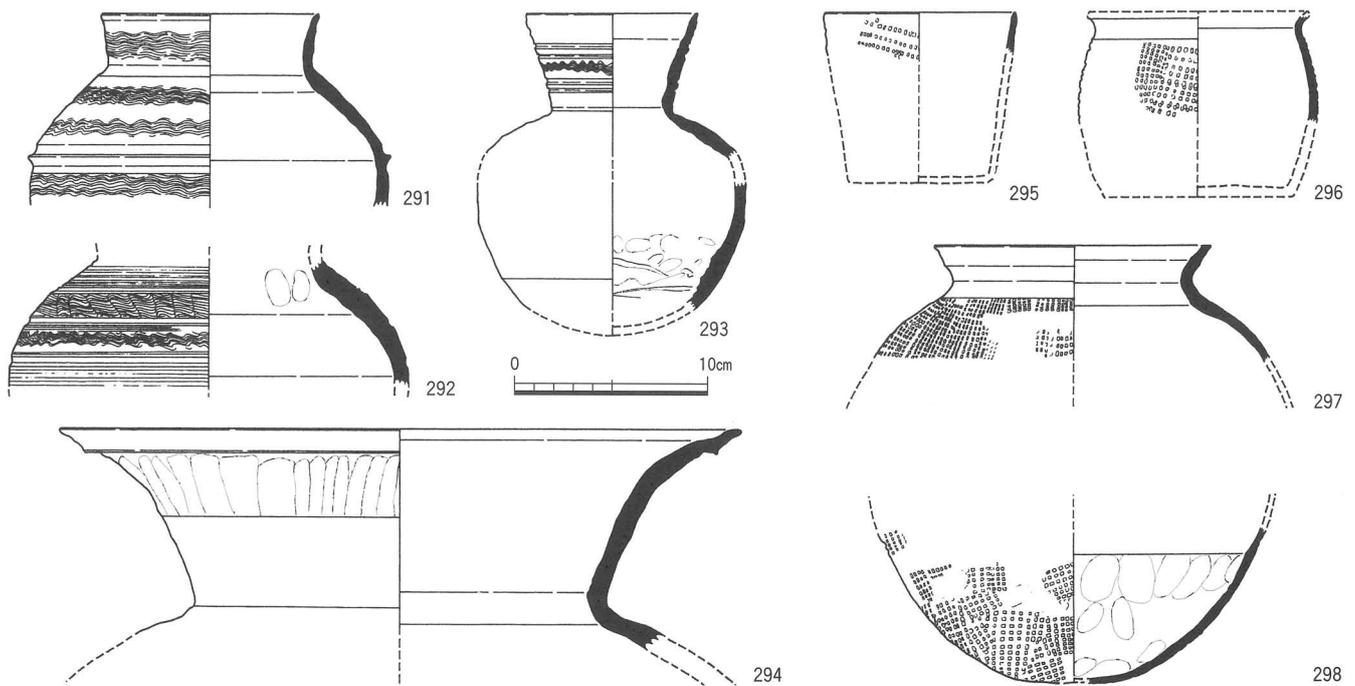


Fig. 58 陶質土器・韓式系土器 1:4

製塩土器は、個体数にして15点程度が出土した。古墳時代の製塩土器には小型丸底のものがある。古墳周濠SD9871の溝底からも出土したが、細片ばかりで図化できない。317は奈良・平安時代の製塩土器で口縁部のみ出土である。口径は復元できない。外面には粘土紐の接合痕が残る。内外面にはナデを施す。

土錘は2点出土した。大小二種あり、棒に粘土を巻き付けて成形する。318の外面には粘土の接合痕が残る。長軸の長さは4.0cm、重量は3.40gである。319は中位が張る形態である。長軸の長さは6.3cm、重量は120.95g。

漆附着土器は約120点出土した(320~338)。調査区全体から出土したが、高所寺池の北西部での出土数が特に

多い。しかし、遺構に伴うものはごく僅かである。出土量は運搬具よりもパレットの方が多い。パレットには土師器杯B、杯CⅡ、杯G、杯H、壺A、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、杯H、皿A、椀A、甕などがある。運搬具には須恵器壺、甕があり、甕の方が多く出土した。

320は土師器杯CⅡ。ほぼ完形に復元できる。底部外面をユビオサエし、底部内面から口縁部をヨコナデする。漆膜は内面全体に付着している。口径は15.0cmを測る。321は杯B。口縁部と底部の大半を欠く。漆膜は内面に薄く付着している。高台形は11.6cmを測る。322は杯G。底部の一部を欠く。漆はほとんどがはがれ落ちている。口径は11.0cmである。323は杯H。底部の大半を欠失する。漆膜は内面全体から口縁部外面に付着する。口径は14.4cm。324は壺A。把手の先端と口縁部を欠失する。体部の斜め半分を打ち欠き、体部を傾けてパレットとして使用したものと思われる。内面には漆を掻き取った痕跡が残る。漆膜は薄い。外面には漆が付着した痕跡は認められない。高台径は11.7cmである。325は須恵器杯A。底部を一部欠失する。やや丸みのある底部にやや外方へ伸びる口縁部がつく。漆膜は口縁部内外面に付着している。口径は15.0cmである。326は杯B蓋で、つまみを欠く。やや扁平な頂部に小さなかえりをそなえた口縁部がつく。漆膜はかえりにのみ遺存する。口径は12.0cmを測る。327、328は杯G。327は軟質で底部を一部欠失する。口縁部外面から内面全体に薄い漆膜が付着する。328は底部内面中央にやや厚みのある漆膜が遺存する。327は

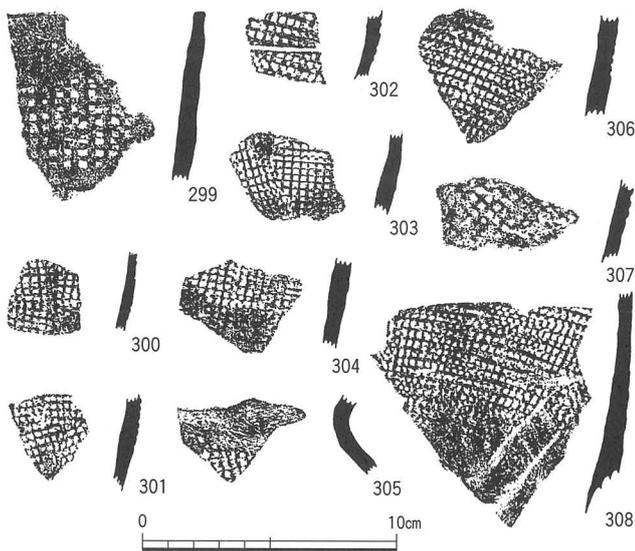


Fig. 59 韓式系土器 1:3

口径11.0cm、328は口径10.4cm、器高3.9cmを測る。329は杯口。やや上げ底気味の底部に、受部よりも突出する口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。付着している漆膜は薄く、内面の各部位で部分的に確認できる。元々は内面全体に薄く付着していたとみられる。330は椀A。

口縁部のみが出土した。漆膜は内面全体に付着しており、一部は口縁端部外面にも及ぶ。また、外面では漆液が垂れた痕跡が確認できるが図示していない。口径は21.0cmである。331~333は甕。完形に復元できるものはない。331は頸部の破片である。漆膜は内面全体に薄く付着し

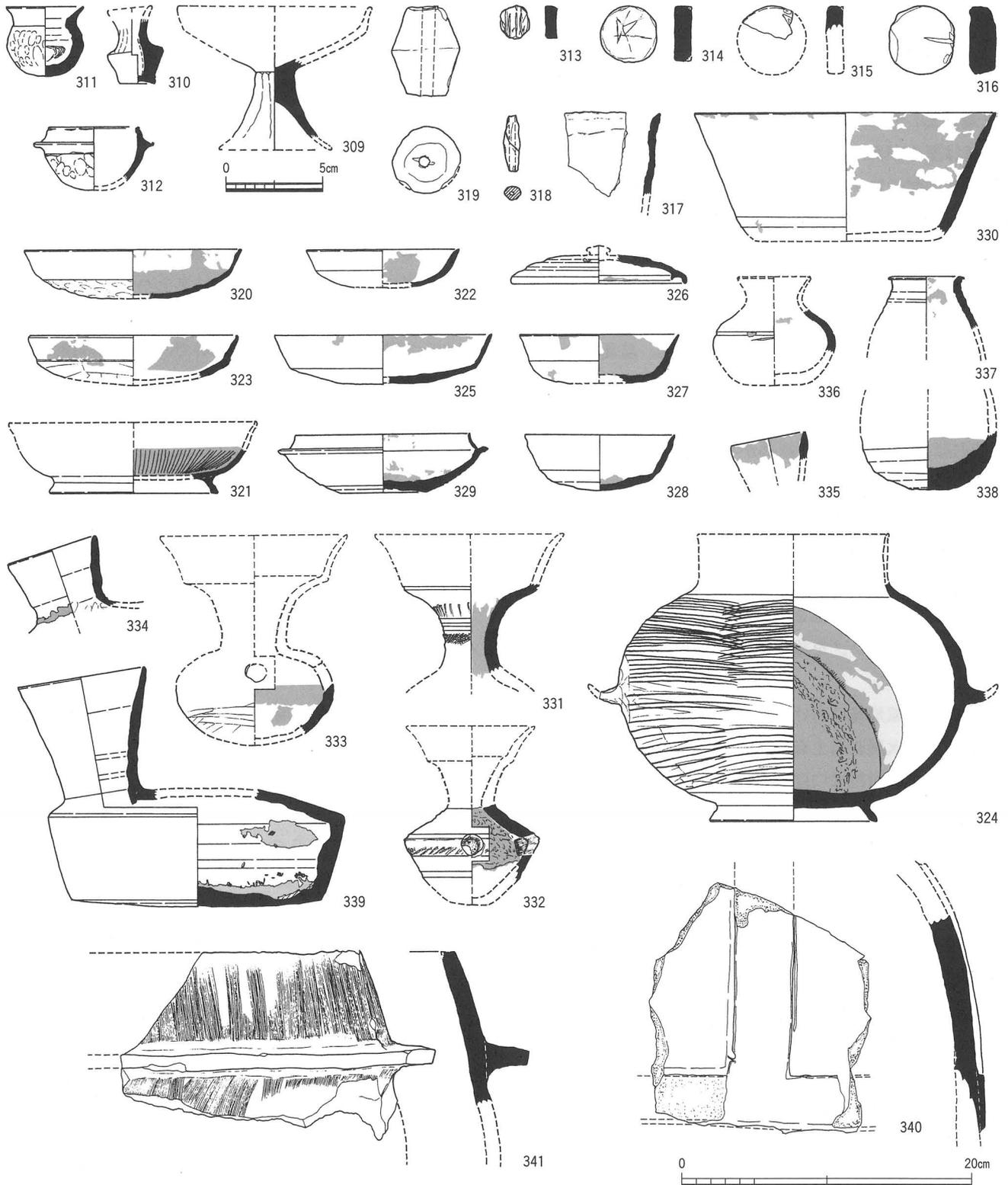


Fig. 60 特殊遺物 1:4 (309~312のみ1:3)

ている。332は体部上位のみが遺存する。漆膜は内面全体に付着している。肩部に設けた円孔には、栓として用いられた木の枝の痕跡が残る。333は体部下位の破片。漆は薄く付着しており、搔き取りの痕跡が確認できる。334、335は平瓶。いずれも口縁部のみの出土である。336～338は壺。完形に復元できるものはない。336は体部外面の一条の沈線をもつ。漆膜は小さく、体部内外面に少量付着している。337は体部下半を欠失する。口縁端部上面には面をもつ。漆膜は口縁部内面にうっすらと付着する。口径は5.2cm。338は底部のみの出土である。器壁は厚みがあり、外面にはロクロケズリを施している。漆膜は内面のロクロ目に沿って付着している。

339は平瓶で、底部の一部を欠失する。高所寺池の南辺に位置する東西溝SD9323より出土した。内面には白色物質と昆虫の蛹が付着している。蛹は蠅に由来するもので、白色物質はギブサイトである。尿瓶として利用されたものであると考えられる。口径8.9cm、器高16.8cm。

陶棺は2点出土した。340は蓋。頂部と口縁部を欠く。内面はナデ、外面はナデのち、突帯を貼り付ける。

341は須恵質陶棺の口縁部から受部にかけての破片である。これに伴う蓋は出土しなかった。本資料は隅部分である。直角に曲がっており、遺存状態も悪いため、長軸・短軸の別は不明である。口縁部はやや内側へ傾く。口縁端部上面には平坦面がある。受部はまっすぐ外方へ伸びる。成形後、鏝部を貼り付ける。その後、内面にナデ、外面にはハケメを施す。口縁端部上面は粗くヘラケズリする。

飛鳥・藤原地域における須恵質陶棺の出土例には石神遺跡17・18次調査出土資料などがある（『紀要2005』）。石神遺跡出土の陶棺は口縁部が受部より僅かに突出するもので、口縁端部は丸くおさめる。また、短軸・長軸を分ける隅部分はカーブを描いており、角張るものはない。このような形態の須恵質陶棺が一般に知られているものである（中町教育委員会2003『東山古墳群Ⅰ』）。これに対して本資料は口縁部が受部より大きく突出する点でかなり特異な例であるといえよう。

H 縄文土器・弥生土器

調査区全域から、10片ほどの縄文土器と少量の弥生土器が出土した。磨滅が著しく、図示しなかったが、縄文土器は前期後葉の北白川下層Ⅲ式～大歳山式、後期前葉の北白川上層式、晩期後葉の滋賀里Ⅳ式があり、弥生土器はⅣ～Ⅴ様式が主体である。いずれも小片であり、定住的な集落があったものではなく、周辺からの流れ込み

であろう。

I 埴輪 (Fig.61)

本調査での出土埴輪は130点以上ある。調査区のほぼ全域から出土したが、完形に復元できるものはない。出土地点は高所寺池の南部にほぼ集中する。特に古墳周濠SD9850・SD9870・SD9871の埋土やその直上層から出土したものが多し。円筒埴輪、朝顔形埴輪が多い。他に家形埴輪や盾形埴輪などの形象埴輪の破片も少量含むが、小片が多く図化できない。

342～348は円筒埴輪。うち、342、346は須恵質に焼き上がっている。出土地点は343、344、345が古墳周濠SD9850の埋土、347はSD9850直上層、342、346は古墳周濠SD9870直上層、348は高所寺池の北辺部の遺物包含層である。342～345は口縁部を含む破片。342は口縁端部を平坦に仕上げる。内面全体にタテハケ、外面全体にタテハケのちヨコハケを粗雑に施す。343～345は口縁端部から二段目までが遺存する資料で、口縁部外面には波状のヘラ記号がある。「N」字状のもの（343）と、曲線を描くもの（344、345）がある。343は口縁端部上面を丸くおさめ、端部内面もヨコナデによって丸くおさめる。内面は、二段目にタテハケを、一段目にヨコハケを施す。外面は二段目にタテハケを、一段目にナデを施す。のち、口縁部をヨコナデし、突帯とヘラ記号を施す。344の口縁部形態は、口縁端部内面を丸くおさめ、外面には外傾する面をもつもの。調整は内面全体にナメハケ、外面にヨコハケを施す。外面のハケメはかすかである。口縁部内面から口縁端部外面はヨコナデし、内面のハケメをナデ消す。345は口縁端部上面に凹面がある資料。内面は口縁端部付近までかすかなヨコハケを施したのち、口縁端部内面～上面をヨコナデする。外面はタテハケのち粗雑なヨコハケを施す。のち、突帯・円形透孔およびヘラ記号を施す。これらの口径は21.8～23.0cmである。346～348は基底部を含む破片。346は内面にナデ、外面にはタテハケのちB種ヨコハケを施す。のち、突帯や円形透孔を施す。概して調整は粗い。347は基底部から一段目の突帯までが遺存し、残存部分は全周する。内面は下半にハケメのちナデ、上半にタテハケのちヨコハケを施す。外面は基底部付近までタテハケを施し、のち突帯を貼り付ける。基底部は不調整。348はやや大型の資料。動物の骨とともに集中的に出土しており、本資料内面にも骨片が付着しているが図示できない。内面は大部分をナデるが、基底部付近にはハケメが残る。外面は基底部付近に至るまで、ほぼ全面にタテハケを施し、のち突帯を貼

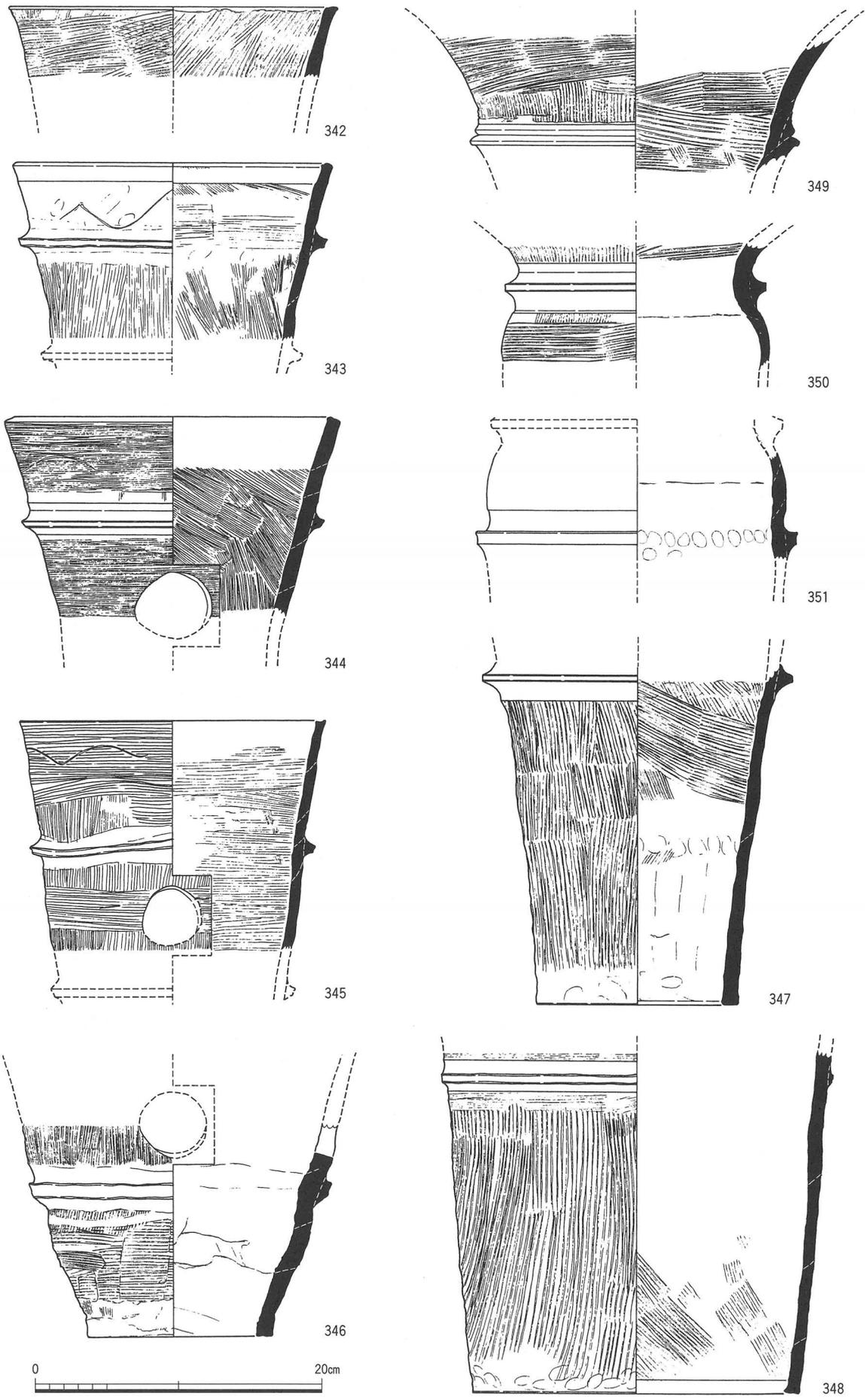


Fig.61 円筒埴輪 1:4

り付ける。突帯の上下にはヨコハケメを施す。基底部は不調整で、指頭圧痕が確認できる。これらの基底部は14.0~22.8cmを測る。349~351は朝顔形埴輪。349は内面にヨコハケ、外面にはタテハケのちヨコハケを施す。350の内面は、口縁にのみヨコハケを施す。外面は、タテハケのちヨコハケを施し、突帯を貼り付ける。351は軟質で、調整の詳細は不明である。

以上が本調査区で出土した埴輪の概要である。出土した埴輪は、いずれも無黒斑である。348がやや大型ではあるものの、大半は基底部径が15cm前後と小型である。基底部調整は施さないが、突帯の断面形態はいびつな台形を呈する。これらの埴輪は川西編年V期、すなわち6世紀代に比定できる（川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号）。なお、調査区周辺で埴輪が多く出土している遺跡には藤原宮朝堂院東第二堂や日高山1号墳がある。

J 小 結

高所寺池の調査では、縄文時代~近代にかけての土器が出土した。なかでも出土量が多いのは、5世紀中頃~6世紀前半代、7世紀後半~8世紀初頭、12世紀後半~13世紀後半の資料である。これら以外の時期に比定できる資料は、遺物包含層からの出土量を含めても、ごく少量である。

古墳時代 高所寺池内で出土する古墳時代土器で、古い様相を示すものは、5世紀中頃以降の資料である。前期に比定できる土器はほぼ皆無である。5世紀中頃は、高所寺池の東南部で、韓式系土器や陶質土器を多く含む井戸SE9570や溝SD9350が営まれた。これらの土器を利用したのは渡来系の人々である。5世紀末になると、高所寺池の西南部では窖窯焼成の埴輪や、陶器編年TK23~47に相当する須恵器や土師器をもつ古墳が造営された。これは先行する素掘井戸SE9570や溝SD9350を造営したのとは別の集団のものである。これら古墳周濠の埋土から出土した土器は、いずれもほぼ同時期の所産である。遺構の遺存状態が比較的良好であったSD9850にはTK43に比定できる須恵器高杯を含むことから、周濠の埋没時期をある程度は窺うことができよう。また、周濠や遺物包含層から出土した埴輪は、南方の日高山一号墳や、北方に位置する藤原宮内を流れる流路からの出土資料とは質を異にしている。これら古墳周濠よりもやや遅れて造られたのが高所寺池の北部に位置する南北溝SD9581・SD9582である。ここから出土した土器が、高所寺池内における古墳時代の土器で最も新しいものである。

藤原宮造営直前~藤原宮廃絶期 当該期には、藤原宮造営に伴い南面大垣SA2900とそれに伴う内濠SD502、外濠SD501、六条条間路南側溝SD4752が設けられた。南面大垣SA2900で仕切られた宮域内では、掘立柱塼や建物が構築され、東西大溝SD9633なども設けられた。掘立柱建物は何度も建て替えられ、一部は埋没した東西大溝SD9633に重複して建てられた。これらの遺構からは比較的多くの土器が出土した。出土土器は、煮炊具の出土量がかなり少なく、杯・皿類が大半を占める。硯などの筆記用具や墨書土器は小破片が僅かに出土したのみである。一方、宮域の外では、高所寺池の東南部に掘立柱建物SB9333や五角形井戸SE9330が営まれた程度であった。遺物包含層を含め、宮域外での藤原宮期の土器出土量はかなり少ない。このように、土器の出土量から見るかぎり、宮内においてはある程度の土地利用が窺えるが、宮外の左京六条二坊西北坪ではその様な傾向は見られない。

藤原宮廃絶後~中世 藤原宮廃絶後は、8~10世紀に比定できる土器はほとんど出土しなかった。奈良時代以後、多くの井戸や東西溝、土坑が営まれる鎌倉時代まで、当該地での活発な土地利用はなかったと考えられる。中世遺構出土土器は、井戸SE9885出土の黒色土器碗が最も古く、12世紀後半代に比定できる。その他の井戸や東西溝SD9563出土土器は13世紀後半代に比定されるものである。これら井戸や東西溝から出土した瓦器碗は、いずれも、断面三角形の華奢な高台をもち、内面の圏線ミガキの粗さも、ほぼ同様である。しかし、口縁端部内面にみられる段を観察すると、SE9884出土資料については、他遺構からの出土資料に比べ、鈍いことがわかる。したがって、SE9884出土土器は、他の井戸や東西溝出土資料よりも、年代的には若干新しい様相を示しているといえよう。また、14世紀以降の土器の出土量はほとんどないことから、この時期にも当地における土地利用の一つのピークがあるといえる。

4 金属製品・石製品・木製品

調査区内から金属製品・石製品・木製品が少量出土した。それらは弥生時代から中世にいたる時期のものであるが、古代の遺物は皆無に等しい。

ここでは飛鳥藤原地域でこれまで未発見あるいは未報告であった特殊な遺物に焦点を当て、古墳時代の銅鏡片、水晶製三輪玉、そして中世の石鍋を中心に報告する。

A 銅鏡

中国製の「長宜子孫」銘内行花紋鏡である (Fig.62-1, PL.43)。第118次調査北区の東西溝SD9633から出土した。

鏡面の約1/8破片で紐を欠失するが、深緑色の光沢をもち、磨滅も少なく遺存状態は良好である。復元直径14.5cm。縁厚3.5mm、面厚2.4mm、内区の最も薄い部分の厚さは1.7mmを測る。鏡面は縁端に向かって3mmほどの反りをもつ。破損面の研磨は認められない。鏡背には微量であるが赤色顔料の付着が認められる。現存重量45g。

紋様構成は、中央から鏡縁に向かって順に、円鈕、蝙蝠座、圈帯、連弧紋、凹帯、素紋平縁となる。外区紋様帯はなく、幅13mmの平縁の内側に幅7mmの無紋の凹帯が巡る。鑄上がりはよく、紋様は鮮明である。

鈕座弁間に「長宜」の銘文が鈕を中心に右回りに配置される。また連弧紋の間には逆字の「明」があり、その右側の連弧紋間には銘文の一部とみられる縦の2画が残存。「長宜」の字画は、左側の一画が外反する特徴がある。

「長宜子孫」銘鏡において、本例のような連弧紋間に「明」の字がある例は少ない。類例は国内になく、中国出土例に、羅振玉収集資料の「長宜子孫」銘鏡¹⁾と河北省易県武陽台村出土の「長宜子孫」銘鏡²⁾、河南省新郷付近出土の「長宜子孫」銘鏡³⁾があり、「長宜子孫」に続く銘文は、「明如日月 位至三公」、「明如日月 以父母兮」、「明如日月 利父母兮」である。これらを参考するならば、連弧紋間の銘文は、上の句を「明如日月」と推測できるが、下の句は特定できない。

「長宜子孫」銘の蝙蝠座紐内行花紋鏡の日本での出土例はこれまでに18例以上が知られ⁴⁾、出土地は、宮崎県から静岡県に及ぶが、分布の中心は北部九州にあり、近畿以東の出土例は少ない。

この鏡は樋口隆康氏の分類によれば、内行花紋鏡Bcイ式に相当し⁵⁾、年代は、岡村秀典氏のいう「漢鏡6期」、すなわち後漢中期にあたる2世紀前半から中頃に位置付けられる⁶⁾。

この鏡式の銅鏡は、国内では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての墳墓に副葬されるのが通有である。本鏡片は、7世紀代の土器を包含する東西溝SD9633からの出土品であり、その出土状況からみて、現位置からの移動が想定される。鏡背に付着する赤色顔料は水銀朱であることが蛍光X線分析によって判明しており、本来は古墳の副葬品であった可能性が高い。調査区内で発見されたSD9850やSD9870、SD9871など、藤原京造営時に削平された古墳の副葬品であった可能性がある。いずれにせよ奈良県下における「長宜子孫」銘の蝙蝠座紐内行花紋鏡の初出例としての意義は大きい。

B 水晶製三輪玉

半透明の水晶製三輪玉が1点ある (Fig.62-2, PL.43)。第118次調査北区の中世の耕作溝から出土した。

中央半球部の側面と底部を一部欠失するものの、全体の形状をよく残している。長さ4.2cm、最大幅2.1cm、中央半球部の最大高2.45cm。左右半球部の高さは2.1cm、重量36gを計る。左右半球部の幅は1.65cmと1.95cmと異なる。三山形をしており、左右半球部は中央部より小さく、中心軸をずらして中央部にとりつく。全体的に丁寧な研磨で整形されるが、底面は平滑に磨いているものの、研磨が粗いため、成形時の搗打痕がわずかに残る。

水晶製三輪玉は古墳時代中期後半から後期の遺物で、振り環頭大刀の把間部にとりつく勾金の装飾品である。古墳からの出土が通例であるが、本例は出土遺構と遺物の年代がかけ離れており、後世の遺構への混入品の一部みられ、上の銅鏡とともに削平古墳に副葬された遺物と考えて間違いないだろう。

C 石鍋

第113次調査東区の中世の石組井戸SE9345の上層から出土した滑石製石鍋である (Fig.62-3, PL.43)。井戸の堆積土中の最上層から、口縁部を上にして、斜位の状態出土した。共伴遺物はなく、井戸の埋没途上の窪みに単独で投棄されたものである。

横方向に傾斜する結晶面にそって体部中ほどで破損するものの、遺存状態は良く完形に復原できる。

石鍋の形状は、ほぼ平坦な底部から浅い体部が内彎ぎみに立ち上がり、口縁直下に断面台形の鏝が全周する。

口縁部は短く、端部は丸みをもつ。鏝と口縁部外周に5ヶ所の括れを入れて、上面から見た形を五弁の花形に作る。このような装飾効果をもつ石鍋の出土例はなく、花形に再加工された可能性がある。全体に丁寧な研磨によって平滑に仕上げられ灰色の光沢をもつが、体部下端

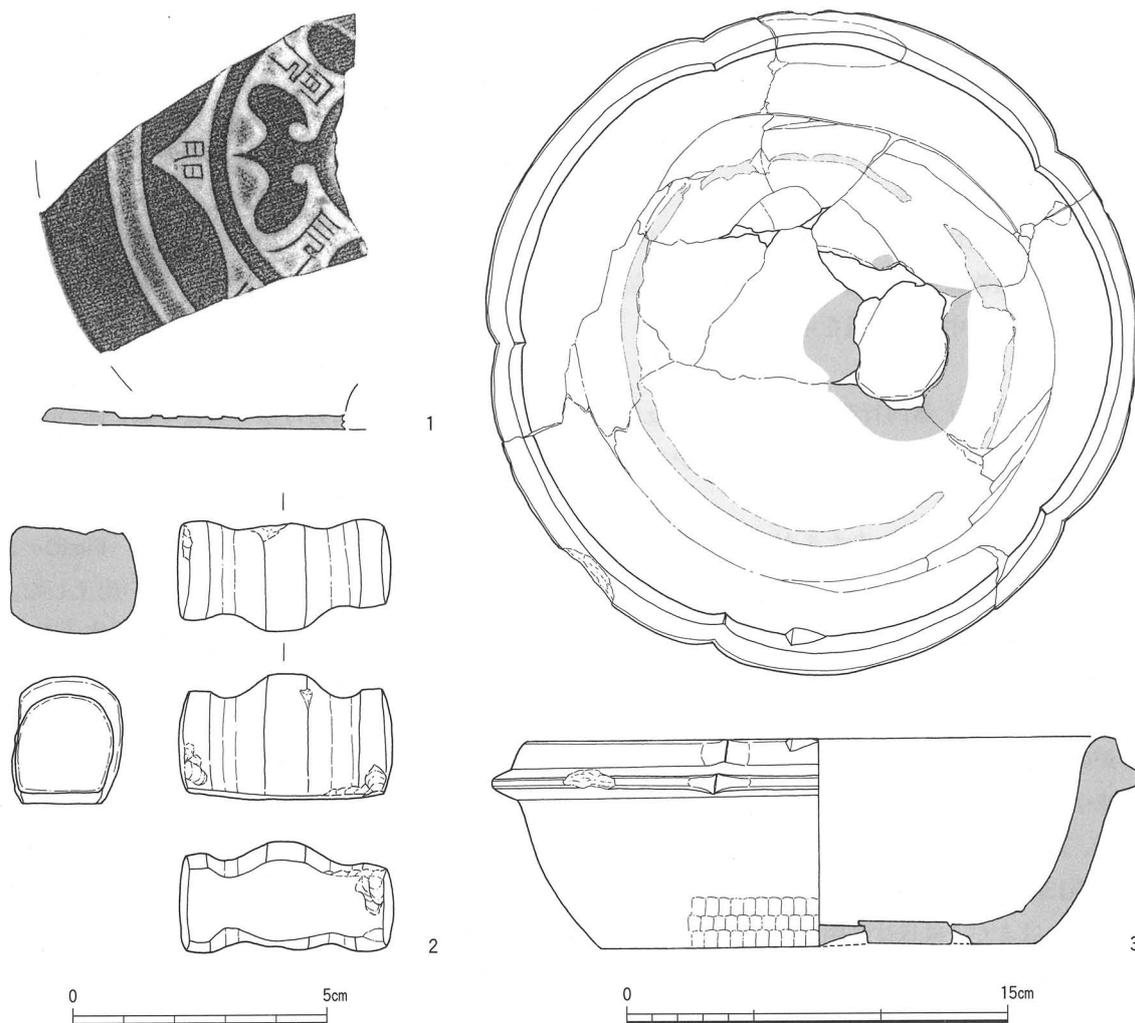


Fig. 62 金属器・石製品 2:3 (3のみ 1:3)

には鑿状工具による幅5mmの削りが段状に残る。また内面には使用時による横方向の擦痕が全面に認められる。見込み部から体部への立ち上がり部分に沿って幅3~6mm、深さ1mm程の窪みが巡り、使用による痕跡と考えられる。口縁端部から底部外面にかけて煤が付着し、煮炊に使用されたことを示す。口径23cm、鐔の径25.5cm、体部厚1.3~1.4cm、底径17cm、高さ8.2cm、重量2470g。底部は厚さ0.8~0.9cmと体部に比べて薄く、このためか底部中央が破損し、それを補修した痕跡がある。長軸5.1cm、短軸3.7cmの不整楕円形の穴を塞ぐように同質の板石片で埋め込んでいる。板石の周囲を研磨して形状を整えており、穴の周囲には接着剤に用いたタール状物質が残存する。タール状物質の成分分析をおこなったが、煮炊きによる化学変化を被っているため、材質を特定できなかった。化学分析による石材の産地同定は未実施であるが、石質や形状からみて、長崎県西彼杵半島産の可能性が高い。

石鍋は口縁部の四方に方形の把手がつくものから、断面台形状の鐔が体部中位にめぐるものへ形態変化し、その後、鐔が断面三角形状に変化しながら口縁端部と一体化することが知られている⁷⁾。本例は木戸雅寿氏の分類に従うとⅢ-a-2類に相当し、13世紀代に比定されるが、この年代は伴出した瓦器碗の年代観とも符合する。

石鍋は10世紀から16世紀頃にわたり、主に長崎県西彼杵半島一帯で生産され、九州を分布の中心として沖縄県から山形県にいたる広範囲に分布する。特に、草戸千軒遺跡をはじめとする瀬戸内海沿岸地域や京都、鎌倉から集中的に出土し、石鍋の一連の型式変化が全国の消費遺跡を通じて把握されている⁸⁾。一方、山口県宇部市所在の下請川南遺跡も石鍋製作所跡として知られ⁹⁾、局地的な石鍋の生産も論じられている¹⁰⁾。また京都大学構内遺跡出土の石鍋を分析した宇野隆夫氏はその生産地を京都府大江山に、河内一浩氏は和歌山県下出土の石鍋を紀伊山系の竜門山、鳩羽山山系に推定しており¹¹⁾、今後の発

掘によって新たな石鍋製作所跡が発見される可能性があるろう。

奈良県下では石鍋の出土報告例が少なく、石鍋の流通実態は不明な点が多いが、本調査地周辺でも以下の出土例を確認できる。①橿原市四分町（飛鳥藤原第10次調査『藤原概報4』）、②橿原市石川町（昭和63年下水道立会調査）、③橿原市高殿町（飛鳥藤原第41次調査『藤原概報15』）、④橿原市木之本町（飛鳥藤原第75次調査『藤原概報25』）。また、飛鳥藤原地域周辺でも、明日香村川原所在の川原大辻遺跡、桜井市纏向遺跡でも出土しており¹²⁾、石鍋が当地域一帯に広範に流通した状況を窺うことができる。

石鍋の流通背景としては、木戸雅寿氏により、海運を利用した権門社寺や貴族の流通介入が想定されている¹³⁾。当地域周辺に分布する高殿荘、喜殿荘、飛騨荘などの東大寺や興福寺、皇室等を本所とする荘園との関わりが推測され、木戸が指摘するように荘園やその領主、領家たる本所との関わりの中で石鍋が搬入された可能性があろう。しかしながら奈良県下における石鍋の流通実態や流通背景の解明にはさらなる資料の増加を待たねばならない。

D その他

石製品、鋳型片、炉壁、鞆羽口片、焼土塊、椀形鉄滓、獣骨、獣歯、焼土、木屑、炭、桃種子などが出土した。



Fig. 63 出土木製品

石製品にはサヌカイト製の石鏃と石匙、柱状片刃石斧、流紋岩製砥石、石英製白碁石、滑石製円板片があり、サヌカイトやチャートの剥片もある。木製品は14点あり、第113次調査西区の石組井戸SE9328から漆器椀3点、独楽未製品、鳥形木製品、柄杓、不明部材がまとめて出土した（Fig.63）。漆器椀はいずれも内外面とも黒漆塗りで、そのうちの2点には赤色漆で草木や丸状の紋様が描かれている。また、石鍋が出土した石組井戸SE9345の下層から櫛が、それ以外の中世の遺構から槽、杓子、合子蓋、曲物、部材、漆付着の曲物底板などが散発的に出土している。

註

- 1) 羅振玉『古鏡図録』巻下
- 2) 河北省文物研究所『歴代銅鏡紋飾』1996年
- 3) 梁上春著・田中琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』同朋舎、1989年
- 4) 埋蔵文化財研究会『倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題』1994年
- 5) 樋口隆康『古鏡』新潮社、1979年
- 6) 岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告第55集』1993年
- 7) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎的研究』Ⅸ、日本中世土器研究会、1993年。同「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年
- 8) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」前掲註7)
- 9) 宇部市土地開発公社・山口県教育委員会『下請川南遺跡』1987年
- 10) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」前掲註7)
その他、局地的な生産の事例に福岡県大牟田市四箇の湯谷遺跡や同県糟屋郡篠栗町周辺域がある。
森田勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術』148号、1983年
吉村靖徳・黒瀬茂文「福岡県篠栗南蔵院の滑石製石鍋製作跡」『古文化談叢』50（中）、2003年
- 11) 宇野隆夫『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学農学部校内遺跡調査会、1977年
河内一浩「和歌山県下における石鍋について」『中近世土器の基礎的研究』Ⅶ、日本中世土器研究会、1991年
- 12) 相原嘉之「(1) 1996－1次 川原大辻遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報－平成8年度－』、1998年
石野博信・関川尚功『纏向』奈良県立橿原考古学研究所、1976年
- 13) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」、同「石鍋」前掲註7)